

---

# 汗ばむ鳥籠

雪芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

汗ばむ鳥籠

### 【Zコード】

Z9184D

### 【作者名】

雪芳

### 【あらすじ】

心中した男女が川に浮かんだ。水死体見物にやってきた少年は舟に飛び乗る。……一方、別の場所、時に、一人の少女が口減らしとして殺されるかわり、男に売られた。彼女が旅の末にたどり着いたのは江戸は吉原。女を飼う、鳥籠だった。\*\*\*6月26日、おまけとして外伝を追加いたしました。

## 第一話「?・?・?」（前書き）

これは春工ロス2008（2008/3/20～4/20開催）  
参加作品です。企画特設サイトの作品一覧表の観覧または  
「春工ロス」などで検索すると、他の作品群も読めます。  
お楽しみ頂けましたら幸いです。

## 第一話「？？？」

あなたの棘に、  
満たされるために生まれた。

着物に頬かむり、下人の格好をした小柄な男が辻道をゆく。彼は小鳥のようにざわめく心臓を喉下に感じながら真顔を繕うと、四郎兵衛と呼ばれる見回り小屋の男達を横目にした。男達が視線を門から外しているのを見計らい、ひいふうみいと歩みを舌で転がして通り過ぎる。

一步また一步と、緊張で走り切れない歩みで背後にするは、鳥籠の象徴、柳の木。

それが完全に消えてしまつと、ついに男は手を大きく振って、膝を高々と上げて大川へと向かつた。

頬かむりが勢いに弄ばれ、後ろへと流れる。拍子に露出したのは、幼い影、少年であった。

冷静に頬かむりを両手で正すと、疾駆し、鳥のように飛翔する。風のように速かつた。それほどまでに、少年の心は高ぶっていたのだ。

そうだ、ずっと、……会いたかった。

山谷堀といつお堀をなぞるよつに進んで土手を上がり、少年はついに田的の匂いを嗅いだ。

むつと鼻腔に絡みつく、濃厚な水の匂い。次いで光が弾け、蒼穹

と水面とを踊る太陽光が、高揚を抑えきれずに彼の全身を包み込む。

眼下に横たわる大川、隅田川、と呼ばれる川のすがた。

少年は思わず、打ち震えた。こんなにも燐然とした隅田川は初めてだと感嘆に身をすくめる。

けれどすぐに目的を思い出し、遠く広くと小首を回した。  
探しているのは舟渡し。舟渡しを求めて勾配を下していく、ふいに田を止めると、彼は駆け出した。

身体が熱を帯びている。卵のような顎から汗が滴り、肺は肋骨を強く押し上げては引つ張り下ろす。

眩暈がした。倒れそうだつた。けれども、ここ倒れるわけには行かなかつた。

「すまないが

激しく空気を求めながら、川岸で火を焚く男たちに声を投げた。

適当に結んだ髪、これ以上焼けることは出来ないだろうと思われるほど黒い上半身を露出し、腰に布だけ巻いた男たちが一斉に目をやる。

じりりと、讃めるように動いた眼球の意図を彼は瞬時に悟り、後じきつてしまわないよう、ふくらはぎに力を込めた。

よくよく見れば、少年はとても奇妙な格好をしているのだ。瘦せぎには大きすぎる男物の着物をだらしなく着て、頬かむりを深く縛っている。

衣服と、衣服からちゃんと覗く四肢は泥をまぶしたように薄汚れていて、だが頬かむりに隠れた顔は、奇異なほど整っているようだ

つた。男たちに伺えるのは顎と脣くらいのものだらう、しかしその一部分だけを覗つても、著名な画家の絵筆を思わせる流麗さがあつた。

美貌の少年があえて大人の男の格好を真似てゐる。そのことに気が付いたのか、一人の男がにたりと笑つた。

「坊主、どつかの奉公から逃げてきた口か？」

少年は千切れる息を無理やり整えながらも頭を振つて、出来るだけ低い声になるよう、喉を絞る。

「そんなことは関係ない。それより、

……心中が見たい」

「なんだ、お前もあんなものを見に来たのか」「皺の深い舟渡しが、眉間に皺を寄せる。

「けつたいな世の中よ。……おい、客だ」

年長の舟渡しに手をこまねられ、火に手を翳して了一番歳の若そうな男が顔をあげた。

男はだらしない背骨を少しだけマシにすると、面倒くさそうに籠を担ぎ、よたよたと歩き出す。その背を追つて少しばかり下ると、川には一隻の古い舟が水面に浮かんでいた。

男は慣れた手つきで岸と舟とを結ぶ縄を繰りながら、

「一分だ」

「一分？」

舟賃が思つたよりも高くて、喉を騙るのも忘れて少年は聞き返した。

川を渡る橋は五つもある。よほどの急ぎ用があるか物好きでなければ、渡し舟など乗るものはいない。

川に舟を持つものは大抵、漁をしているのだ。そんなに金を取るはずがない。

「まあよ。見りや分かるだろう。心中見物つてのはな、良い見物になるんだ。男と女が腰紐を互いに巻いて川にふかふか浮かんでる。そうそう見れるもんじゃねえ」

確かに、川を一望すると、町人の乗った舟が多いようだった。彼らが見物のために金を惜しまないのならば、客商売、値がせり上がるもの必然なのだろう。しかし。

「そんなんに駄賃はない」

「それじゃあ、駄目だ」

「なんとかまけてほしい」

「はつ、駄目だ。お前が払わなくとも、客は何人と来るんだからな」

親指と人差し指で円をつくつて嘲ると、男は舟を戻そうと繩を引つ張った。

少年は呆然と佇立していたが、やがて意を決し、舟渡しが手繩をうとする舟へしなやかに飛び乗った。

「てめえ、降りろ！」

慌てて男が少年の袖を掴む。

少年は引きずり下ろそうとする手を無言のまま弾くと、せつと睨んだ。

そして。

「水夫よ

河のぬるりとした匂いが爽やかな風に押し上げられ、光彩は喜びに羽を広げる。

少年は口角をあげていた。光に皮膚の境界を失い、景色と同化する。いやむしり、内から光を放つているようにさえ思える。

男は心を奪われた。

瞬間に忘却の極地へと立たされる。夢見のようだ、その情景は美しかった。

「銭より何より、いいものあげる」

頬かむりを外し、くるんと首に巻く。するつと下りる緑の黒髪と、猫のような瑠璃の流し目。紅色のふつくりとした唇に、僅かにのぞく女の色合い。

少年ではない、少女だ。  
いやしかしこれは、

「わづちを、好きに鳴かせて良じよ」

魔性だ。

彼女はある北国の寒村に生まれ育つた。

長い冬は村にやつれた灰色の空を与える。

加えて閑散とした侘しい山を与え、雪解け水による沼地を与え、底知れぬ貧しさを与え、更には土地柄による慢性的な飢饉を与える。

彼女の知る自然は厳格で冷徹で、血を失った死体のようだ。

誰も彼も腹をすかせながら仕事をしてて、男は恵まれない土に鍬を刺し、女は赤ん坊を背負いながら冷え切つた川で汚い染物をしきどもまでも寺子屋を済ませると汗水たらして働いている。みな、手が年寄りのようだった。

そんな貧しい村の農民の九番目として彼女は生を受け、育つた。姉たちの背中に背負われ、働く両親の何かを悔いでいるような眉間と、刻まれた苦労の皺を網膜に焼き付け、大きくなつた。

彼女がようやく寺子屋へ通うことを許されたとき、村に病が流行つた。

とはいっても、稻穂につく病で、それでも彼女の村では死を表すも同然だった。

ただでさえ貧しい土地、稻以外の作物も思うように実らない。

いつも芋粥ばかり食べていたのに、その粥に、僅かばかりの米がなくなつたとなれば、村の者はなにを食べれば良かつたのか。

最初に、子どもたちが消えていった。

子どもたちがどこへ行つたのか、大人たちの疲労しきつた瞳が恐ろしく、彼女はそれを問うことなど出来なかつた。

大人たちは寒い大地の者特有の赤い頬をより紅潮させて、同じよう口を開く。

村の外には出るな、川の近くには行くな。天狗と河童が出るぞ、

と。

ある日、川に河童を見に行つた彼女の兄が、震えながら帰つてきたことがあつた。そのとき兄は煎餅布団にすっかり丸まつてしまい、翌朝まで出てこなかつた。

ようやく姿を現したと思いきや、青ざめてこんな事を耳打ちした。「河童はおつた。だけど、キネだつた。キネだつたよ」

キネとは、隣の家に住んでいる、末娘のこと。彼女よりひとつがふたつ下で、仲は良くなかつたけれど、知つていた。

やがて秋も終わりに近づき、枯れ草の量から厳しい冬の予感が香つてきた。それとともに、村は更に悲哀と疲弊とに包まれていつた。乞食の死体が道端に転がつて、空き家が増えた。村を捨てたのだ。家ではもう、芋さえ少なくなつていて、母は嫁入り道具の着物を売り払い、箪笥を売り払い、寂しい家はどんどん寂しくなつていつた。

かまどに埃が積もる、早朝。ついに困窮した彼女の両親は、下の子どもたち三人を、奉公に出すこととした。

奉公といえば聞こえは良い、要は口減らしだ。  
人買いに、売られたのだ。

最後に仰いだ両親の目はまるで漆のようで、とても底の知れない

ものだつた。人買いの男に錢を貰つ一人を見て、彼女はむしろ、安心したのだ。

「殺されぬくて、済んだ」

こうして彼女は、生まれ育つた村を後にし、人買いと共にどこかへと向かつた。

距離は遠く思われた。歩いても、歩いても、「まだまだ先だ」と言われるのだ。

何故に人買いが遠方にある貧しい村まで来て彼女を買つたのか、分からぬまま、彼女は足を棒にしてついていった。

足の痛さと、ほんの少しの寂しさとを食いしばりながら、いくつかの関所を手形で抜けた彼女は、

日光街道は下野の南方、今でいう栃木県那須郡にいた。

「今日は宿に泊まるぞ」

ぶつきらぼうに人買いが言つ。

「風呂があるところだ」

野宿といつても差し支えないくらいにぼろぼろの宿で雑魚寝することが殆どだつたこともあり、彼女はほんの少しばかり喜んだ。しかしすぐに気持ちは、沈んだ。

人買いを見上げる。彼は彼女が買われるまでに出会つたことのない風貌の大人だった。

まず、大きな傷が顔にあつた。

右のこめかみから鼻先、そして左耳たぶの下へと、醜く太い線が

走っている。刀でばっさりと切られたのだろう。その強面に不精髭が加わって、野獸を思わせる威圧感が漂う。

背は驚くほど高く、平均的な大人の身長より頭ひとつぶるあるようだった。

その天に伸びた背筋を、髪も何もない手のまつたくついていない長髪が覆う。

遠くで見たら、食食のよう。近くで見たら熊だと、彼女は思つ。しかしながら名は、どちらか。

この男と宿に泊まるのだといつて、彼女は少し不安を覚えた。

素早い歩行に置いていかれては、離れてしまった距離の縮まるのを待たれるという旅は、どうこちといつ男のこと詳しく述べてくれない。

夕と晩の食事も沈黙がおかげで、日が暮れたら早々に寝てしまつ。話といふ話をしたことがない。

この男と宿に泊まるのだろうか。

食事を用意されるだらうし、寝るときも盗人にあまり気を配らないくて良い。その環境は、寡黙な男の脣を僅かに解してしまうだらうか。

思考を弄んで彼女はふざめ、緊張した。

街道脇の小さな宿に入る。風呂があることを表す匂も、小さいものがかかるつている。

部屋に案内されると、とうとう荷を肩にかけたまま女将を呼び止めた。

「なんしょう」

「すぐに湯は用意できるか」

「あい。もちろん浴場が」

「貸してもらおう、どこだ」

女将に聞いてさつと風呂に行くと、ところでは荷から錢袋だけ取り出して腰に巻きつけた。籠へ荷を投げ込むと、服を脱ぎ始める。

彼の体は肉付きがよく、鍛えられているようだった。農民とは違う、土の汚れのない筋肉は呼吸と共に密やかな躍動を抱く。

「何をしている、脱ぐんだ」

ぱうつとしていたのを叱咤され、彼女は大急ぎで隣にあるだらつ女湯へつま先を前進させた。が、首根っこを掴まれて阻まれる。

「何処へ行く

「お、女湯」

「お前のどこが女だ。じぼうみみたいな体のくせに」

ムツとあるより先に、瞪若した。この男もこんな口を聞くのか。

「脱げ」

とらいちが乱雑に彼女の着物を垂つていく。平坦でふくらみもなくびれもない、下の毛も生えていない身体が外気に晒され、彼女は小さく唸つた。

「ほら、お前のどこが女だ」

その言葉に彼女の丸い目が再びとらいちの顔をなぞつた。彼が目を細めたような気がして、少しばかり、彼の中の人間が覗いたよう

な気がして、彼女はその顔をまじまじと見た。

「」の、醜い傷のある男は、どんな生き方をしてきたのだろう。

思案を繰ってみると、驚きに押されていた腹立たしさが不思議と湧いてきて、彼女はふてぶてしく腕を組んだ。

「おらだつて、そのうち女になるよ。おつかあは村一番の美人なんだ。おつかあみたいに綺麗になれるかは、わがんねえけど」「人買いに不遜な態度で身の上話をするのは初めてで、怒るだろうかと思つた。

が、ところは怒るでなく、ただ針山のような不精髪を搔いただけだった。

## 第二話「未熟な瘦躯」

大浴場に入ると、もう少しが瑞々しい湯気が踊った。湿っぽく温かい匂い。彼女の白い視界にはとらいたしかいない。

ふたりぼっちの浴場で、男は桶に湯を汲むと、豪快に彼女の身体にぶつけた。真っ先のこと、あまりにも突然のことにして、むせる。

「さつき、母親のこと話をしただらう。あれも、女じゃない」

その口ぶりに、彼女は自分の言葉が彼の心の何かに触れてしまったのを知った。無表情の、とても深い黒の瞳が幼い肌を刺し、心臓を潰すように握りこんでくる。

とらいちは彼女の細い腕を引っ張った。

拍子に彼女が転んでも、そのまま引きずる。そして鏡の前に立ち、彼女の肩甲骨を押した。鏡の曇りを腕で拭い、折れそうな肩を掴んだまま、鏡に映す。

肩をがつちりと掴まれて、彼女は自分の幼い身体を見た。

全身を鏡で見るなど、生まれて初めてのことだ。自分ではそれほど気にしていなかつたが、確かに女とは言いがたい身体だ。まつさらな雪に野いちじだけふたつ落としたような、頼りない瘦身。

背後にある、猛禽のような双眼がそんな彼女を凝視している。

彼女の頬に左手添えると、

「よく観察しろ。お前自身の身体を。他人との違いを。お前は、どうがお前らしい?」

訊ねられ、見当もつかず彼女は首を左右に振った。

「まず、髪がある」

髪を手のひらで撫で、五指で弄ぶ。

「芯の強い素直な黒髪。しかし光に透かせば茶色に輝くな。肩までか。短い、伸ばすだ」

流れるように顎を引き、  
「次に顔の形。

お前の両親は器量良しだ。お前は運よく両親の良い部分ばかり貰つた。骨も肉も皮も、申し分ない。では、身体はどうか。芋粥ばかり食べているせいでの、痩せているが

どんな思惑のあつてのことか、とらいたは彼女の腕を持ちあげ、彼女の内側の隅々まで晒した。

当然の事ながら彼女は羞恥と、男への恐怖を感じ始めた。父親でもない男に、何故裸体を晒さねばならないのだろうか。しかも男は、獲物の動きを観察するかのような殺氣を隠さず、放ち続いている。

晒すだけでは終わらず。

その手が、彼女の身体を順々にまさぐり始めた。熊のよつた容貌にそぐわない細く長い手が、しなやかな蜘蛛のよつて彼女の柔らかな肉を這う。

「やだ」

彼女は両手を上げながら身をくねらせ、抵抗の声を呴いたが、彼は構わず乳房へと指先を落とす。

胸の先端にある朱を、指の腹が掠めていく。

「母親や姉たちと同じように、お前の乳房も大きくなるだろ？。しかし着物には合つ、ちょうど男の手に納まる大きさになる。ぐびれが出来る。尻は少しばかり小さいかもしない」

「やだ」

まるで彼女の訴えが聞こえないかのように、

「太ももにも肉がつべ。しかし中年になつてもそれほど肥えはしない。

足は小さい。草履やら探すのに苦労しそうだ。

手も小さいな、これもそれほど育たない。初々しさを残したままになる。腹に手を当ててみる」

掲げられていた彼女の両の手に男の両の手が重なる。一人の手がひとつとなつて彼女の腹を押す。そして空へと浮かび、曲線を描く。

「この下には赤ん坊ができる。女だけが持つてこる、赤ん坊が育つといじが膨らんでくる。まるで蛙のようにでつぱりと膨らんでしま

う」

再び腹を押すと、今度は滑らすように下へと引く。

その先には、少女自身あまり触れない場所がある。迷い無くそこへと指先は落ちていぐ。人間の端、そして先端でもあるそこへと。

「いやだ！」

ついに堪りかねて、彼女は男を突き飛ばした。

だが細く弱々しい彼女の身体は逆につんのめり、床に崩れる。膝と尻とをついた同時に、彼女は男を怯えの目で仰いだ。

「最後に、お前の目」

男 、「とうにちがにたりと笑い、指をさす。

「病気ではないのに、右片方だけ薄い緑色をしている。

お前のような目を持つ人間を探して、俺はこんな北まで来たんだ。その目は稀だ、なにより武器になる。

だが女じやない。それがお前だ。ただの、女の素だ」

腹の底まで響くような低い声。彼女は自分が洞窟にでもなつてしまつたような感覚に襲われた。

女の素といふ、ただ一言が彼女の中で木霊し、蝕み、内側の四方八方を引っかいてゆく。

とらいちは茫然自失とする彼女に顎をしゃくった。

「風呂に入れ」

言われて、彼女はふらふらと風呂の淵にすがり、ゆっくりと湯船に浸かった。警戒しながら、鼻の下までうずまつた。

とらいちはもう彼女の峻拒を受け入れたのか、自分自身の身体を洗い始めた。

貪るように触れてきたたくせに、まるですっかり忘れてしまったかのような処遇。

彼女は湯の中うずくまつた。

どうしたことか。身体が、湯船よりもはるかに熱いような、だが雪よりも冷たいような気がする。

特に臍の下あたりが、じんじんと疼く。何かが滾る。

身体を浸食する不可思議な感覚。その未知の痺れに戸惑いながらも、一方で彼女は現状に冷静であった。

この男は人買いで、彼女に彼女自身の価値を教えようとしたのだ。己というものの、売られたということの現実を。そして、彼女の価値は女になつたら劇的に変化するだらうということを。

教え、彼女は知った。

……自分は、物なのだ。

状況を整理してみると容易い。今度は斬られたように胸が痛んだ。心臓から悲しみが滲み出て、彼女の身体から熱を奪っていく。

死なずに済んだ。しかしあつ村には帰れない。

酷く貧しい村だった。だが生まれ故郷といつものぞそこに在るだけで人を癒すものだつたのだと彼女は今更に思い知っていた。

毎日見た硬く凡庸な景色が、今はとても柔らかな美しいものに思え、無性に戻りたい。帰りたい。

父と母と兄弟たちが厳しい顔をして畠を耕しているその傍へゆきたい。

彼らは時折、寒さに凝り固まつた顔を綻ばせるだらう。

そして無条件の、家族同士にのみ許された愛情を僅かに傾ける。

本当は漆のような眼などして子供を売るような人間ではないのだ。

どうして自分は、故郷にはいられなかつたのだろう。自分が何をしたのだろう。何をしたというんだろう。

自分たちが一体なにをしたんだといつんだ。

彼女はお湯に顔ごと突っ込んだ。

輝く水面を湯の中から見上げ、思ひ。いつそ河童の方がましだつたんじやないか、と。

おらはこれから、どうなるんだりつ……。

今すぐここに湯から飛び出し、街道を駆け出し、家族の胸に飛び込めた。

夢想し、目を開やす。愚かなことだと、涙が湯に溶け込んでいく。本来なら死んでもおかしくはない命を、偶然、運よく買われたのだ。全てを受け入れなければ、このさき生きてはゆかれない。分かっている。それでも。

彼女は密やかに、仏にすら聞こえてしまわなによつて、家族の名前を口ずさんだ。耐えるために、名を呼んだ。父と母と、兄弟たちの名前を。

時は安政六年、今でいう西暦一八五九年。日本が文明開化の扉を開ける、ほんの九年前のこと。

彼女は、十歳だった。

## 第四話「四角い鳥籠」

宿場での出来事から更に歩き、足の裏にまめを作りながらの一人旅。街道を沿つて行き、彼女はついに目的地らしき町に辿りついた。彼女の住んでいた村や、今まで通つた町並みをはるかに凌駕した大きさ、広さ、美しい瓦作りの建物、なにより目を回すほど人がいる。

「迷うなよ。はぐれたら一度と、俺にも、親にも会えないと思え。ここは田舎者には生きづらい、江戸だからな」

江戸。

百万人がひしめき合い、息づく場所。

隅田川という大きな川に架かる大橋を渡ると、左手に大きな城が震んでいた。そこに向かうと思いきや反対側へと回つて、城を背にする。

柳の木が並ぶ堀をなぞりながら太い辻をいくと、いくつかの建物を囲む塀が覗えた。珍しいことに黒っぽい色をした小高い塀の中央部には橋があり、堀が掘られ、大きな門が口を開けている。

門は奇怪な形をしていた。丸に、上のほうが鋭く尖つていて、中央にぽつかりと穴が開いている。鉄の扉が左右に開き、蝶が留まっている様にも似ている。拱門なのだ。

橋をおずおずと進んだ。橋の下の堀は下水道なのだろう、僅かに濁っていた。

「来い」

とらいちが彼女へと手を伸ばす。素直に彼女はその手をとつた。とらいちの手のひらは少し汗ばんでいて、それなのに不思議とさうさらして心地が良い。

二人は門へと手をつないで歩き、ぐぐつた。

門を通り抜けてしまつととらいちは彼女の手を振るよつて外し、数歩進んでから、首だけ振り返つた。

「じいじが今日から飼われる鳥籠だ」

深く息を吸うとらいちの背中。いつもは大きいと感じるそれが、何故だか小さく思え、目を擦る。

目蓋を開くと、とらいちはまた、大きいとらいちだった。

「今日も、女臭い」

鼻先に大きな辻が真つ直ぐ伸びている。脇には茶屋らしき建物が佇んでおり、先ほどまでいた場所と同じづくりだが、まったく異なる場所に来たようだと彼女は思った。

まず、音が違う。人のざわめきに紛れて琴や三味線、太鼓の音が聞こえる。たわみ、絡み合ひ……、心地は良いのだがどこか夢見のようで、人を酔わせる旋律。

次に、甘つたるい匂いが漂つてゐる。花のような、だがもつと強烈で濃厚な芳香。頭痛でも覚えそうなものだが、すつと身体に入り込んできて、これもまた地を失わせる。

「今通つた門が大門だ。卯の刻から亥の刻まで開いている。女が通るには女切手がいる」

「おらは女じゃないんだろ?..」

「女の素も出れん」

とらいちが袖からさつ氣無く手を出したので、慌てて彼女はとらいちの手に駆け寄った。

が、勢いあまって前のめりに転んでしまった。

なんとか受身で転び傷をつくらず済んだもの、見やると草履の鼻緒が千切れている。仕方なく、草履を脱いで小脇に抱え立ち上がった。砂利が旅路で出来たまめに喰いつき、痛む。

「怪我は無いか」

とらいちに問われて頷いた。素直に首を縦に振ることは躊躇われた。

しかしどらいちは、血を尾にする彼女の足を見やると、おもむろに腰を下ろした。

何事かと一寸怯える。

彼は何をするでなく髪をかき上げ胸の前に流すと、背中を向け、おぶつてやる、とだけ呟いた。

その言動に当然のことながら、驚く。きつね、いや虎につままれる。普段は寡黙に彼女を歩かせるだけの男が、おぶるのだとこいつ。信じられない。

「早くしり」

急かされて、恐る恐る彼女はとらいちの背に飛び乗った。刹那の浮遊感。とらいちは軽々と立ち上がると、人垣を分けてゆく。

「中央にあるのは待合の辻、その先が仲の町、右やら左やらは裏道

になるぞ。

右が江戸町一丁目、左が伏見町、仲の町に入つて左にふたつ脇道がある、堺町と角街。

その右に揚屋町。奥に京町一丁目二丁目。両端には行くな。河岸といつて、安い女や病気持ちが多い

江戸に入ったとたんに、よく喋る。

とらいちの耳元にぽつりとした頬を寄せて、聞く。こつもは低く恐ひしこ声が、今はとても耳に優しく、染み込む。

「よく覚える。この吉原に住むのだから」

「吉原？」

「そうだ、吉原。おはぐらびぶに囲まれた四角い鳥籠だ」

「おいらは鳥じゃない

「……人も鳥も籠に入れれば一緒だ。主が飽きるまで、ビックにも飛べやしねえ」

とらいちにおぶさつて、彼女は仲の町、ちよつと吉原の中央部にある茶屋に入った。

茶屋であるのに、何故かあちらこちらに酒の席が開かれているようだった。小さな庭があり、その周りを囲う障子から、和氣藹々とした宴の賑わいが聞こえた。

茶屋の者がじつとりとした目で一人を見つめる。それを飄々と交わして、とらいちは更に奥へと進んだ。土間を過ぎ、細い路地へ出る。

道といつよりも家と家の間といつべきか。狭く、人がひとり歩くのでやつとといったところ。

「今のが引手茶屋だ。ここは茶屋を通して遊女と遊ぶ。茶屋と遊郭は繋がっているんだが、表を通りには少しばかり錢がいるな」

前進するにつれ、あの匂いが濃くなってきた。甘いような安らぐような、だが異臭のようでもある。

隘路は背の低い引き戸によつて行き止まりとなつていた。そこから、芳香は確かに漏れていたようだつた。

とらいちが僅かに腰を落とした。鈍い音を立てて戸が開き、遮るもの不失した香りの触手が一人を捕らえる。

無色なのに霧のよう。

熱っぽい匂いが身体の芯に触れ、次に原色が弾けた。

## 第五話「交渉」

白皿に真紅。色が瞬き、目が眩む。瞬きをして、彼女はぐりぐりと皿を擦つた。

見開くと、眩むような絢爛な色使いが広がっていた。

膨大な量の灯が至るところに置かれており、それが梁の高い天井から垂れ下がつた赤い薄衣や、床に隙間なく敷き詰められた白い布に反射し、煌煌と光を放つてゐる。

板の露出した階段でさえ、よく磨かれているのか、まるで雹を散りばめたようだ。

彼女が息を呑むのが聞こえたのだろう、とうこちは彼女を背から下ろすと、

「驚いたか」

と言つた。

「へりと頷く。

「そうか。そのまま真下を見ろ」

言われたとおりにすると、素足を金魚が泳いでいた。心臓がぶつ飛んで、思わずとうこちにしがみつく。

「安心しろ。硝子の床だ」

とうこちが、左頬をぐつと上げた。顔を横断する傷が少しばかり歪む。彼女はその笑みになんとなく落ち着いた。たまにしか出ない、しかも冗談めいた意地の悪そうな笑みだが、それでも心を解すには十分だった。

逞しい腕を握りながら、彼女は再び金魚の群れを俯瞰する。金魚たちは廊下沿いに作られた堀のようなものを泳いでいく。気持ちよさそうだ。

「とらいちかい」

と、頭上から女の声が降ってきた。

パツと顔を上げると、右手から浅黄色の平服を纏つた女が滑るように歩いてくるところだった。

でつぱりと肥えた、だが貫禄ある熟女だ。紅だけ田尻と唇に引いている。

とらいちが、三船、と女を呼んだ。

「裏から忍び込んで、軽々しい男だよ。

あれあれ、今度は女銜の真似事かい。ずいぶん痩せた童だ」と。髪もなんだ、へんな色だよ。

禿にするには、歳もとりすぎちゃやいないかい

「上手になる」

とらいちの一言に三船はくくつと喉を鳴らした。

「まったく、呆れた金の亡者だね。一体、外で何をやらかしたんだか。

生憎、ひげは筋を通さなことは出来ないよ。その子は、里に返しな

「無理だ。じいつけ、口減らしだね

「不憫な」

三船は片袖で隠しながら、小さくすくめる。

「別に切見世にやつてもいいんだが、これを切見世にやつたとなると、上見世の楼主はよほどの間抜けと皆が腹を抱えるだろ？」「何を」

「こいつは、白子だよ。片目だけだが」

その一言で三船の目の中色が変わった。

三船は軽く腰を曲げると、あからさまに彼女の顔を覗き込んだ。

「赤じゃないね。けど萌黄というのは面白い、髪もあるし、肌も強そうだ。どこで……？」

「そんなことより、欲しいのか。欲しくないのか」

とらいちは面倒そうに喉仮を搔く。その余裕ある態度に、三船は袖を下ろして舌打ちをした。

「お役人が許さんよ。あなたは女衒じゃないんだよ。しおっぴかれちまう」

「どうせ人が足りなんだろう。

三年前の地震では、淨閑寺に骸を運ぶのを手伝つたんだ、あの時に死んだのは何人だつた。あの騒ぎに立ち消えたのは何人だ。見習いの引っ込みもいたはずだ、確か、八人はいただろ？  
じゃあ八人分、誤魔化せる」

「九人だよ。うち火もついたんだよ。捕縛の余裕なんてなかつたんだからね……」

目算を浮かべたのか、一寸だけ考え込むと、三船は懷から扇子を取り出し首下を涼ませた。

「名前はなんていうんだい」

交渉がじわりと結び田を探す。

……彼女を、蚊帳の外にして。

「まだ決めてない」

とらいちは世の全てが詰まらないような表情のまま、戸口に置かれた棚にどすりと腰をかけた。長身の男の豪快な動作に、棚に置かれた花瓶と花が揺れて舞う。

花を一瞥し、

「そうだな、おみなえし……御身無し。好きに決める。ただし、二  
十両。年ごとに十両もひつ」

突然の切り返しに、三船は顔をくわばらせた。

「戯言を」

「そいつを女にしてやろつ。もしあんたが望むような成長が見られなかつたら、年毎に十両払つてやる。三年で得をするかもしけないぞ」

「馬鹿馬鹿しい、實に滑稽な」

ついと視線を逸らすのを、とらいちは見過さなかつた。そのまま淀みなく言葉の一手を指す。

「俺を誰だと思つ?」

沈黙が豪奢な空間を俄かに鎮めた。熟女の湿っぽい唸りが響き、とらいちを軽くねめつける。

互いの手をさぐり合つ、均衡。

しばらぐして、三船の扇子が甲高い音を響かせて静寂を断つた。

「良いだろう。ただし、あなたが払うのは、十五両だ。  
そして必要があれば、今まで以上に働いてもらひ。あんたことは  
昔から知っているが、こいつが物になるかは別のこと。  
もし私を満足させることが出来たなら、その時は五百でも一両でも、  
持つていくと良いよ」

「いいだらう。やる」「

唐突に背中を蹴られて、彼女は膝をついた。

唖然と、とういちと三船を仰ぐ。品定めを終えた彼らの面容は、  
仮面のよつな、意図の知れない色をしている。

不意に今起つてしていることが、彼女には空恐ろしく感じた。  
この世には自分を売るものがいて買うものがいる。  
手のひらで転がされるその先に何があるのか。未知にくるまれて、  
自分はどうなってしまうのか。

三船の脣、朱が半月を描く。

「そうだね、名前は……」

「わっちが決めてお」ざんすか」

突然、思案の隙について、凜とした女声が割り入った。

何の前触れの無い介入。彼女は声の主を求めて、階段の上へと田  
を泳がせた。

そして、息をするより先に田を見張る。

そこにいたのは、紛れも無い。  
女だ。

## 第六話「ひばり」

「ちょうど禿がほし」と「じゅつた」  
「つか佐」

三船ととらいちが同時に名を呼んだ。つか佐と呼ばれた人物は、ふわふわとした体重を感じさせない足取りで階段を降りてくる。それを見、彼女の心は吸い込まれた。

天女が降りてきた。

衣装は目を見張る、藤色。金糸の胡蝶が舞う。

白粉をはたいた肌はよく擦つた陶器人形のよう。眉眼はきりりとしていて、涼しげな面容に似合う。

姿勢はよく丹精込めて育てられた百合を思わせ、しかし艶めかしく肩や腰をくねらせる様が確かに肉の柔らかさを感じさせた。

髪に乱れひとつも無い。耳の大きな黒猫に似ていて、おびただしい量の簪やら櫛笄が色を添える。

裸足の足の先まで化粧がされていて、朱に塗られた爪は妖しげである。

それらはつか佐という人物に人間離れした麗しさを与えていた。  
神々しいばかりの、美。

妖靈は祝福を受け、下界に降り立つ。

彼女は逡巡していた。一週間ほど前の、とらいちの言葉。

さつき、母親のことを話しただろう。あれも、女じゃない。

「どうこか、わっかが貰つても良いでしょ」「へ」

「やのつもつだ」

「じゃあ、ひばつ」

嬉しそうに、なにより妖しげに、つか左は田尻を上げた。

「あなたは、ひばつ。良く売れるようですね」

「……ひばり？」

投げやられた微笑に彼女は、鞭にでも打ち据えられたように肩を震わせた。

「利取る、利取るとよくお鴉き。馬子にもなんとやら、それなりのおべは用意してやるよ」

「つか佐」

「なんだい」

とらこひま棚から足を落とすと、小さな錢袋を懐から出して、つか佐に投げざる。

「ここひま、めつやす足袋を買つてくれないか。足袋じゃなく、めりやす足袋を」

とらこひま発音三船が彼女の足を見やる。

「酷いね。一体、どれくらい歩かしたんだ。治るのに時間がかかるかい？」

「へりん。骨が崩れる。後は、まかせたぞ」

とらこひま無愛想に顔も合わせず告げると、後ろ手に木戸を押す。

「」

「何処へ行くつもりだい」

「何処へでも。日を改めて、来る。それまでに金を用意しておいてくれ」

言い捨て、とらいたは流れるような動作で木戸の向こうへと身を翻した。

慌てて追いかける、彼女。

「ひばり」

だが、ひばりという名が、彼女の心臓を驚撃んだ。その衝撃によろめきながら、振り返る。

そこには、女。幻想的な薫香を振りまく、妖婦。

女は、ひと舐めした飴玉のような艶をもつた唇を微動させると、「くさいね」と顔を顰めた。

その動作が人間らしくて、少しだけ安堵する。

「つか佐にそのまま任せると向こうが移りそうだね。お富士。お富士はいるかい」

「はあい」

三船の一聲に、階段の上から一人の少女がひょっこりと顔を覗かせた。おかげに赤い着物を纏った少女は頬をほほえませる。とたたたたと、子鼠のような足音をたてて階段を降りる。

「三船おかさんには姉さんもお揃いで。なあに。あら、その子はなあに」

「あなたの妹分だ。風呂に入れて、軽石で足をよく擦つてやつ」

少女はふうんと鼻を鳴らすと、

「お田めが可愛い、あんた。よろしくね、あたいはお富士」

目尻が柔らかく垂れた、右の涙黒子が可愛い少女。少しだけ意地悪そうな、だが嫌いにはなれなさそうな雰囲気がある。

お富士が笑ったのを見て、一寸だけ、彼女は考えた。

ひばり。それが今日からの自分の名前ならば、受け入れなければならぬだろう。そうしなければ、生きてはいけないのならば。全ては浩然としていた。

ひばりとして、生きる。

少しずつ、自分がどうなつていくのかを悟る。売られたのだ、女郎屋に。吉原という場所が何なのかは知らないが、とらいちは鳥籠だといった。

ならば自分は、

「ひばりだ。おらは、ひばり」

お富士に案内されて、ひばりは湯入った。だだっぴろい風呂で二人、足を丁寧に擦つてから出ると、浅黄色に蝶の刺繡を刻んだ着物が用意されていた。

「まだつか佐姉さんは着物の買いに出てないはずだから、さつと七八の娘のだ」

ひばりが問うと、

「三船おかあさんのこと、亡八つていうんだよ。亡八つてのは、この楼閣で一番偉い主人のこと」

「ふうん」

「あたしはあんたの朋輩ともばい。朋輩は、分かる? 同じ姉さんに仕える  
かむり  
禿かむつてこと  
かむり?」

「禿つてこつのは……。あつは、教えなきやいけないの、いつぱい  
だね」

お富士はうれしきと楽しそうに目を細め、一方で意地悪そうに口  
角を上げると、ひばりのこを指で突いた。

風呂に次いで、案内を受けながら楼閣を散策する。

吉原という場所は、故郷とは何もかも違うようだとひばりは知り  
始めていた。发声の抑揚も違うし、そもそも飛び交う言葉からして、  
耳に馴染みのないものばかりだ。

異国に来たみたいだ、といつと、お富士は腹を抱えこんで、  
「異国なんてとんでもない。あんなに大きいまらを持つた密はこな  
いよ」

と、ひばりにはますますよく分からないうことを言った。

「じつちが、客間になるよ。むこうが座敷で三階建て、上のほうか  
ら金も高い。一番上につか佐姉さんの部屋があるよ」

狭い敷地の中を広く使つためか複雑な構造を持つた屋敷である。

それに、無数の蠟燭が立てられ、色鮮やかな布がしかれ、花が生け  
てある様は、まるで人を惑わすために組まれた迷宮だ。

匂いはもう、慣れてしまったよつと、田舎の郊外と変わらぬよう  
うに思え始めた。

その時だ。

庭に面した廊下を渡つていると、密間のひとつから怒声が響いて  
きた。

お富士が好奇心に顔を躍らせながら振り返り、走る。

「殺してやるー。」

罵声が轟き、お富士のすぐ脇にある障子が大業な音をあげて弾け  
とんだ。

## 第七話「大立ち回り」

間一髪、というか偶然にも、障子はお富士の背中をすり抜けて、庭まで吹っ飛び、池に落ちる。障子という薄壁が剥がれて、よりいつそう喧騒が激しさを増した。

「斬り殺してやるつか、あいつを出せ、あいつを出すんだ! わざわざ、あの女に会いに来たんだぞ!」

黒墨雑言が周囲の優美さを罅裂させる。あまりのことに力を失つて尻餅をついていると、ふいに一陣の風が眼前を掠めた。

「あいすこません。どうなされましたか?」

丸いふたつのガラス、眼鏡をかけた小柄な男がぴゅんと飛び出で、激しさを増す部屋へと入っていく。

「どうか落ち着かれて下さいよ、そんなに騒がれちゃ、人聞きが悪いです。もうでしょ?」

「なにを言つ、三余田だつていうのこ、部屋から出でこん。どうなつているんだ、この見世は! 僕はそこいらの畜とはわけが違うぞ!」

「いやはや。そいつあ珍しい。そつとお代官の男つぶりに、女郎が照れてしまつていてるんでしよう。」

天ノ岩戸じや「あいませんが、女を出すには大声じゃあいきやあせん。踊つて飲んで騒いで歌つてえでねえど。ええ是非、落ち着いて」

ひょいと眼鏡の男が廊下へと顔を出し、お富士に声をかける。

「お富士、亡八を」

「はあい」

「えつと……、てめえ誰だ、まあいいや、ちょっと」

手招きを受けて、ひばりは恐る恐る中へと足を踏み入れる。入った途端、ぎょっとした。

ずいぶんと悲惨な状態であった。

あたり一面に食事やら酒やらが転がっていて、口をつけないまま台ごと蹴られて転がされたのである(う料理の数々は男に踏み潰されて粉々である。

隅には、小太鼓や三味線を持った者たちが身を丸め、客人と眼鏡の様子を怯えながら覗っている。

なんとも嫌な光景に、ひばりは気まずく唾液を嚥下させた。

「特に何もしなくて良い。女たちが来るまでに、片して回ってくれ」

眼鏡の男に耳打ちされて、ひばりは周囲に散つたお椀や料理を手でかき集めた。

皿や米を集めていくうちに状況も掬い取られてくる。どうやら客人は、呼んだ女がなかなか来ないので癪癪を起こしたらしい。

この時まだひばりは知らないが、遊郭での帯刀は基本的に許されていらない。

本来は玄関先で預かり刀箱にしまつものを帶に締めているあたり、よほど頑固か、傍若無人な男なのだろう。

冷静に何が起きたのかわかつてみると、どうにも滑稽で、腹立たしいことのように思えてきた。

耳を欹てているうちに、ひばりの指先がだんだんと震えていく。幼い身体に膨れ上がる怒り。食事を粗末にするなんて、なんて輩だらう。

ちらりと横目でみやると、眼鏡の男とそう変わらない背丈の男が、下品なだみ声でああだこうだと文句を言つている。

着込んだものや手に握り締めた刀は雅な飾りで、金持ちなのだと一目で分かる。

しかし、金を持つていれば飯を粗末にしていい道理など、無いだらう。

「何を見ている」

ひばりの犀利な目に気付いて、男が睨めつける。凄む。

小柄とはいえ、幼少のひばりよりは頭ひとつ分大きい男は、ついでにむき出しの日本刀を握り締めている。

しかしながらひばりには、その男が怖いものには思われなかつた。不思議なことに、ひばりには、猿山で喚く猿に等しかつた。

幼い瘦躯が生まれ育つた苦界。

離農も出来ず慢性的な飢饉に窮する人々、その人々が子どもたちに行つことに比べれば、男は恐怖でもなんでもなかつた。

刀など、どこが怖いものか。じわりじわりと絞められ狂つていくしかない貧しさと空腹と比べれば、一瞬で殺してくれる刀はとても優しい。

そしてなにより、

「どちらの方が、おつがねえ」

「は？」

「おめでさんよつ、どちらの方があつがねえのよー。」

気風よく、ひばりは立ち上ると、一気にまくし立てた。

「刀っこ振り回す、めんこにもんじゃあ！  
そげなごとよつ、なんなのこれはー。おめえこべづよー。飯ぐら  
い座つてぐう、ベーつこにも出来るじとよ、のうだつてこなに食  
い散らかさんでしょ。

なんと思つてるんだべが。あんだけのためこ、おらのおつとつせぬ  
つかあはみでえな農民は、米耕してゐんじやないんだあと、  
めぐれこ、じの、罰当だりなわいぢつじがー。」

勢いこのつて、そのまま足を踏み鳴らす。

ひばりの威勢に、それまでの喧騒が嘘かのよつて、静まり返つた。  
皆、水揚げされた魚のような表情で、仁王立ちするひばりを見やる。  
ひばりはとこうと、なんじともなれと腕を組んだ。唾を吐きつけ  
るなり、切りかかるなり、じつこでもしじる。  
ぐつと、腹を括る。殺すなら殺せ。じつは死んでいたはずの命だ  
。

覚悟を決めたひばり。しかし、次に起つたのは、そんな彼女を  
ぞつくりと裏切るものだった。

「ひつどこ誰つー。」

指をさして男はぽろりと刀を置に落とすと、ついで腹を抱えて自身も置に転がつた。

それを機に、次々と哄笑が湧き上がる。男も、芸舞妓も、小柄な眼鏡の男も、皆が皆、部屋にいる者全員、腹を抱えて目に涙を浮かべて笑い始めた。

肩を揺らして、膝からくず折れて、止まらぬ笑いに身を任す。

あまりのことに面を食らって、ひばりは身体を硬直させた。皆総じて指をこぢらにせし、呼吸がとまるんじゃないかといつ勢いで笑っている。

「おらあ……、変、ですかあ？」

カツと顔が赤くなる。怒りではなく、恥である。何が何だかさつぱりだが、笑われた！

耳まで真っ赤に染めながら、ひばりは人々の笑傲しゃうえいを一身に浴びたのだった。

## 第八話「夜の生き物たち」

「ひばりにはまづ、訛り隠しの里言葉を教えないと駄目だね  
月夜を背に、三船がキセルをふかす。

「あーあ、あたいもその場にいたかった  
残念そうに肩を揺らすお富士の横で、じょんぼりとひばりは頃垂  
れていた。

「だが、今回ばかりは助けられたね。お陰様で客人にていよく塩を  
撒けそうだ。大門の連中に言つたし、帳簿にも書いたから、あの男  
が次から見世に来ることはないよ。安心おし」

その一言に僅かばかり胸を下ろし、しかしながら笑ってくれたの  
には楼館の者もいるのだと思い出し、ひばりはますます首を垂れる。

三船はひばりの様子に皺のある頬に笑窪をつくると、漆塗りの収  
納小箱から何かをつまみ出した。

白っぽく、足袋に似ているが、足首がやけに長い。ぽいと投げら  
れて、ひばりはそれを受け取った。

「めりやす足袋だよ。異国の足袋でね。まあ、足に履いてみな

ひばりは腰をあげると足袋を脱ぎ、片足ずつ慎重にめりやす足袋  
を履いた。

足袋よつきつなく、足首までをすっぽりと包むめりやす足袋…  
…、靴下は、今までに無い感触を持っている。

居心地が悪い。しかし、足が柔らかくなりそつた品ではある。

「せいぜい、大事にするんだね」

三船になんとか叱られずに済んで、ひばりとお富士は床に着いた。どつぶりと夜の帳が下りたといつのこと、吉原は活気のある夜を灯る。格子窓から漏れてくる街の光と音は、まだまだ賑やかで、街のどっこもかしこも未だ華やいでいることを呟す。

せんべい布団にお富士と一人して身を包ませながら、

「いじは、眠らねえんだが」と呟く。

お富士は起きていたらしく、

「姉さんたちは客が帰る夜八つ時まで眠りやせん」と、寝返りをうつた。

夜八つ、午前一時。ひばりの故郷では、ますます馴染みの薄い時間だ。そんな時間まで起きるのは、年越しにだつてしない。

想像しきれず、ひばりは大あくびを噛んだ。宵の夜九つ、午後十一時。この時間に自分が起きていることが、ひばりには信じられないことだというのに。

「おらもこつか、そんな日を暮らすのだらうか

お富士はついに夢路へ旅立つたらしく、ただ静けさだけがひばりの言葉を聞いていた。

ああ、眠れない。

身体がどうにも熱っぽかった。着物の間から翻つて手のひらを冷ばせ、胸をまさぐつてみる。

指先に触れた、どく、どく、と小刻く跳ね回る場所。

心の臓。そこが妙にざわめいて、街のやかましさなどではないほどのわめいて、仕方が無い。眞間のことを思い浮かべると、興奮と恥じらいが留めどめなく溢れてきて、溺れてしまつてなる。

故郷とは何から今まで違う刺激的な世界、今までにない空間の喜び。

窒息するほどいの、戸惑い。

それに加えて何故か、とらいたちの顔が浮かんだ。げきを飛ばした時にいついつい名を使ってしまったことへの罪悪感からだらうか……。

思い出す。

最後ことりこちと触れた、あの硬いよつで弾力のある、温かい背中の感触が胸と腹とを燻す。やがてそれは歪な不安と疑問になる。

自分を両親から買つて、吉原へと売つたあの男は、いま何処へいるのだろう。自分が客に噛み付いて、田舎ものと笑われたのを知つたら、あの無口で無愛想な男も笑つてくれるのだろうか。

めりやすす足袋を履いている姿を見たら、どんな顔をしてくれる？  
考えれば考えるほどい、睡郷は遠ざかつてこぐ。

もう完璧に覚醒してしまい、あくびさえ出なくなると、今度は股が疼いた。意識してしまつと、どうにもモゾモゾしてしまうものだ。

手水はもうお富士が案内してくれたから、一人でも行ける。  
思い立つとひばりは、半纏に腕を通して、布団からこいつそりと抜け出した。

しきを終えて廊下を渡る。

闇夜には、上弦の月がだいぶ傾き始めていた。真夜中を過ぎれば、いずれ消えていくだろう。

それでも、吉原は明るくともり続けるだろう」とは、惜しげも無く壁にかけられた燭台や灯籠から分かる。

ひばりは立ち止まつた。

「おらもこつか……」

とらいちは自分を、女の素だといった。いつか、つか佐のようになつて、女になつてしまつて、夜が当たり前になつてしまつて。

「夜の生き物になつてしまふんだろうか」

考え、思い、想像し……。しかしそれらは形骸を保つことが出来ず、ひばりの身体をすり抜けていく。

農家の末っ子として育ち、鍬を握り、鎌を握り生きてきたひばりの、だが、小さくて細い五指に余つて零れていく。

そのくせ、売られたのだからいつか夜の生き物にはなるのだといふ達觀はある。とらえどころの無いもの。肉を持たぬ、魂だけの実感が。

「夜はどんな風なんだろう……」

ふいに、上へ繋がる階段が目に止まつた。お富士が、夜には行かないよいうこと言つていた道筋が心を引っかいた。

楼閣は牛の角のように、対するよう建てられている。密間の向こう、渡り廊下の先、階段を上れば女郎たちの座敷だといつて、ペんの二階には、姉女郎のつか佐が誰かと夜を過ごしている。この先で。

不透明な腕に導かれ、夢遊病のようひばりは歩みを踏みしめる。音は密やかに、誰にも気付かれぬよう。

進みゆくうちに、ひばりは雅楽とも小唄ともちがう音を拾つた。それは呻きのようだつた。

誰かが苛められてゐるのだろうか。

心を好奇に満ちた憶測がよぎり、足取りはより慎重になる。

一階。暗い廊下を囲むように、光を湛えた障子が並んでいる。障子の向こうから、恐ろしげに聞こえる呻き。それは断続的で、人間の言葉を成していない。

何がここで起こつてゐるのだろう。首を傾げつつ、しかしひばりは更に階段を上がつた。

興味はあつたが、知りたいのはあくまで、つか佐の夜だつた。鳥籠に飼われるという意味を、夜の生き物になる意味を、ひばりは知りたい。

飼育されているという意味、自分が売られた場所の全貌を、この吉原で初めて見た女といつ生き物を通して知りたい。

ひばりは昇つた。つか佐のいる、三階へと。

## 第九話「交尾と性交」

三階には呻きらしきものは少なかつた。代わりに、激しく布が擦れるような音に吐息が絡み、障子紙を僅かに揺らしている。

ひばりは、魚が跳ねている、と想つた。

障子の向こうに、水面を感じる。とても小さな水面。ちょうど人の両手のひらほどの。

ひばりは左右にそれらの存在を感じながら奥へと進み、つか佐を探す。

深く閉じられた障子は中の様子を隠していた。薄く影を格子に納めるものもあつたが、殆どが奥へと引っ込んでいるらしく、ただの提灯と化している。

部屋にかけられた札を読んで、なんとかつか佐の部屋を求めていくと、少しづつ行き止まりの壁が迫ってきた。

つか佐の部屋は、一番奥にあつた。

影は見えない。となると、部屋の奥にいるのだろうか。ひばりは障子に触ると、ゆっくりと右へ引いた。躊躇いがちに、隙間が出来て、中の輝きがひばりを照らす。

酒の席の跡、誰もいない。松枝を咥えた鶴の舞う屏風がある。その向こうに、氣配がある。

「や……」

ふいにつか佐の声が耳を噛んだ。ひばりは自身の存在が出来るだけ周囲に悟られないように忍んで進むと、そっと屏風の陰からのぞき込む。

思ったとおり、つか佐はいた。しかしながら、そこにいるつか佐は、ひばりが知っているつか佐とは、何かが違った。

男の上に跨っている。

つか佐は額に少し汗を浮かべて、頬を僅かに紅潮させていた。厚い白粉の上からでも、風呂あがりのように茹っているのが分かつた。

上半身は開き、白く弾力のありそうな瑞々しい肌が露出している。くず折れた着物が腰を隠し、その下に、全裸の男が横たわり、蠕動していた。

男の鼻息は荒かった。巧妙に歯車を組んだ人形のように、一定の動きで腰を揺らし、つか佐に擦り付けていた。

つか佐により近づく度に、肉と肉がぶつかる音が響く。それに粘着質な音が続いた。

性交を、している。

ひばりの脊髄を雷が貫いた。

まぐわいを見るのは初めてだった。熱を孕んだ違和感が腹の辺りを弄つて、感情を脅かす。

ひばりは動搖した。だが、目を逸らすことは出来なかつた。強い吸引力を持つて、行為はひばりの手首を掴む。

ひばりは凝視した。初めての光景に。

……いや、違う。

ひばりは既視に目が眩んだ。初めてではないような覚えがある。思い出そうと心が働いて、頭の隅に身を縮めていた小箱が、埃をたてて口を開ける。

森でのことだ。貧しい田舎に菓子などはあるはずも無く、ひばりは兄達についていつて菓子代わりのアケビを頬張つていた。その道の帰りで、妙に茂みが揺れている場所があつて、何事だと覗いてみると、鹿が交尾をしていた。

鹿も鳴くのだ、と思った。鶏の首を捻る時に出る声と似ていた。雌鹿を全身で押さえつけ激しく腰を打ち付ける雄鹿。雄鹿の太いものを受け入れながら鳴く雌鹿。

一匹の、栗毛色の表皮に覆われた筋肉は、見事に盛り上がり躍動し、森の木漏れ日のなか美しく輝いていた。

が、ひばりにはその光景が堪らなく恐ろしかつた。いつも森を軽やかに駆けている鹿とは異質のものに思えた。

鹿ではなく、まるでその行為のためだけに生まれた不気味な存在に感ぜられ、ひばりは口を押さえて吐き気を覚えながら後じさつた。しかし兄達は逆に、一步も身じろがなかつた。  
むしろ魅せられているようで、呆然と、しかしあつきり興奮しているようだつた。

大きく開かれ脈を走らせた彼らの眼球は、てらてらと魚の腹のような光をたたえ、ひばりの様子など気付いてすらいない。

鹿と、兄達。とても不気味だった。

そうだ、これを、おらは見たことがある。

つか佐が、ふいに息を漏らす。艶っぽく、影のある吐息。男の手が、つか佐の乳房に触れていた。白々と膨らむ乳は男の手から僅かにこぼれて、先の突起は赤く湿っている。

でも今日は、大丈夫だ。

鹿の交尾に似ているのに、田を離したいとは思えなかつた。ひばりには、過去にあつた嫌悪感が全くなく、そのかわり根を張つたような足があつた。

鹿の交尾を覗いたあの日と何が違うといつのか、ひばりは疑問を浮かべながらも、魅入る。

変わつたのは獸か人か、ひばりが七つか十かの違いだけ。本質は変わつていないうに思える。

自分の何が変わって、受け入れてしまつているのか分からないま、ひばりは屏風から更に身体を乗り出した。

男の動きが激しくなつて、つか佐もまた、動き出す。

潤んだ田を閉じ、舌で唇をなぞつてから、つか佐は膝をあげて足の裏を布団に沈めた。

そして両の手で男の頬を包んで、蛇のように身体をくねらす。

僅かに上へ、下へ。上へ、下へ。男女が身震いする度に、上氣する肌から汗が滴りゆく。

「つか佐、中が痺れている」

男が唇を歪ませ、差し出された乳首に吸い付く。唇を離しては指先で先端を突き、甘く噛む。

つか佐は男の愛撫に更なる腰使いで応じた。激しく肩が揺れ、瑞々しい乳房の弛みは兎のように跳ね、着物がざわざわと音をたてる。布が邪魔になつたのか、動作をとめることなく一人して腰に落ちた着物を剥いで、つか佐はついに全てを晒す。

つか佐が腰をあげると、男女の結合が垣間にあつた。赤黒いそれは太く立ちのびて、跨る遊女を苛めぬく。今までに無い、一突き。

耐えかねて、つか佐の表情が苦しげに曲がった。

「お前はなかなか声を出さないな」

男はつか佐が快樂に喘いだのを無論見過<sup>ハシマズ</sup>り、にたりと笑うと、彼女の柔軟な腰を持つて、高く掲げた。

体位が変わる。

下から上へ、上から下へ。

男はつか佐を布団に押し付け、その尻を持ち上げて、後ろから貫いた。堪らずつか佐が今一度、唸る。

「だが、それが可愛いよ」

つか佐はいじらしく小さく首を振り、唇を結ぶ。まるで声を漏らさんと意地になつてゐるようだ。

しかしながらよく濡れた彼女の胸は男の激しい動きを拒むことな

く、受け入れてしまい、静かな抵抗は困難なことと思える。

男はつか佐にぴったりと身体を押し付けると左右の手で持つて彼女の乳房と股とを弄んだ。

同時に、熱をあげて口の杭で穿ち続ける。

ついに気高い遊女は音をあげたのか、布団を五指で掴むと、甲高く啼いた。

途切れ途切れのそれは収束し、やがてひとつの絶叫となつて長くたち伸びる。身体が強張り、荒く硬直し、享楽に墮ちる。

糸が切れたように、つか佐は布団に身体を埋めた。

未だ膝をつけ高く上がった尻から髓へと、液が伝う。怪しげな光を含んだ白濁色の体液はゆっくりと瑞々しい太ももを味わうと、ついと敷布団に潜んでいった。

その時だった。

不意に。まったく不意に、つか佐が視線をずらす。

予期せぬ偶然。  
目が、合つた。

ひばりは息を呑んだが、隠れるには時間が足りなかつた。つか佐の瞳がひばりを捉え、一瞬だけ停止する。

叫び声をあげられるかと思つた。覗いていたことを責められるかと。

しかしながら女は、声どころか驚く様子ひとつなく、……微笑んだ。

動搖したのは、むしろひばりの方だった。

ひばりは反射的に立ち上がると、後退し、脱兎の勢いで部屋を飛び出した。

俊足で階段を下り、廊下を渡り、息をするのも忘れて寝室へ、そして布団の中へと転がり込む。

「ひばりちゃん？」

乱雑な気配に起しきれど、お富士がひばりの布団を揺らした。が、ひばりは何も言わずに布団にぐるまるだけで、その夜はもう、身を出すようなことはなかった。

## 第十話「金平糖と鬼」

吉原には夜の顔のほかに昼の顔がある。女郎屋を見世といつが、昼にも四時間ほど開くのだ。

太陽が天中を仰ぐ真昼時、その少し前から、見世は活氣付く。

遊女の見習いである禿の仕事は様々だが、姉女郎に用を願われる以外は、基本として掃除や炊事の手伝いを任せられていた。

雑巾で廊下に水拭きをする。

単調な作業ではあるが、天気も良いので気分も良いし、飽きることはない。戸板や障子を外して全開にしたので、冬らしい冷涼な微風が絶え間なく吹くのも、また気分を爽快にさせてくれる。

吉原は鷹揚としていた。

あまりにも夜とは違う感覚に、昨日のこととは夢だったのではないだろうかと、ひばりは思った。

夜に見た、不気味で、だが惹きつけられてやまないあの光景。思えば思うほど、現実のことではないような気がする。醉狂で幻惑な悪夢を、啄んだだけのような。

春を鬻<sup>ひさ</sup>ぐ……、自分があんなことをするのだろうかといつ、思案のまどろみがある。確信にはまだ遠い。

想起しながらひばりは、それを打ち消すように蒼穹へと背を伸ばし、大あくびをした。

「うふふ、寝不足なの？」

朋輩のお富士が床を擦る手をとめる。

「しじに出て、迷子になつただ  
「起」してくれたら良いのに」

本当のことなど言えるはずがない。内心はびくびくしていた。まだばれてはいないが、つか佐が後々何かを言つてくるかもしれない。

「ここの人たちは、怒ると怖いべか」

「怖い?」

お富士はケタケタと笑うと立ち上がった。

「怖いなんてもんじやないよ。郭の折檻は鬼だつて泣くんだから」

鬼だつて、という言葉に、ひばりは耳を疑つ。  
信じられなくて、懐に手を入れた。そこには、掃除のためにと脱いでいためりやす足袋が隠してあつた。

めりやす足袋の柔らかな感触を指先で弄んで、ひばりはますます分からなくなつた。こんな立派なものをくれる人たちが、鬼さえ泣かすようなことをするんだろうか。

考えていると、後ろから肩を叩かれた。

「よう

振り向くと、昨日の眼鏡の男であつた。

茶色い縞の着物を纏う小男は、謙るような猫背はなく、昨日と比べて僅かに背が高い。それでも、ひばりより頭ひとつくらいしか変わらないのだが。

「仁平」

お富士がぴょんと跳ねた。仁平といつぱりとい。

「おうよ。お富士に、えーと……」

仁平は審美を光らせる骨董商のようになびぱりを凝視する。

「仁の子はひばりよ」

「へえ、ひばり。よろしくな」

眼鏡をちょっと人差し指で上げてから、仁平はひばりは手をのばした。おずおずと握手をする。

「不寝番の仁平だ」

「不寝番？」

「まあ、仲裁とか火の用心とか、見世番もしねえ雑用をしてんのよ。日につけんのは、眼鏡つつってな、目が悪いとつける」

そう言いながら、仁平は眼鏡を摘んで少しだけ前方へと動かした。それともに目玉が肥大して映つて、思わずお富士とひばりは吹き出す。

「まあ、こんな風に笑わせてみたりね。いやあ、昨日は助かった。ああも事が揃えるとね、てめえ、笑わすのも空回り、下手したら斬られちまう。こりやあ用心棒でも呼ばんかと思つたよ。それとも、斬られたら良いのかねつて」

「仁平は調子のよそいのうな口ぶりで言つと、

「そうだそうだ、これ、へえ」

袂から照る照る坊主の形に捻つた和紙を取り出して、二人に握ら

せた。

開いてみると、奇妙な形をした小さな粒であった。促され口に投げ入れてみる。

口に広がったのは、未体験の甘味。

「うわあー！」

あまりに強い甘味に感嘆の声を漏らすひばりへ、お富士が耳打ちした。

「金平糖よ。お砂糖のお菓子」

「お砂糖？ そんな高いもの、ええだろか」

田を丸めるひばりの頭を、上機嫌な仁平はぐしゃぐしゃに撫でた。  
「なあに。蘭医や用心棒に払う金よりかは安いから、受け取れよ。  
他の兎には言ひつなよ、取られんぞ。盗まれんぞ」

ひばりは嬉しさのあまりもつい粒口に投げ込むと、丁寧に懷へと  
しまった。大事なものは懐なのだ。

「ところでてめえ、先田のは、なんて言つたんだ？」  
ふいに訊ねられ、ひばりは口に充満する唾液を飲み込んでから、  
正直に答えた。

「どれが詭つどおぬか分からんかい、聞えん」

「じゃあ、めんこいつて何だ？ ベコツレは？..」

「めんここと、ベコツレ、方言だべが」

「方言だべ」

お富士が真似をしたので、すばるは少し照れながらも、「めんこいは、可愛い。べじつこは、ほら、もおつて、鳴ぐ」

「……牛か！」

「そうそう、牛だあ！」

「なるほど、じゃあ……。うつは、ひでえな。もしお富士だつたらザックリ、だな」

と、仁平が侍の真似をし、

「それどうこうことよお」

と、お富士が仁平の背中を叩いたので、思わずひばりは腹を抱えた。

三人の笑い声が弾け、廊下を満たす。昨日の夜が本当に、嘘のようだ。とてもからりとした気分が、ひばりを満たす。

ひとしきり笑ってから、仁平はひらりと踵を返すと、諭すような物言いでひばりに告げた。

「ひばり。お前は少しばかり威勢が良すぎるな。気をつけろよ。威勢が良いってことは、大変なことだからな」

「大変なこと？」

「いざれ分かるさ」

そんな意味深な一言を付け加えて。

## 第十一話「折檻」

ひばりが売られた見世、大海屋はつか佐のほかに八人の遊女を抱えていた。殆どが座敷持ちだが、禿をもつものは少し減つて、八人のうちの四人だけだった。

中でも多くの禿をもつのは小島という、二番手人気である。遊女は禿に衣食住を与えなければならない。その錢は勿論すべて彼女たちの持ちである。

なぜ禿をもつのか。それは彼女たちの矜持や意地に寄るところが大きい。将来の女郎を育てることは見世や吉原の者に対する礼にもなるし、なにより他の遊女たちへの見栄としても良い。

禿持ちの遊女が文の使いに禿をやることは、太夫の位がなくなつた江戸後期、傾城の証のひとつであった。

「じゃあ、あたいは使いに行つてくるから。もし他に訊きたいことがあつたら、後にね」

夜見世の始まる暮れ六つ、午後六時より少し前、とはいっても霜月だからか、日はもうどつぶりと暮れていた。文に提灯をもつて、お富士が闇夜に吸い込まれるのを見届けてから、ひばりは見世に入った。

さて、どうすっぺ。

つか佐にはお富士について回れといわれたが、お富士には待つていろといわれた。となると自分には、仕事がないではないか。

仕事を探して、ふらりふらと彷徨う。

道すがら、女郎たちや芸舞妓たちが鳥のよつた足取りで宛がわれた座敷へと向かうのに頭を下げる。

少しづつ見慣れてきたが、女たちが通るたびに居心地の悪い緊張がひばりをつまんだ。

とらいちが故郷の母を女ではないと言い放った意味を、ひばりはつか佐との出会いで理解している。確かに母は、あくまでも母であり、女としては色が足りなかつたようと思つ。

そして田舎にいた女たちも、吉原の女たちを見てしまえば、女とは言いがたいものだつた。

田舎の娘たち。皺と汗と、寒さに凍えた赤い頬を化粧していた彼女たちと吉原の女は、何もかもが違う。

同じ人間なのかと身震いするほどに、色も、匂いも、立ち振る舞いも違うのだ。

そして、どちらに女といつ言葉を当てはめるかと問われれば、間違いなく故郷ではなく吉原を選ぶ。

とらいちに言わされたからではなく、これはひばりの中から生まれた判断だ。

「おんな……」

単調な語感。

しかしながらその三文字に潜むのは、淫靡で艶やかな夢想。どこで覚えたか分からぬ、もしかして本能からの定めなのかもしけない。

そして女の中の女として、ひばりが脳裡に描くのはつか佐であつた。

彼女を抱くには最低、五両は必要だとお富士は言つていて。引き手茶屋で部屋を借りて一日、二日も同じ、楼閣に上がるは三回目。それまでに大抵、五両の金をばら撒く。

町人や侍風情では抱けまい。金のない者は一日で抱ける女を求めて安い下見世へ行く。

昔は茶屋を使って三合の引き合わせをする見世は多かつたらしげが、今はこじへらこのものなのだといつ。

五両払つてもいい女。

女。

禿を持つ遊女はそれほど多くない。ひばりは、つか佐が姉女郎だといつことが、誇らしいことのように思えた。

女の中の女が自分を禿として置き、衣食住をとめてること、その意味に応えなければならないのではないか。

気合を腹に込める、ひばりは子犬のように駆け出した。

お富士に教わったので、大体の間取りは把握している。どんな人が働いていて、どんな仕事をしているのかも知つた。

見世を暇そにぶらぶらして、配膳を忙しなくしている者たちに声をかけてみて、茶屋も覗いてみて、表に立つて呼び込みをする見

世番の周りで、同じく呼び込みのまねをする。

が。

「ああ、ひばりだっけ。お前は可愛いから座つときなやー」  
ていよくあしらわれた。

田舎から出てきたばかりの禿に仕事を与えようなんて輩はいない  
らしき。

猫の手も借りたいほど監視しちゃうのに、猫の手以外のひばりは、  
致し方なく、すこいすこいと床ると金魚で田を遊ばせることにした。

一階の玄関口から裏手まで、ぐるっと回る細長い硝子の溝。初めてそれを踏んだときは、心臓が飛び跳ねたものだ。  
あの田から、もう三田が経っていた。

「どうこひさ、こつくんだやい、……」

自分で口にしたところ、ひばりは忽然と心を蝕まれた。その名は重たく、ひばりを何故だか不安にさせる。

風呂場での一件のせいか、売られたという事実からか。理由は分からぬいが、瞬く間にひばりの心を形容しがたいもので埋め尽くしてしまったのだ。

ところが、三船と髪けのよひなことをじていた。

そこつを、女としてひい。

ところが確かにそう言つたのだ。

「」の言葉の意味することは、ひばりに向かをするとこいつだ。それは、風呂場での手ほじきのよつなものだらうか。それとも、全く違つるものだらうか。

「おらも、つか佐のよつになれるだらうか」

世のものとは思えない匂いを纏い、豪奢な着物に負けぬ色合いで、優美に咲く冷涼な女。あのよつな、生き物に。

夜の生き物に。

劣情に身をほだしでいた、あの時のつか佐を思い出す。いつか自分も、あんなことをするのだらうか。女になるために、あれは必要なだらうか。

とらこちも、あんなことをするんだらうか。

……女に。

水の中をひらひらと戯れていた金魚の群れが、ふいに飛散した。顔をあげると、廊下の奥を三船が歩いていくところだつた。

三船なら、仕事をくれるかもしね。

ひばりは立ち上がると、三船の後を追つた。三船は裏を通つていぐ。ちよよひびき壇と建物に挟まれて湿つぽく繕つているところだ。

声をかけるにも時宜を得られず、無言のままひばりはついていく。三船が角を曲がった。ひばりも曲がりうとして、踏みどりました。息をのんだ。

反射的に、思わず壁に背中をくつつかる。三船に見つからぬように

うにと祈りながら、顔だけで窺つた。

やはり。

そこには、恐ろしげな光景があつた。

遊女だ、遊女が松の木に逆さで吊られている。

質素な布切れを身体に巻いた半裸の遊女。

腕やら胸やら足やらをはだけ、縄で全身を縛られ、宙に浮かんで  
いる。苦悶を浮かべる顔は、あの世との世を行き来するよう時に時  
折、痙攣する。

口の端はてりてらと鈍い光をたたえていた。

そんな遊女を、三船は平然と見上げている。

「気分はどうだい、美佐」

心配をするでなく、愉快を含めた声色だった。

「足抜けっていうのはね、遊女の恥だよ。分かるかい。ええ」

木の脇に置かれた桶を手にすると、三船は中身を遊女にぶちまけ  
た。飛沫をあげるそれは冷水のようだった。

雪はまだ降っていないものの、木枯らしの吹く季節の、夜中である。当然ながら遊女は寒さに身を震わせると、静かに目を瞬いた。肉の丘陵を冷たい滴が這つていき、先で滴る。

「起きたか。美佐。どうだい、生き恥をさらす気分は」

濡れそぼる女を眼前に、三船は懐から小刀を出すと、縄にかけ、  
ゆっくりと切り目を入れた。

やがて縄は傷と重みに耐えられず悲鳴をあげ、遊女を落つことし

た。顔から地面にぶつかって、遊女が低いつめを顎をあげる。

「死なれちやあ困るよ。あんたは切見世にでも売つてやうかと黙つてんだ、そうすりやあ、密だつて納得するだらつ

美佐と呼ばれた遊女は息も絶え絶えに、胡乱な瞳を空へ投げやる。彼女を縛る縄はきつく、少し浅黒い肌に容赦なく食い込む。濡れた肌は苦しみのためか絶え間なく震え、疼痛を訴えていく。

虫の息の彼女に対し、

「よくお聞き。あんたの穴を誰が埋めたと思つ? ひばりといつ、青つちろい禿に、あんたより格上の小島だよ。もし用心棒だなんだのの騒ぎになつていたら、間違いなくあんたを差し出して、斬り殺させてやつたといひだ」

三船は冷淡にも彼女を蹴り上げ、仰向けてさせむ。そしてその股間に、足をねじ込んだ。

女が悲鳴を上げ、背をそらす。衣が剥がれ、身体を隠すものが縄だけとなり、あられもない姿となる。

豊満な乳房がしなやかにたわみ外気に晒され、ふくらみと立ち上がつた。

逃げようにも、縄が女を強く束縛しているため、容赦の無い行為はより悽惨さを帯びた。

三船の外履きのための一一本歯の下駄は遊女の陰部に食い込み、更に茂みを搔き分け陰部を貫く。

痛みに身をきしませる遊女は、もう抵抗する力を失つていふ。しかし意識を断つには、その刺激は強すぎた。

遊女を足蹴にしながら、三船が袂からなにかを取り出す。見やるとそれは、一本の針のようだった。手馴れた様子で、遊女の足を掴む。

「これから何をするのか、ひばりは戦慄を覚えながら想像し、眩暈を覚えた。  
まさか、まさか……。

刹那、女郎が大きく痙攣し、蛙のような悲鳴をあげた。ひばりは目を閉じようとしたが、皿蓋の端から三船の凶行を見てしまった。

針を、遊女の足の爪の間に刺しこんだのだ。

「死んだまうがマシだと、思うかね。ええ？」  
抉るように抜き、間髪入れず突き刺す。

無力な遊女は、三船の腕を振り払えず、悶絶する。

弱りきつて絶叫も出来ない遊女を、痛め続ける三船。これがあの、三船だらうか？

キセルをくゆらせ、主人として見世に立つ姿は雅で、ひばりは好きだった。しかしここにいる三船は、闇に紛れて粘着質な拷問を楽しむ、正に鬼のようである。

これが郭の、折檻。

すばるは青ざめて動こうとしない足を叱咤すると、逃げるよつてその場を後にした。

## 第十一話「痛みを塞いで」

自分の叫びに驚いて、目が覚めた。

「どうしたの、ひばりちゃん」

心配そうにお富士が布団から身を出す。

ひばりは、なんでもないと首を振ると、布団を剥いだ。  
身体中、汗でぐっしょりと濡れそぼつている。それは冷え冷えと  
していて、腹の底まで凍えるようだ。

三船の折檻を見てからとこつもの、「女眠」とこつものをしていない。  
夢の中での折檻が繰り返され、すばるはいつも恐怖するのだ。

その上、夢の中では三船が振り向き、

「見たな」と迫つてくる。

すばるは逃れられず、三船の針で全身を刺される。

足抜けと切見世のことを、お富士に語った。

足抜けとは吉原から逃げ出そうとするのこと。切見世とは吉原の端にある、安い花代だけで次々と男の相手をしなければならない、程度の低い見世だといつ。

遊女の足抜けは見世の恥じであり、捕まれば激しい折檻を受けるといつ。ひばりが見た折檻は、吉原では最も重い罰なのだ。

それでもひばりには、自分もいつかあんなことをされるのではな  
いかという、底知れない不安があった。拭いきれず、悪夢に魘され

る。

眠いが、眠りたくない。

ひばりはぼうっとした頭で毎見世前の掃除に励んでは、じつと空を仰いだ。

今日の空は冬らしく灰色に曇つていて、ほのかに雪の匂いがする。冷え込んだら、雪が降るかもしれない。霜月ももうすぐ終わる。師走がくれば、あつという間に正月がくるかもしれない。そうすれば、十一になる。

時の流れは歳を取れば取るほど、早くなるのだといつ。時間が、この不安を埋めていくだろうか。せめて雪が降れば良いのに。

「ひばり」

呼ばれて振り向くと、つか佐女郎がいた。まだ化粧をしていない素肌もまた色白で美しく、涼やかだ。

夜の一件については詮索する様子はなく、いつもどおりひばりは、畏まった。

「どうしました、花魁」

「今日から座敷にあがるかい」

青天の霹靂、それは喜ばしいことだった。

買われたばかりだからと座敷を締め出されていたひばりは、働けないことに僅かながらの居心地の悪さを覚えていた。

「え、ええんだべか？」

「訛つているよ」

「えど、……よろしいでしようか

「お<sup>に</sup>ふたりについて、あんたは座つていればいい。後は、とらこちにでも聞きな」

心臓が飛び跳ねる。

「とらいち？」

「ああ。今日、三船から金をふんざりして來てる。三船の部屋にいるから、行ってみな」

ひばりは素直に頷くと、静々と三船の部屋へ向かった。

とらいちという名は、不思議と胸をざわめかせるもので、足取りは軽やかではなかつた。それでもさほど広くもない楼閣、あつとう間に三船の部屋についてしまつた。

「よ、ござんすか」

「……お前か」

久々の重低音に心臓が疼いた。

「ひばりです」

「入れ」

膝をつき、丁重に襖を開けると、キセルの匂いと紫煙が舞つた。中にはとらいちしかおらず、一人キセルをふかしている。相変わらずの仮頂面がそこにはあつた。

「三船……おかあさんは？」

「客が来たみたいだ」

「とらいちは客ではないの」

「俺は」「の連中とは古くてね」

ふうんと鼻を鳴らしつつ、距離をとつて正座する。

とらいちはキセルの灰を鉢に捨てていれると、視線を宙に浮かせる。まるでひばりなどいないかのよつこ。

その素つ氣無い横顔は、意外にも丹精だ。

思えばとらいちは、随分と整った顔立ちをしている。傷でえりさえず身なりもまともにすれば、色男として通るんじゃないけど、ひばりは思う。

「三船から聞いた。早速、利取る利取ると鳴いたみたいだな。お陰で今年は大丈夫そうだ」

話を振られて、ひばりは押し黙つた。金回りの話は、よく分からなかつた。自分の価値なのに、金の巡りは自分の外にある。そのことに改めて気付き、ひばりは言葉に窮した。

静寂が薄く場を覆おうとして、とらいちがまた口を開いた。

「……めりやす足袋、使つているな

「うん」

「温かいか

「うん」

「良かつた

やはりといつかなんというか。いまいち、会話が続かない。まるで故郷からの一人の旅路を思い出され、ひばりの胸はますます苦しく、萎む。

「そのまま適当に逃げ出す」とも出来たが、意を決してひばりは、すつと訊ねたかったことを口にした。

「……あの

「なんだ」

「おらは、女になれるだろうか」

「女になりたいか」

「……怖い」

ひばりは嘘がつけなかつた。

先ほどまで空を弄んでいたとらいちの目はひばりをしつかり捉えていて、無駄な言葉や感情を根こそぎ剥いでしまう。とらいちのせいでの、酷く赤裸々な動物になる。

「ひばりもそのうか、男に抱かれたり、折檻されたり、する？」

氣付けば、涙声になつていて。どうしてだろう。ただ物事を訊ねているだけなのに感情が高ぶり、泣きたくもないのに胸がつかえる。

震えるひばりに、ふと寡黙な男の手が伸びた。

甘えるなと叩かれるかと思つて目を瞑つたが、与えられたのは意外にも優しい感触。瞼を開くと、とらいちは、ひばりを撫でていた。

「ああ、あるだらうな。だが少なくは出来る。苦しいことも辛いことも、賢くあれば、お前をそれほど襲わない。その術は、俺が教えてやる」

とらいちの手がひばりの頬を覆い、その親指が、滲む涙を拭う。

「お前は子供だから、言われたことには素直に従つていいんだ。歯向かつのまほどほびこ、腹がたつても、一呼吸置くんだ。そして、よく働け」

風貌からは想像しがたいほど優しい口調に心が解れ、一方で戸惑う。

これは同情なのだろうか。

いや、とらいちは人買いなのだ。そして散々、ひばりを歩かせ、吉原に売った。しかも賭けをしてくる。

そんな人間が、今更同情するだろうか。

しかしながら、とらいちがひばりに心を傾けているのは、拳動から確かにようであつた。

そしてひばりは、それが心地よく感ぜられる。先ほどまで、とらいちによつて不安だつた心は、とらいちによつて癒されている。

次第に、目蓋が重くなつてきた。

三船の一件からの睡眠不足が、こんなときに疲れとして出てきたらしい。不意に気が抜ける。

と、突然、とらいちがひばりの腕を掴んだ。

あつといつ間に、とらいちの胡坐の中に、ひばりがすっぽりと包まれる。後頭部にとらいちの腹の温もりを感じながら、何事かとひばりは仰いだ。

「寝ておけ。昼見世前になつたら、起にしてやる。今日は、耳半分でいいから、訊いておくんだ」

とらいちはひばりの目蓋に手を置いて、静かに語り始めた。縷々

( むる ) とした、迷いの無い声色。

ひばりは素直に安堵し、目を閉じ、身体の力を抜いた。

「もうひとつ、働く」と大切なのは、覚えることだ。どんな些細なことでも、反芻して覚える、身体に叩き込め。知識や芸だけでなく、とにかく知れ。見て考え、よく悟れ。そして感づき、覚える。

そのために五感を常に動かしておけ、分かつたな

脱力しながらも、頷いた。

「ところで、折檻を見たのか

「うん、三船が」

ほんのひとはく間が開いて、

「楼主ところのは、折檻はやらないんだ。やつこりのは、別の下つ端がやるんだよ。なんにせよ、三船の言つひとを一番に聞くんだ」

また、頷いた。このまま眠ってしまおうとして、ひばりはなんとぎなじに、もうひとつだけ気になることを訊ねてみた。

「お、とらこちのせいで、不安になつたり、大丈夫になつたり、ある」

心を表現するのは難しい。上手く語る自身はなかつたが、それにしても拙い言葉に恥じた。伝わつたらうか……。

静かに、自分の鼓動を数えていると、答えはやつてきた。

「主従、なんだらうな

低く穏やかな喉、氣のせいいか少し寂寥を帶びて、  
「安心しろ。親からお前を買つたのは、俺だ。お前は俺を、飼い主  
かなんかだと服ひつているだけだ。そのうけ、違ひつ者を慕つ。主従  
など、そんなものだ」

「え？」

「お前は俺の言葉だけ信じていひ、それだけでいい」

今度は頷かず、意識を深く落とした。

運命に揉まれた幼い瘦躯は、眠りの深淵へと落ちていぐ。  
しかし悪夢を見るのではないかといつ心配はもう、欠片もなかっ  
た。

揺り籠のような温もりとともに、少女は夢郷へと沈んだ。

## 第十二話「むらの中の秘密」

顔が妙に火照っている。火鉢の傍での胡坐枕で、身体に熱が籠もつてしまつたらしい。

手水を済ませ、かじかむ手で頬を包みながら、ひばりは部屋へと戻つた。

部屋には既にお富士がいて、白粉をはたき、下唇に紅を引き終わっていた。

お富士の髪を結わえているのは仁平だつた。この男は、意外にも手先が器用なのだ。

「ひばりちゃん、もう湯じまいになるよ。さういったの」「三船の部屋にいた」

正確にはどちらかの膝に寝つこうがつていたのだが、まあ間違いではない。

ひばりはお富士の隣にすくすくと座ると、髪結いを見つめた。あつとう間に髪は結われて油で固められ、拳ほどの大好きな赤い櫛があでこの上に飾られる。

「お富士ちゃん、可愛いね」

「あは、ありがと。次はひばりちゃんの番ね。

仁平、この子はまだ私よりふたつも下だから、櫛や簪よりも、花をつけてみたらどうだらう

「わっちも白く塗る?」

ひばりが首を傾げると、

「まあ、お前みたいなのだと、白粉は好かねえな。紅もいらんだろ

「ひ

「お歯黒はつける?..」

「お歯黒?..」

「おばべりぶと聞いたか?」

「あいやあ世の名残だよ。今じやあ誰も使わねえ。外の連中へりこのもんれ。よし、取り合えず結つてやる」

促され鏡の前に座すると、まず櫛を入れられた。油の代わりに水を差し、丁寧に梳いていく。

「髪がお富士より短いからな。剃刀で整えてから、両耳の上で一本に結わえよ。それに、縮緬の花をつけてやる」

「うううと、手馴れた動きで『平は素早く髪を切りそろえ、赤い紐で結わえ、花を添えた。」

祭りのときでもこんな洒落の効いた格好はしない。ひばりは飛び跳ねるよに立ち上がった。

「おらあ、じんなの初めてだあ」

「ひばりちゃん!..」

「わづか、じんなの、初めてであります。堪忍?..」

叱られて訛りを訂正してみるも、お富士は氣に入らなかつたらしく、頬を膨らます。

お富士の里言葉談義が始まるとひばりが身構えたところで、

「用意は出来たかい

つか佐女郎が廊下に立っていた。どうやら、待させていたらし

「まだ着替えが出来てないのか。わつわと支度をし。今日は両替屋の息子が来るんだからね」

隣接する茶屋には、座敷を借りていた。見世には無い大座敷だ。もちろん、ひばりは座敷に入るのは初めてになる。

緊張に飛び出しそうな心臓をなんとか押し込め、平静を装い、姉たちの後につく。

「つか佐でお！」れぐす。「ええですか」

襖がすっと開けられた。中では既に、琴が静かに鳴らされている。上座に座る初老の男が、料理につけていた箸を置いた。

「久しぶりじゃの。元気そづじやないか」

「！」隠居せんじや

よほどの馴染みなのだろう、城やくな受け答へでつか佐は、「隠居の脇に腰を下ろすと、酒を進める。

町見世で女を抱きこぐる姿はない。琴の音色に混じって、予どもと女らが楽しげにじやれあつている声が聞こえる。  
こつもなれば、ひばりもその中にいる。

しかしひばりこは、その声が気にならなかつた。つか佐の一挙一動を吸い込もうと、無意識に集中していた。

どんな些細なことでも覚えるところ、どちらかの教えが、眠りのうちに染み込んでいたらしい。

あんまりにじつと見つめていたので、ひばりは自身に近づく影に気が付かなかった。

「君が、北国の子？」

突然視界に若い男の顔がどんどんと現れて、ひばりは思わず仰天した。

「あはははは、仁平から聞いたとおりだ。不思議な田をしている。めんこい、めんこい」

「ななな、なんですかあ～」

思わず田舎言葉が出てしまい、

「なんど1jやんじょ1t」

と直す。

「なんだ、田舎言葉はやめるのか。めんこいのに」

「八尋、禿を困らせるんじゃない」

「」隠居に諭されて、八尋と呼ばれた男は畏まり、ひばりの前に座した。

「失礼。私は木下八尋と言います。あなたが啖呵を切る羽田になつた馬鹿な男の弟ですよ。その節は、兄がお世話になりました」

丁稚かと思ひきや、「」隠居が、

「愚息どもは女の扱いが下手だな。すまんの、つか佐よ、  
ひばりは平伏しながら、この間の不逞の輩を思い出す。なるほど、  
両替屋の息子。生まれに自信がありそつであつたが、両替屋となる  
と納得がいった。

両替屋は、両替をするばかりの店ではない。金の貸し借りをする  
ほか、為替を発行するなど、江戸時代では銀行の役割をしていた。

ハ尋はびひらやら、ひばりに用があるらしき。どうこつた了見か察しかねるが、つか佐の言いつけでは、黙つて座つていなければならぬ。

ちらりとひばりは、つか佐を窺う。姉女郎は田線を、隠居に定めたまま会釈をしていて、こちらに気をやる様子は無い。

ひばりの心中を察してか、或いはまったく配慮するつもりがないのか、ハ尋は一方的に話し始めた。

「仁平を知つていろだらう。私は仁平とは気が合ひ仲でね。あいつに聞いたんだよ。

いやあ、痛快だつた。溜飲が下がるとは、このことだらう。あの兄は、牛みたいでね、寝ては食べ寝ては食べ、役立たずでね。

乳が出る分、まだ牛のほつがましだ。最近じやあ、牛は鍋にもなる。

牛より使えないとなると、田舎ではなんと言つんだい」

ひばりは返事をせぬまま、ぼんやりと思考の糸を手繕つた。そして、ある言葉が浮かぶのを、しかし口を開ざしたままであつたので、飲んだ。

押し黙るひばり、ひばりを待つハ尋。

しばしして、分け入ったのは、隠居だった。

「わしも知りたい」

つか佐を見る。つか佐は今度こそひばりに田を配り、頷く。

「……河童じや」

一言だけ、ひばりは告いだ。

「どうこう意味だ」

「泣いて飯を食べると河童になると云つ。鍬も持てん童子のことあります」

「ほづ、河童か」

それ以上、八尋は問わなかつた。何を思つてひばりに声をかけたのか分からぬほど、喋らない。ただ一人で宙に視線を漂わせ、考えに耽り、そのまま飯も食べずに過ぎしていた。

昼見世は毎七つ時まで。もう日没は近づいていた。

早めの夕餉をとつたら、女郎たちは座敷へと上がらねばならない。つか佐のよつな売れ筋の娼妓は息つく暇も無い。禿も同じこと。

四つ時、帰る客をアイノーアイノと見送るまで、ひばりの安堵する時間はなかつた。

今日はつか佐の座敷に居続けで揚がる者はいないので、最後の客の背中が人波に消え入つてしまつと、ひばりは「つやりと背伸びをした。

「なんだい、みつともない  
「あいすこません」

ひやりとして、顔を上げる。

つか佐は、特に厳しくいうではないらしく、涼しげな笑みを零してゐた。かまびすしい送迎の活気の中に、その色香は際立つてみえる。

うつとつとしていると、

「どちらいちど、何か話したかい」

「へえ、しつかりと言つてつけを守ることと、よく覚えたことと申し付けられました」

「わっしのじとは、なにか

尋究だと氣付いて、ひばりは僅かに目を瞬いた。つか佐の意図が知れず、しかし正直に言つてしまつのも躊躇われて、

「……特に、花魁に学べと  
「わっし」

探りを入れたわりにはあつさつと、つか佐は身を翻し、見世へと戻ってしまった。

日頃の挙動から、矜持の誉れ高いことは瞭然の花魁。  
その彼女の、日頃とずれた問いかけに、なによりその主たるもののがとらいちであつたことにひばりは立ちすくんだ。

なんで、とらいちのこと。

愕然として去りゆくつか佐の背を見やつていると、怖氣たつ感触がうなじを舐めた。

はつとして空を仰ぐと、淀んだ墨汁色の暗黒に月はなく、かわりに牡丹雪がちらつちらつと踊つていた。

水を含みすぎた雪は地面にあたりすぐに身をほぐしてしまつ。里とは質の違う雪に興ざめしながら、ひばりは、自分が随分と遠いところに来てしまったのだと思い起こした。  
連れてきたのは、とらいちだ。

つか佐花魁はとらいちに懸想しているのだつか。  
思い、それは静かな見定めとなる。白子といえ、自分のように歳のある禿を養うなど可笑しな話なのだ。禿を置くといふことは衣食

住を『』えるところ」と、みんなの錢を食つ。

ところは知つていて、この見世を選んだのかもしない。

知識や芸だけでなく、とにかく知れ。見て考え、よく悟れ。  
そして感づき、覚える。そのために五感を常に動かしておけ。

あの時とらいちが口にした言葉は、人の心までをも意味を孕んでいたのだろうか。

分からぬい、そのうち、分かつてしまふかもしねり。

雪は積もることを知らず、地面をしつとつと濡らしていく。吐息は白み、手はかじかむ。震える。歯の奥を凍えさせてひばりは眩いた。

「なんて、冷たいんだろう

なにがため、だれがために雪は降るのか。

幼い瘦躯に果てない夢想がよぎり、ひばりは、ただ厳威なる冬の夜を仰ぐばかりであった。

## 第十四話「身体は刻む」… 一八六〇夏

親兄弟たちは、自分を売った金で、ひもじに思いをせずに済んでいるだらうか。

ふいにそのことを思ったのは、蝉時雨の煩さに外を見やつた瞬間であった。天から落ちるようにその思にはやつてきて、息を詰めていると、手に持った筆から墨汁が滴つた。

「あつ」

慌ててみると時既に遅し。紙に墨汁は大きな点を作つてしまい、じわりじわりと滲んでいく。

「これ、ひばり」

扇子のお師匠さんに扇子でおでこを叩かれて、ひばりは小さく呻いた。

お稽古の帰り道、自分がそれほど親兄弟たちのことを考えていなかつたのだと今更に思う。忘れたわけではない。

昼には掃除、文使い、やれ読み書きだとんやわんや、夜には座敷で姉女郎と客の掛け合いで手練手管を見て学ぶ。

田まぐるしい時の中で、故郷に見捨てられた傷はいつしか癒えていたのだ。

不思議なものだ。意識せずとも自分は、籠の中の生き物になつてゐる。売られてきた頃にあつた不安や恐怖は、朱に交わつて消え入つてしまつた。

今はただ、姉たちを鏡に身を育て、しきたりに背筋を伸ばし、いつか女になるだらうといつう思いがある。諦念か観念か、それとも

全く違うものなのか。

どうせなるのなら、つか佐のようでありたい。

今宵は花魁道中がある。つか佐は仲の町大海屋の遊女として、先陣をきつて見世を出る。

暖簾を掲げた花魁、百年ほど前に使われた言葉で表すなら天神、太夫である。

かつては、客の待つ茶屋への道筋を花魁道中といった。時代に流れ茶屋を僅かばかりとした今日の吉原では、見世が自慢の花魁を外に見せる、いわば行進、凱旋のことを差す。

当然のことながら、見世は威信をかけていた。その花魁道中に、つか佐が選ばれたのだ。

道中を、外ハ文字といつ独特の歩みで悠然と進む花魁。目を瞑り頭に浮かべ、ひばりは自分が花魁にでもなつたかのように一步を踏み出した。

が、外ハ文字とは優美である一方で実に難しい歩き方なのだつた。三年の修行を要するとは露知らぬひばり、ついには釣合いが取れず、豪快に前からすつ転んだ。あたりにお稽古道具が散らばり、可愛らしい音を立てる。

あたりからくすくすというあざ笑いが聞こえて、ひばりは顔を真っ赤にさせながらも道具をかき集め、一気に立ち上がつた。

しかしながら、どこかおかしい。まじまじと見やると、悲しいかな、下駄の底が欠けていたのであった。

不寝番といつ、酒の席の仲裁や火の用心を主にやる男衆がいる。そのうちの仁平は、眼鏡をかけた小男なのだが、この仁平、とにかく手先が器用で、床几やら筆筒やら作るし鬚も結うし布物の解れもちょちょいと直してしまう。

そのため、よく修理事を任されていた。

「仁平」

裏に回ると、こつもの通り仁平は巧みに手先を動かしていくようだった。真夏らしく上半身を晒し、鬚の上に手ぬぐいを被せていて、嬉しいこと何十となくアマゾン草履に囲まれていた。

「ひばり、てめえまさかまた下駄ぶつこわしたんじやないだろ? な

あ

「えへへ」

「あー、もう、貸せ」

仁平はひばりの手の内から下駄をぶんびると、ひっくり返す。

「……ひつでえな。乱暴なてめえの気性が丸分かりだ」

「わっちはそんな乱暴もんじやありんせん」

「里言葉やら芸事ばっかり上達しても花魁にはなれんぜ。こんな外ハ文字じゅあ、話にならん」

「ど、どつして分かつんだあ！」

心臓が喉から飛び出しぬくなつて喉下を押さえたひばりに、仁平は鼻高をついたやうと笑うと、

「簡単だ。履物つつーもんはな、てめえの歩き方を教えてくれんのよ。ト駄の歯、草履の藁の削れ具合と泥のつき方でよ、簡単に分か

つちまつ。

それだけじゃねえ、お医者みてえに体のどこがわりいとか、分か  
つちまう。人の生き様つてもんが履物ひとつで分かるのよ

仁平は地に臥せつていた草履のひとつを手に取ると、

「これは右だけが削れてんだろう、こいつは左足に古傷が奉公人の  
でさあ。庇つて歩いてんのよ。女と惚れた腫れたでふすつと、やら  
れちまつたのよ」

一呼吸おき、

「こんな風にな。人の生き様つともんは、身体の形だ姿勢だなん  
だのつて、出てくんのよ。それを一番に刻むのは、履物つてえわけ。  
てめえはじやじや馬よ」

「じゃじゃ馬でなにが悪いつべが。それはそあと、わっしにも分か  
るかいな。教えてくなんせ？」

手のひらを返して、ひばりは首を傾げながら手を合わせた。

「てめえはいつもそうだな。教える教えろつて、こんなの身につけ  
ても花魁になれるのやぞ」

「だつて、とらいちが、なんでも学べつて言つたんだあ」

「とらいちとらいちつて、あんなの何処がいいってんだ」

「とらいちは、おらがどうすれば良いか教えてくれるし、たまに芸  
や世間様のことも教えてくれる。歌もうまいし、将棋だつて強いよ」

「強いだあ？　ああいうでかいのに限つて、ナーニは弱くて小さいいん  
だぞ！」

「ナーニつて、何？」

「てめえ、そりゃあ……」

「ほんと、咳をひとつで一人の掛け合いで割り入る恰幅のよい女。いつの間にやら、二人の横、内輪を片手にした三船がいた。

「良い話を聞いたね。人の生き様は身体に出るつていつのは、ためになるねえ。だけど、最後のほうは、真昼間には少しえげつないこないかい、センセ」

「すんまへん」

仁平が頭を欠いて詫びるのに呆れたような顔をしてから、三船はひばりに向き直つた。

「ひばり、この忙しいときに何を道草くつてるんだい。あなたはつか佐の禿なんだよ。花魁道中の後ろつていつたつてね、準備つてもんがあるだろ?」

「すんません、三船おかあさん」

「まったく、外ハ文字なんかあんたには早いよ」

一体いつから聞き耳をたてていたのだらう、そう思しながらひばりは、三船の後についていった。

## 第十五話「闇の上に立つ光」

見世は瑞氣伴う喧騒の最中にいた。慌しく四方八方と動く奉公人たちみな緊張の色を隠せずに顔を強張らせている。

身支度を終えたひばりは、糸を張ったような空氣を襖の外に感じながらも、手玉を投げて遊んでいた。暑いこともあって妙に汗ばむ手は、器用に三つの手玉を空中に躍らせる。

「ひばりちゃん、緊張してないの」

お富士に問われ、首を左右に振った。

「気持ちは浮き立つけんど……お祭りみてえだ。おり、さんせつて  
いつて、祭りじゃあよく踊つてたもんよ」

「暑さで頭が参っちゃったの間違いだろ?」

きゅうっと後ろから耳を抓られて、ひばりは身を捻つた。

本日の主役、つか佐女郎である。簡素な小袖姿で髪結いを待っているのだ。その涼しげな顔色は、季節に関係はないらしい。

「晴れ舞台なんだ。緩みのないよう頼むよ。転んだら、殺すからね」

その手には貸し本屋から借りた春画本が開かれている。江戸で流行りの、男女のまぐわいを描いた露骨な画集だ。

そちらの方こそこと刃向かいたい理不尽な話であるが、姉には逆らえぬ。

「あい……」

耳を押さえながら涙目で相槌し、なんとか解放してもうひとつ、だしぬけに、裸を乱暴に開くような音が響いた。

何事かと見やる。

そこには、すさまじい形相をした遊女が髪を振り乱し立ち廻りしていった。

激情に歪んだ顔だつたため、一瞬誰か分からなかつた。

つか佐の、小島姉さん、といつづきに、大海屋二番手と名高い遊女だと思い至る。

優雅な遊女は今、鬼気迫る面容でつか佐と視線を交わすと、驚くべき行動に乗り出した。

手をつき膝をつき、なんと頭を垂れたのだ。

普段は匂いたつ矜持と凜とした振る舞い、なにより常に穏やかである様子から多くの客の寵愛を受ける大人物。そしてつか佐にとつては姉女郎でもある。

当然のことながら、部屋の空気が一気に静まり返った。

「小島姉さん、なにをしなんす。顔をあげてくんさい。今宵はめでたい道中でござんしよう」

つか佐は、周囲の動搖よりも僅かに落ち着いた様子で膝を折ると、小島の肩に手を置いた。その細い手首を、小島がぐっと掴む。

「その道中、わっちにてたらんか」

さすがのつか佐も眉を顰め、里言葉を忘れた。

「姉さん、どういうこいつでえで

「訊かんで。どうか、どうか……」

畠にひたいを擦りつけ、ひたすら懇願するだけの小島を、つか佐はなんとか剥がしにかかる。

しかし小島は畠にしがみつかんと身体を曲げて、尚も懇願した。

「堪忍、堪忍じゃ。どうかどうか」

そこで不意に感づいて、つか佐は力を抜いた。

「どなたかに操をたてちまつたんですか」

崩れる小島は口を閉ざす。その沈黙が首肯となる。

「身上がりは病氣でなくて、操ですかい。ついに首が回らんくなつて来たんですかい」

身上がりとは、自分で花料を払つて休みに入ること。続けばすぐには、禿の飯代も勘定出来なくなる。それこそ、小島は四人の禿を抱えている。

図星だつたのだろう、

「あんたは、若いぢやないの。いくらだつて、道中を歩ける。わつちはもうすぐ三十路、もう墮ちるだけでしょ。最後の晴れ舞台と思つて、どうか、どうか慈悲を頂戴よ」

小島が顔を上げた。

絶望に打ちひしがれたものの顔がそこにあり、ひばりは俯く。それはかつて故郷で味わつた慢性的な飢饉と、それに苦しみ喘ぐ者たちを彷彿とさせた。

古くから吉原にいて、禿たちを養つてきた姉女郎。手を差し伸べてやりたいものだが、

「姉さん、それは道理にもとるつてえもんだ。わつちはさておき、大海屋はどうなりやすか。三船のかあさんはどうなりやすか」

つか佐の言葉は全くの正論である。無論それは、小島も承知の

上。拒まれた遊女は幽靈のように力なく立ち上がると、

「そうね。そうね」

と呟き、もたれかかるように襖を開けて、

「忘れて頂戴、少しだけ、具合が悪いの」

そのまま滑るように立ち去つていった。

まるで夢でも見たかのように呆然としていると、つか佐は腰をあげて開け放たれていた襖を閉め、

「誰にも言つんじやないよ」とだけ、言つた。

人垣がざつくりと割れる。

つか佐が外ハ文字で歩き出す。

島田に結わえた髷に二十の金簪かすらおひと拳ほどの紅色の櫛を挿し、左耳の上に絹を赤に染めた鬘帶かすらおひを巻く。

蔓に合わせて同系色の着物で纏めた。

十貫も重ねて着ているので、赤子をひとりふたり背負つより重い。  
それでもつか佐の足取りは軽やかだ。

外ハ文字。京の島原では歩幅の小さい内ハ文字だというが、吉原は違う。

歩幅は大きく、派手に。いつたん内に向けたつま先をついと外側に向けて、八の字を練るように描き、地を踏みしだく。

江戸前らしく豪快で、しかしながら色香を失わぬ歩き方。  
これを身につけるに、三年を要する。

背を僅かにそらせ遠く一点を見つめ、しづ、しづと三枚歯の高下

駄がゆく様は、人のものとは思えぬ品格を放つ。

大海屋の紋で赤く染め抜かれた傘をかざす男衆と、細かい細工によつて紫色に燃える提灯を持った引舟女郎が脇を固め、後ろに六人の禿がつき、さらにそれらを奉公人が囲む大行列だ。

真夏とはいえ肌寒い夜に、ただならぬ熱気がともる。

辻は見物客で溢れていたが、すぐさまそれはふたつに分かれ、静まつた。

感嘆と囁きが凧いた海のようにささやかに木霊する。皆が皆、僕わたくしに魂の抜けたような顔をして花魁道中を遠巻きに見つめている。

ひばりは、自分の姉女郎の偉大きさをひしひしと感じ、その傍にいられるということがどれほど誇らしいことなのかということを思い知っていた。六人の禿の中央から仰ぐつか佐の背中は最初の頃に抱いたものと変わらない。

日々の中でどれだけ人間臭さを知つていっても、その美しさは天女そのものだ。

惚けていると、刹那、つか佐の歩みが鈍つた。  
やにわに。

それは天女が不意に羽衣を落としかけて、掬うような動作だった。

花魁の機微に、誰も気付いていないようである。知る者のいない、つか佐の心を惑わす存在。

ひばりは、ひばりだけが知つていた。

とらいち。

顔の向きを変えず、ひばりは視線を走らせ、人ごみの遙か遠くに目を留めた。大柄の、顔に傷をつくつた長髪の男は、微笑むでなく、いつもどおりの仮面でそこにいた。

花魁道中はつか佐の晴れ舞台であるが、同様にひばりの、初めての晴れ舞台である。

亡八と賭けをしながら育てている禿がしくじらないか、或いは、直すべき点はないか見定めるのは、当然のことのようにも思われた。しかしながらその日は、監視というには優しく、穏やかなものにひばりは思える。

名を聞くだけで不安になり、傍にいると温かくなる、本当の飼い主。とらいちの田の片隅にでもいられることが、なんだか嬉しい。

くちべらしで殺されず生きて、つか佐とともにじきに出会えたこと。この巡り会いが堪らなく幸運に思えて、ひばりは気付かれないと打ち震えた。

……けれど。

同時に、一人の仲が少し気になつた。

女と男、男と女。恋慕の情を傾けて、時に身体を重ねる存在。幾ばくの思いと戯れる内に、先ほどの騒動も思い出す。

小島。矜持を抱き遊女として恥じぬ生き方をしてきた彼女が、操を立てて吉原のしきたりを踏み外す。愛染のなかへと墮ちてゆく。

秘める恋と秘めぬ恋。

人はどちらが、狂うのだ？

## 第十五話「闇の上に立つ光」（後書き）

【オマケ】  
こんなにちは、「汗ばむ鳥籠」をお手にとつて頂き、ありがとうございます。

ここまで読んで下さったお礼として、今後の後書きでは用語の解説などをチマチマしてこきたいなと思います。  
よしければ、じ覽下さい。

### 【見返り柳】

吉原の出入り口には柳が植えられていたそうです。通称、見返り柳といわれていて、今でも少しだけ残っています。

客は去り際に、この柳の木を名残惜しんで見たそうな。客の気持ちを歌つた「きぬぎぬの後ろ髪ひく柳かな 見返れば 意見か  
柳 顔をうつす」という詩があります。

### 【吉原の男たち】

吉原にはもちろん、男も働いていました。番頭、妓夫、見世番、二階番などなど、遊郭には仕事が沢山あつたようです。

彼らは吉原を離れ外で暮らすこともありました。しかし、吉原で働いていたことで見下され、仕事が無く、吉原に戻る者も多かつたそうです。

## 第十六話「初花」

生ぬるい湯煙が肌につきまとつて、産毛に小さな玉が浮く。

つか佐は、風呂でじつと丸まっていた。

無駄な肉のない少女のような脚を折り曲げ、両の手でそれを抱き、膝に顔を埋める。髪を結わぬ油も引いてない髪は長く彼女の白い背中に張り付く。

後ろの木戸が開けられ、何者かが入ってきた。重苦しい気配がか佐に近づき、遊女の可憐な肩を掴み、ぐつと引っ張る。

拍子に尻をつき、四肢が投げ出され、無垢な姿が風呂場の床に晒された。

流線型を描くならかな体躯には線をひいたような眉と鼻筋には冷えた美麗さがある。

くつきりと主張する鎖骨、乳房は大きく膨らんでいて先は紅色に熟れ、少し窺える肋骨や骨盤は可愛らしく、臍の小さいびれた腹、薄い茂みと流れれる。

風呂に侵入した者は、つか佐に覆いかぶさる。蒸ながら絡み合うふたつの身体。

つか佐はふふふと妖しく微笑むと、上半を軽く起こし、自身に覆いかぶさる何者かの顎を、無邪気な唇で吸つた。剃刀で剃つて幾日か経つた無精ひげを愛おしそうに舐めると、ちらりと目線を進める。

組み敷く者の肉体は焼けていて張りがあり、猛々しかつた。

腕は太く熱を流す血脉が走り、均整の取れた胸板は、はちきれんばかりに逞しい。腹は六つに割れていた。

遊女の小さく貪欲な舌が脣からちりりと現れ、屈強な肉体を、上から下へとゆづく這つ。

顎から喉仏まで、耳の後ろから鎖骨の中央へと出た筋を、胸を、小さな乳首を舐め甘く噛み、腹へと、鍛えられた腹筋をねぶりゆく。そして更なる秘所へと愛撫を加えようとしたところで、頭を撫でられ、止められた。

「もう良い、……ひばり」

心臓が飛び跳ねて、淫らな空想がぶつ飛んだ。

田の前にお富士がいて、心配そうにひばりの手を掴み、搖さぶっている。

「もう良いよ、ひばりちゃん。ちゃんと、じりしてその裸の取つてだけさつきから拭いているの」

指摘されて、雑巾を持った手を裸から離した。先ほどまでも執拗に拭いていたらしい取つ手は顔が映りそくなぐらい汚れが落ちていた。

「すまねえ。ちょっと、夢ば見とつたー。えっと、あ、魑魅魍魎が出てくる夢ー。」

なんとか誤魔化そうとして声を上擦らせるひばりにお富士は、

「ひばりちゃん、真毎間に夢見るの？」

「……おら、そういう、病氣なんだ、きっと」無体な空氣がにわかに一人を漂う。ひばりは困りかね、急に思い立つたように手を叩

いた。

「ああ、ししー、おしげが出たくなつた、行つてくるよー。」

訝しげな表情を保つたままのお富士を背に、ひばりはその場を後にする。廊下を渡りながらひばりは自分を叱責した。  
掃除をしていて、なぜ白昼夢を見るのだろう。しかもよりによつて、あんなに卑猥なものを。

顔を真っ赤にさせながらひばりは手水へとひた走り、飛び入った。木戸を閉め、ずるずると腰をおろし、大騒ぎな心臓を落ち着かせるべく深く息を吸い、吐いた。

「どうして、あんなもの……」

姉女郎の懸想の深さに気付いたためか、それにしてもどんな美しい白昼夢である。

齡十一、男女の秘め事に興味がないわけではないが、それにしてもあてがう組み合わせが悪かろう。

せめて見知らぬ美男美女で揃えれば良いものを、何を血迷つて、つか佐ととらにちなのか。

慚愧に襲われる。恥ずかしくて情けなくて、ひばりはついに泣きだしてしまつた。

膝に顔を押し付けて涙を塞ごうとするのに、留め止めなく湧いてくる。なんとか止めたくて、腹に力をこめた。

すると。

「……あれ

ふいに滲んだ違和感に、ひばりは立ち上がった。尿を少し漏らしてしまったような不快が股にある。

恐る恐る彼女は足元をめぐり上げると、隙間から手を忍び込ませた。指に、ぬるりとなにかがついて、尿ではないと知る。

何かと指先を見やつて、仰天した。視界が反転する。

あり得ぬ事態に眩暈を覚え、その場でひばりは意識を失った。

次に目覚めると、ひばりは布団に寝かされていた。  
何が起こったのか整理し、次に誰の部屋かと目を動かすと、脇で三船が帳簿を観覧している。

「おや。気がついたかい」

外から三味線と子どもらの楽しげな声が聞こえる。

「三船おかあさん、もう見世時……？」

「寝ておきな。つか佐には言つておいたから」

穏やかな笑みを向けられ、ひばりは起き上がりつとする四肢の力を抜いた。と同時に、あのことが不安として忍び寄ってきて、腹をかき乱していく。

「…………どうしよう、病気かもしれんす」

廁で彼女が自身の股間から拭ったものは、茶色い、唾液の混ざつた泥のようなものであつた。

あれは恐ろしい病の前兆かもしれない。

未知の恐怖から目をぎゅうっと瞑つて肩をかき抱くと、ふいに冷たい感触が額を覆つた。

三船だつた。

「大丈夫、初花だよ」

「初花？」

「お馬のことさ。身体が、少しづつ女に変わってる証拠だよ。十一か、あなたの年を考へると、少し早いかもね」

花が落ちる。

年頃になると月に一度、血が出るようになることは、ひばりも知っていた。自分の身体が少しづつ変化していることは分かつていて。平坦な乳房は少しづつ膨らんでいて、触ると痛みを訴える。股も時折濡れるようになつていて、毛も僅かながら生えている。

それでも初花は啓示のような驚きをひばりに与えていた。  
女になるのだとは思つてはいたが、いざ女になるのだと思つとしたまらなく心は荒立つ。

「そんな、おら……」

それ以上は言葉にならなかつた。

声にしようとして、心の影がひばりの喉を絞めた。

そんなひばりを三船は優しい表情のまま撫でる。まるで、本当の母親が子をあやすよつこ。

「ひばり、月厄の過いし方を教えてやるから。良いかい、よくお聞  
け」

薄い賭け布団をきちんととかけてやつてから、

「お馬つてじうのは、鞍のように折つた綿入りの布を股にあてがうからそういうんだよ。越中褲できちんと巻けばね、身体を動かすこ

とは平氣だよ。

だけどね、綿入りは何度か取り替えなくちゃあならない。腹も痛くなる。

だから円厄になると、姉さん方は一日の暇をとるだらう。あれはそういうわけや」

「……姉さん、御簾紙、使つた

「ああ、女は男とまぐわうと子どもが出来る。子の種を入れないようにな、勤めが終わつたら、御簾紙に油引きの紙を巻いて中に入れてくれるんだよ。そんで、水でよく洗うのさ」

「やうすれば、出来ない？」

「出来ないというわけではないね」

三船は少しだけ寂しげに眉を曲げると、開け放たれた格子窓の外を見やつた。

思つところがあるのだろうか。

普段は仲の町大見世の楼主として勝氣でいる三船が、田舎でよく話したお隣の老婦人のようにか弱く感ぜられる。

「出来たら、どうするの」

御船はほんの少し躊躇いがちに、

「……流すんだよ。

中条流に来てもらつてね、鬼灯ほおずきを入れるのだ。やつすると、毒が腹に回つて、子どもは流れていく。

水銀を飲むこともあるね」

「それでも出来たら、

「大抵は生まれながらの病気持ちでね、長生きは出来ないのさ。健やかなのは見世で育てて使つこともあるけれど、外にやるのが殆どだね」

御船の説明に、ひばりの頭の中で、様々の歳の子が流れていった。彼らを抱くのは故郷にある大きな河だ。

奥州を伊達まで流れしていく北上川。

その豊かで穏やかな流れに乗つて、子供もたちは流れしていく。

彼らもまた、河童なのだろうか。

「仁平がいるだろ？ あれはね、元々はそれなりに売れていた女郎の息子なんだよ。

親は産んだときに死んで、情けもあつて見世で育てたんだ。

生まれつき田が悪くてね、今じゃあとんと田が見えてないんだよ

「本当に？」

「そうさ。物の姿形がぼんやりと見えるくらいのもんだとよ。器用だから分からないだろ？」

けどね、殆どめしいているのは本当のことさ。だから不寝番なんだよ。五体の満足じゃない人間相手だとね、あつちは馬鹿にするもんで、仲裁には良いんだよ。

自分からね、不寝番になるって言つたんだよ

格子窓の外で、ひぐらしが遠く鳴いていた。

空には海の青を奪つたような空があつて、でつぱりと肥えた入道雲が風に流されていく。

夏のにおいが切なげに香る。

ふと、三船にも子どもがいるのだろうか、と思つた。

心なしか、ひばりの額に添えられた三船の手は僅かにわなないでいるようだ。これは、慈愛をもつ者の痺れではないだろうか。

そういうえばひばりが見世にやつってきた時、亡八の娘のものだと着物を与えられた。お富士の言ひことが確かなら、三船には一人の娘がいるはずなのだ。

しかしひばりには、それを訊ねるJとは出来なかつた。自分の身体の変化に対するJ惑いだけでなく、三船の思わぬ一面を垣間見て、言葉を失つていた。

粹な三船、折檻のときの鬼のよつた三船、そして。

「三船おかあさんば、優しい」

「なんだい、突然」

「わっち、優しいおかあさんが、大好きだよ?」

それを聞いて、三船がまた、少しだけ寂しげに笑い、「仁平と話をしていたら。生き様が身体に出ると」

ひばりの額に置いていた手のひらを翳す。

その手の無名指は、奇妙に骨がずれている。その部分を、撫で。

「本当にいいだろ?」

そしてそのまま、口をつぐんでしまつた。

## 第十六話「初花」（後書き）

### 【背景補足】

今回は少し男性には苦手な小話。本編と同じく、女性の月経について、補足いたします。

昔、生理用品というものはありませんでした。

生理の時にどうするべきかという知恵は、女性と女性の口伝によりました。それは、月のものが忌み嫌われていたためです。これに加えて私は、恥ずかしいことという意識があつたのでは、と考えています。

ともあれ、そのようなわけで生理の時にどうしていたかという資料はあまりなく、かなりの想像を加えています。越中禪の下りは史実としてあるようですが、綿をいれた布という下りは祖母から聞いた話を広げたものです。

昔、山道を通っていたときに突然きてしまって、困窮していたところにお坊さんが綿を差し出してくれて助かったという経験が祖母にはあり、その話を一度だけ聞いたのです。

祖母はそれ以上語りませんで。

今はかなり開けっぴろげですね。生理用品のCMなんて昔は考えられなかつたのではないかと思う。

コンビニでバイトをしていたときに生理用品を紙袋で包もうとして、必要ないとお客さんに言われたことがあります。

時代とともに意識は変わっていく。忌み嫌われ恥でもあつた月経への意識もどんどん変化している。

もしかしたら未来の人たちは、この時代の生理を描くの楽かもし

れません。

以上、とりとめのないですが補足とさせて下さい。  
読んで頂き有難うございました。

## 第十七話「狂氣」

季節の流れといつものほ、遅い遅いと感じるくせに、過ぎてみれば一日だけのことではなかつたのかと感づほど早い。

夏は少しずつを落ち着き、斜陽さえ温もりがなくなつて、いつの間にやら蝉の声も消えている。

ひぐらしだなんだのの声色も鳴りをひそめてしまつと、今度は不穏な囁きがよく聞こえるようになつていた。

「小島、また払いをしぶつているらしいよ」

「ああ、禿どもなど腹を空かせて、他の姉女郎の顔色ばかり窺つているそうじゃないか」

「馴染みの大見世の『隠居』一人も縁切りで、そしたらなんだい、閑古鳥だろ。」

あれだけ売れに売れた小島太夫も、こうなると名折れだね。操なんてたても、食えやしないのに」

大海屋を叩いたらあちらこちらから小島の話題が出てきそうな有様で、それが妙な陰氣となつて、廊下をいつも湿っぽくしているような気がする。

「お姉さん方、ここはお井戸じゃありんせんー。」

廊下の真ん中で雑談に耽る奉公人どもを一言で押しやると、ひばりはずんずんとその場を後にした。

陰口というものはどうにも好かない。他人をそしるのはどんな瓦版より楽しかろう。

しかしその楽しさはやがて嫌悪を周囲に植え付け、渦中の人物をこれ以上なく貶める。そういう陰気さが、嫌いだ。

同じ見世に腰を据えるものなら尚更だ。むしろ馴染みの少なくなつた女郎の評判をたてて、少しでも苦境を掃おうとするのが仲間といつものではないのか。

吉原では素見千人、客百人、聞夫が十人、地色一人という。外には冷やかしが殆どで、馴染みを捕まえるというのは實に苦労を要するものだ。

遊女が一人で愛想良くしていて客が来るというのは少なく、大抵は世間様にとりざたされなければお話にならない。

この夏の花魁道中を想起する。

あの夜、小島はつか佐にとんでもない懇願をした。姉女郎が妹女郎に頭を下げる、それだけで大事であるのに、なんと道中をやらせてくれと言ったのだ。

きつぱりと断られた後の小島は、すぐに不義を詫びたもの、その佇まいは人のものと思えない寂寥と、そしてなにより狂氣があつた。年季がじわりじわりと増えていく絶望感は、人の魂を蝕み、魍魎のようにしてしまうのだろうか。

なんとも悔しい気分になつていると、ふいに袖を引っ張られた。見やると、自分より四つ下の禿がいた。

「ひばりー、おいらに菓子あるー？」

「ひとつだつたらあげようか。ひとつだけだつたら、おかあさんに叱られなくて良いからね」

小島の、一番末の禿だ。道中の夜からどうにも気になってしまい、ついつい情から菓子を分けてからといつもの、口ひして甘えてくるようになった。

ひばりは花魁の禿であり、たまに菓子を座敷で頂くが、その量は多いとはいえないものだ。

それでも、小島の禿の境遇を思つと菓子用の巾着は紐を緩ませる。部屋に戻つて饅頭をひとつ『見る』と、禿は目を星のよつに輝かせて饅頭を頬張つた。

「今日は晩も飯、食わしてもいいぞうかい」

「わからんー。」

「あんねえ、でも上の姉さんは食べさしてもらひえるのよ」

「どうして。悪いことしたか」

「んーん、放爪するから」

放爪という言葉に、さつと血の気が引いた。

上等の遊女となると、口先で思つように客の心を操る。

それは口説であり、相手を落とすための術なのだ。落とさねば、馴染みにせねば、食つていかれない。

しかし

「拍子木までが嘘を言い」と、遊女を冷やかす話があるよつに、大抵の男は遊びだと信じない。

もし懸想をし、操をたてるならば、熊野神社の血判やら髪やらを文について相手を信用させる。

放爪とは、爪を剥ぎ送ること。

爪のない遊女など仕事にならぬ。それ故に、妹分の爪を剥げりつて  
いつのだ。

「なんて……」

それが手練手管であることは分かる。しかし、己の惚れた腫れで禿を飢えさせ、更に苦痛を強いるとは何事だらう。

ひばりは暫く青ざめていたが、ぐつと腹に氣合を込めて部屋を後にした。

上申しよう。自分には小島への強味がある。道中の夜の失態を、自分は知っているのだ。

氣分のよい方法ではないが、そのことを仄めかせば、禿に架している行為をなんとか抑えることが出来るかもしねり。

ひばりは腹を決め、小島の部屋へと向かつた。  
が、その足を予期せぬ喧騒が止めた。

昨晩の雨の影響で靄がかかる裏庭で、奉公人が悶着している。視界が悪くて探しにくいが、布を被せた戸板を囲んで、いくつかの見知らぬ顔と見世番と対峙しているようだ。

「何事かいの」

飛び込んで、声をかけた。

「何事もないよ。こいつらが、美佐が死んだからと切見世から死体を担いできたんだえ」

覚えのある名前。美佐というのは、足抜けに失敗して切見世に流された遊女の中である。そしてなにより、三船に激しい折檻を受

けていた、あの名である。

戸板に被せられた布は人の大きさに膨らんでいる。様子をと思い屈もうとして、しかし、噎せ返るような臭気に阻まれた。酷い悪臭である。肉の腐ったような据えた匂いは重たく、瞬く間に肺を侵す。

ひばりは反射的に手で口を押さえ、吐き氣を飲み込んだ。

「足抜けの遊女なんぞ、そのまま淨閑寺に投げ込んで畜生道に落とすのが筋つてもんだろ？。どうしてうちに持つてきたんじゃ…。」

見世番が食つて掛かると、切見世の奉公人らしき者達は口を揃えた。

「だからよ、小島つて女郎に頼まれたんだ。死んだらすぐに持つてこいと言われて」

「馬鹿やろ？、どうしてこうして、うちの小島が女郎の死体を欲しがるつてえんだ」

埒のあかない押し問答。それもそのはず、両者には引けない理由がある。

あちらは、頼みじと終わらせて金でも貰つつもりなのだろう。こちらはそれを受け入れるわけにはいかない。死体を貰うなど、大海屋の沽券に関わることだ。

騒ぎに気付いて、徐々に奉公人が集まってきた。その中に、渦中の人物の影があつた。

小島はいつものように着飾り、靄の中で浮き立つようだった。しばらく何事かと見物人よろしく佇んでいたが、ふと戸板に気がついて、猛烈な勢いで駆け寄り、縋り付いた。

「美佐だね、ああ、あああ……」

死臭など感じてさえいなによつに、小島は涙を浮かべて戸板に顔をこすり付けると、布を払つた。美佐の死体は獸のそれを捨てるときと同様に、荒薦あらいじゆで巻かれている。

さめざめと泣きながらも小島は、荒薦を剥ぐと、形骸を晒してゆく。ひばりは目を逸らしたかつたが、かつて大見世にいた姉さんであるという思いから堪え、視線を固定した。

現れたものに美佐の面影はない。がりがりに瘦せていた。あの夜ふつくらとしていた弾力のある肌は粉をふくほど乾き、どす黒い。髪の色も艶はなく苦勞の白が混じり、なにより、深く沈黙した面容はろくな死に方ではなかつたのだと一目で分かるほど醜く歪んでいた。

穢れそのものとなつた美佐を、それでも小島はいとおしげに見つめる。

ひばりはその姿に、小島と美佐は仲が良かつたのだろうか、と思つた。

美佐が畜生道に落とされる前に死に目が見たくて頼んだのか。

嘆き悲しむ小島。自分が感じているより、義理人情に厚い人なのかもしれない。

ひばりがそう思つて胸を下ろした束の間。

突然、小島が胸元から何かを取り出した。小刀だ。  
続けざまに小島は、なんと美佐の小指に突き刺した。

小島の凶行に、最初に悲鳴をあげたのは、小島に付き添う禿であった。それを合図に周囲が癪癩を起こしたようにざわめいた。

そんな騒然さを氣にも留めず、いや寧ろ世に己と骸しかないかのように、小島は小刀の刃を捻りこむ。一心不乱に、骨を断つために体重をかける。

やがて鈍い音が四散し、戸板からぼとりと小指が落ちた。

「やつた、やつた……」

肩で息をしながら小島は小指を摘むと、胸元から錢袋を取り出し、中身をばら撒いた。

唖然としていた切見世の奉公人たちが、錢の擦れる音に我へ返つて群がる。

凶行を終えた遊女は、恍惚の笑みを卑しく含ませ、美佐を背にする。

鬼だ。靄の中に佇む、鬼。

小島の禿は頭、戦慄していた。互いの身体を寄せ合い、がたがたと震え、嗚咽を剥き出しにしている。彼女たちにとつて、美佐の指切りは他人事ではないのだ。

このまま見過ごしては禿たちの身が危ない。

ひばりは小島を呼びとめようと手を伸ばした。

「小島！」

しかし、ひばりより一寸早く動いた人物がいた。

大海屋女主人。三船は小島の真横に走り寄ると、身の振り迷わず

その腰に蹴りを入れた。

いきなりのこと、受身もとれぬ小島は壁に身を打ちつけ、くず折れる。小指が地面に転がり、小島は手を伸ばす。

その上に、三船は下駄を穿いた自身の足を振り下ろした。

「ぎゃあああああ！」

絶叫が耳を切り裂く。ひばりは反射的に三船に抱きついた。「三船おかあさん、どうか、どうか落ち着かれて！」

しかし、どうしりとした風貌の大人の力に敵うはずもない。ひばりは一振りで払われて地面に尻をついた。

阿修羅のような顔、逆上した三船の怒りはおさまらない。身体を浮かせて小島の手のひらに立つと、その顔面に蹴りを入れた。

三枚歯の下駄が整った小島の美貌に噛み付き、肉をえぐり、血反吐が舞う。

「お前は！　お前という奴は！　この大海屋を汚すとは何事だ！」

罵声と共に食い込む下駄。小島は抵抗するばかりか自身の身体を底づことも出来ない。血と唾液が飛沫となつてあたりを汚す。

「おかあさん、死んでしまう！」

ひばりが再び止めに入る。

「死ねば良い！　こんな下郎死んでしまえば良い！」

「殺してしまいます、殺してしまう！」

制止するひばりの頭を美佐の死に顔が流れていく。

たくさん死に顔が。飢えた子どもらが。罹災と空腹の果てに子

を殺す親の顔が。

泣くに泣けぬ者たちの慟哭が。

次の瞬間、ひばりは三船の足に飛びついた。  
激しい動きに抱きつき、振り落とされないよう全身を強ばらせる。  
足が引きずられ皮がめくれ、擦り傷から血が膨らみ出る。

しかしけして離さなかつた。離すわけにはいかなかつた。

しがみつきながらついに、ひばりは叫んだ。

「あんたは大事な人を亡くしたことがないのか！」

ありとしある声が喉から絞り出された刹那、びくりと三船が身体を痙攣させた。

重苦しい静寂が世を潰す。騒々しさが瓦解する。

三船は、その足を、止めた。

「……もづ、良い」

すとんと何かが抜けてしまつたよつて三船は躊躇つて、優しくひばりの肩に手を置いた。

ひばりはゆっくりと腕を放す。がつちりと抱きついたために全身が痺れていた。

「おかあさん？」

ひばりの擦れた問いかけに、黙然と身を翻し、三船はその場を後にした。

## 第十八話「秋空」

小島は吉原の近くにある箕輪という場所の、保養所に移された。切見世に回されなかつたのは三船の情けか、それとも何か田算があつてのことなのか。

ともあれ、枯れ草の舞う季節、大海屋は少しづつ平穏さを取り戻しつつあつた。

三船に止めに入つたことへお咎めは無かつた。そればかりか、読み書き算盤だけでなく芸事の習いの許可も下りるだらうと、仁平から聞いた。となると、禿でなく引っ込み禿といつことになるのだろうか。

引っ込み禿は琴や三味線から舞の稽古までする。将来を約束されてゐる。

「認められているのだらうか」

昼夜見世時、中庭の掃き掃除をしながら、言葉にする。

実感は湧かなかつた。引っ込みになつたら新造になれる、ゆくゆくは遊女になる。女になつてみたいとは、思つ。だとしたら、花魁になつてみたいということ、だらうか。

帰趨はいざここにありにけり。惑つても、田々は移ろいやべ。

「あれ、君は、めんこい」

さつと、見覚えのある姿が視界の端に映つた。

「……木下の若旦那」

「どうしたの、こんなところで」

「ただの掃除さんす。若田那こじや、まだ昼見世でせうじやせんが  
「仁平に用事で。君に会えるとは、思わなかつた」

「そいですか」

適当にあしらひながら、この男は変人だと、ひばりは呆氣にとられる。君だのめんこいだのと、まるでおぼこ娘を冷やかす女たらしではないか。

爽やかそうな優男なのに、どうしてか、昼見世の度につか佐を差し置いて自分で遊ぼうとする。「隠居がつか佐を寵愛している間、やれ将棋を指そうとか、やれ歌留多をしようとか、誘つてくるのだ。楽しいには楽しいが、相手が違うのではとこつも思ひ。

ひばりは田舎育ちのおぼこに見えるかも知れない。しかし、娘と呼べる年齢ではまだない、つか佐に比べれば未熟なごぼう童子だ。

「今度、引っ込み禿になるんだろ？？」

「まだ先のことでありんしょ？」

「（）謙遜を。ひばりがやつと引っ込みになると外では話題だよ。楽しみだな。いずれ、新造になつて、見世に出て……」

どうしたことが、八尋の軽口が徐々に擦れていく。どうしたことかと、ひばりは首を傾げた。

「どうなさつた、若田那

「ひばりが客を取るのは、すこしそ寂しいなつて、思つたんだよ」  
本当に変なことを言つ男だ。

「若旦那も、お密さんでしょ」「う

「それもそうなんだが、きっと気軽に遊べなくなるのだろうな。きっと君は、花魁になる」

花魁。八尋が花魁などと口にするとは思っていなかつたひばりは、少しばかり驚き、目を瞬いた。

「そんな大それたこと。わつちは田舎生まれのおぼこで、禿になつたのも遅れて十のこと。御戯れも程ほどになんせ」

「君は気付いていないの」

素つ頓狂な声をあげて、八尋はひばりに田のよくな田を向けた。思わずたじろぐひばりに、

「将棋だなんだのでは十も二十も先のことを読むほど賢しいのに、自分のことは知りもしないんだね」

「何を」

「君が心配だ。つか佐に焦がれるばかりに、己を見失つていると、誰かの掘る穴にも気付かないよ」

八尋の真摯な瞳と嘘偽りの匂いのない口ぶりが、ひばりを動搖させる。不安にさせる。いつも飄々としている男が放つ警告は、存外にも重たかった。

「……御免。言いすぎた」

押し黙るひばりに罪悪を覚えたのか、八尋は急に顔を背けると、

「君はまだ十一だもんな、忘れて良い。ただ、覚えていてくれ。その、損はないと思つ

八尋のたどたどしい繕いにひばりは素直に頷いた。

恐ろしげな内容ではあるが、役にたつような気がする。大人がひ

ぱりにこいつた話を振ると、そこには必ず意味があった。無意味な助言など、ひとつもないのだ。

「有難う」

「どういたしまして」

感謝と笑顔で互いの空氣を解す。あつといつ間にさわほどの重苦しい空氣は飛んでいき、いつもひばり、こつものハ尋に戻る。

それとほぼ同時刻、まるで時宜を見計らつたように、風呂じまいの声が屋敷に響いた。奉公人がどやどやと廊下を渡り、部屋中に昼見世の準備を促す。

「今日は『隠居』といひつしやる?」

「いや。また今度だ。次はもつと、良い話を持つてくるよ」

すつきつとした清秋の天空、背の高い蒼に薄く雲が千切れている。その下にハ尋がいる。ハ尋は空に似ていると思う。爽快で、掴めなくて……。

けれどひばりは、口にはしなかった。そのまま心に仕舞い込み、ハ尋の背中を見送った。

## 第十九話「カルマの指」

その日は憂えているよつた空だった。じんよりと重たげな雨雲は今にも泣き出しそうで、ひばりは急いで物干し竿から衣を取り外していった。

「ひばり」

だから、その声をもう少しで聞き漏らすところであった。呼ばれたような気がして振り返ると、三船が廊下から庭先の物干し場へと視線を落としていた。

「どうしたんです、三船おかあさん」

無意識に喉が強張る。先日の夜の一件から三船と会つていなかつたひばりは、お咎めがないものと思い込んでいたが、そうではないのだろうか。

身構えていると、

「話があるから、おいで」

「お話ですか？」

「そうだよ」

三船の生氣のない物言いに、自然と力が抜ける。ひばりは布団を廊下に上げ終わると、三船の部屋へとついていった。

久しふりの三船の部屋、キセルの匂いがひばりを軽く酔わせる。

まるで将棋でも指すように一人、座布団の上に対峙すると、三船がキセルに種をつめて、火をつけた。緩やかな紫煙と濃厚な煙草の香りが部屋にくゆる。

ひばりは煙など気にせず、ひたすら脚筋を緊張させ、汗ばむ拳を握りこんだ。

「一体、話とはなんなのか。やはり、自分が止めに入つたことが気にな食わなかつたのか。

冷や汗が体中から滲む。がちがちに固まりながらキセルで一息つける三船の動向を見やつてみると、

「話だが」

ふいに三船が口を開いた。

「三島が死んだ」

一瞬のうちに耳を疑い、ひばりは呼吸をするのを忘れた。三船が死んだ、しかも自殺だといふ。一体、どうしたことなのか。三船が殺したのか。

「私を、酷い女だと、思つかね」

しかし、続く三船の言葉があまりにも寂漠としていて、責めやる感情が奪われる。

「自殺だった。梁に帯を巻いてね、首を吊つたんだよ  
「自殺……」

「養生に入ると、その間に必要な金は全部年季に回るんだよ。それに加えて、馴染みの男が江戸から消えたらしい。元々矜持の高い子だったからね、もつ、生きるこは辛すぎたんだりつも」

私を酷い女と思つかい、と、三船は付け加えた。

普段の貫禄ある三船とは明らかに違う。あの夜、ひばりの制止に小島への怒りを失い、部屋へと帰つていった三島のまま。

そればかりか、力尽きたような三船は更に陰鬱と感ぜられる。まるで一日で十年も年老いてしまつたかのように。

三島の折檻は異常だと思えた、しかしながら小島の行動に非がなかつたかと言えばけしてそうではない。

そればかりか、小島も鬼のようだつた。操を立てて金回りに窮し、禿に苦を強い、最後には昔の朋輩である美佐の指を切り落としたのである。正氣の沙汰ではない。

「そんなことはない、三船おかあさんが怒るのも、無理はありんせん」

応えたひばりに、

「小島がああなつたのは、この大海屋にいたからだ。もし町の娘なら、いく並みの恋慕をかけられただろ? よ」

三島はキセルを火鉢に引っ掛けると、両の手を広げた。右の手の五本目、細く短い無名指が僅かに捩れ、曲がっている。

「この間、お前は仁平と話していただろ? 生き様が身体に出るとみてじ覽、この指を。これはね、本当は、真っ直ぐだつたんだよ。だけど曲がつた。ろくな生き方をしてないからさ。女を囮つて、子どもを流して、しまいにや借金地獄に落とす酷い女なのさ。仏さんも、見捨てちまつ

少しばかり節の目立ち始めた手がわなないで、畳を小刻みに叩く。あまりにも儂い、まるで死の淵にたつ者の手のような、三船の手。

ひばりは反射的に、その右手を、幼い両手で包み込んだ。  
そしてきつぱっと、言こ切った。

「そんなことない、三船おかあさんは、わっしを看病したわ」

なにがそうさせたのか。突き上げる戸惑いがそうさせたのか。ただただひばりは、三船の手を握った。そうしなければ、三船が消えてなくなってしまうような気がした。

迷子にならないよう親の手を必死で掴む子どものように、ひばりはついには、腕ごと胸に抱き寄せる。  
どくり、どくりと三船の脈が静かに鳴っている。  
懸命に、すがりつぶ。

やがて、

「……娘がいたんだよ。ちゅうど、お前くらこの」

三船が口を開いた。

「だけどね、地震で死んだ」

箪笥に叢えた背をもたせかけ、

「仄聞したことはあるだろ。四年前の大地震だよ」  
ためらいがちに、呟く。  
朴訥と口を振り返る。

「安政の、神無月。夜だった。夜見世の、半ばくらいだったたろ。つか  
……。

娘を寝かしつけようと思つてね、一人で横になつていた。予兆なんざなかつたね。

忽然と、床がなくなつた

胡乱な目がついと天を泳ぎ、

「ああ、地震だと思つてね、怖かつた。上も下もなくつて、真つ暗闇さ。建物が潰れちまつた。

娘は泣いてね、だけど身体が動かなくつてね。声だけで慰めていたら、手を探つてね、無名指だけぎゅっと、握つてきた。

そうして一人して、助けを待つた」

自身の無名指を、左手で握る。

「そのうち、悲鳴と焦げ臭い匂いがあつた。

ああ、死ぬんだなと思って、でも、娘だけは死なせたくないなくてね、叫んでもいたら、娘が熱いと泣き出した。火鉢の火が、そっちに回つたんだろう。

ぎゅっと指を掴んできてね。千切れるかといつぐらいの力で握つて、あついあついと泣くんだよ。

そのうち煙も回つてきてね、声が小さくなつてきてね。指を握る手もゆるくなつてきて、……脈もとまつた

指を掴む左手が徐々に締まる。

「そしたら、仁平の声がして、急に身体が軽くなつた。  
びっくりしたよ。梁が下に落ちていた。私は簾笥に下敷きになつていて、あの子の腕だけ梁の間からぬつと出でた。

一面が火の海でね、奉公人のやつら、私だけ引きずつていくんだけよ

三船は慟哭を内に閉じ込めたよつと、おののく。

「どうしてと思う、どうしようもなかつたとも思ひ。分からぬ。でも私あ、あの子の指から離れてしまつた」

深く瞑る。

閉じすぎた臉に堪えている悲壯に、それでも涙は滲み、吉原大見世大海屋主人はか細い川をつくる。  
川は記憶から後悔を紡いでゆく。

「……次にあの子に会えたのは、夢ん中だつた。

骨を拾おうとはしたんだけど、小さくて見つからなかつた。夢ん中でね、どんどん空に上つていつちまつた」

なおも、無名指を捻る力は緩まず。

「きつと、私の所業にお怒りになつて、仏さんがつれてつちまつたんだ。

だつてそういう、私には勿体無いくらいの、いい子だつたんだよ。死んだ旦那の忘れ形見でね、そりやあ、いい子だつたんだ。  
死ぬわきやあ、なかつたんだよ」

由み、揃れていぐ。

「どうしてだひつ。こんな女の命を奪つていけばいいのに。私を殺せばいいのに。

業といつものなんだひつか。水子ばかり見てきた、業なんだひつか。

今じゃあ鬼と違わないさ。腹いせに遊女をいたぶるんだ、恐ろしい、だから指が戻らない。あの口から、どんどん曲がつていぐ。

汚い、汚い……」

つにに指は、／＼の字を描いて血を失い、歪んでいた。

しかし三船は自身の痛みなど分からぬように力を注ぎ続ける。どんどん、どんどん……。

ひばりは溜まらず、三船の両手を離さずと手を突き出した。

渾身の力をもって、三船の腕を掴み、制止する。手と手、指と指の間に力を滑り込ませ、引き離すために顔を紅潮させる。

「私は汚いんだ、汚い、汚い！」

抵抗する三船の力は頑なだった。幼いひばりにはあまりにも強勒であった。しかしここで、引き下がるわけにはいかなかつた。意を決して、ひばりは行動に出た。

「……おかあさん……」

無我夢中、遮り無む無む指を摘むと、その指に甘噛みをした。

予想だにしていなかつたのだろう。三船は刹那にひるみ、ひばりはそれを見逃さず、右の無名指を腕じと抱き寄せた。

「あがねえ！」

捩れた指に優しく頬を寄せ、さつと三船を睨む。いつの間にか、ひばりは涙を浮かべていた。

「そんなことあつやせん。おかあさん、あがねえ、それはあがねえよ……」

ひばりはしゃくづあげながら、三船を見つめた。

「ええですか、おかあさん。わづちの生まれ故郷では、畠ばかり耕

すもんで、みんな手が年寄りのようだつたよ。

だけどね、それを汚いなど思つたことはないです。手が曲がつていて、なんなんです。それくらい、どうひいてあります。

神さんか曲げたんでない

頭を振つてから、更に頬を摺り寄せ、

「ええそうじょう。確かに、おかあさんは沢山、赤ん坊を流したかもしれん。仏さんはお怒りかもしんねえ。

だけど、吉原で生きる者の、それが生きるために術でしょう。それくらい、娘さんだつて分かるべ。

子どもだって、そんぐれえの」と

ひばりの心の中には、二船と三船の娘。そして村の姿があつた。とても厳格な冬、苦界といつてもまだ足りぬ寂しい土地。そこにはまれ、生きる運命を背負つた者たちの姿。生き様。

疲れきり老いた手、痛みに捻じ曲がつた指。  
一体、なにを恥じことがあるだろ？

「この手は、一生懸命、生まれた土地で生きた手でしょう。吉原で生きてきた手でしょう。遊女や禿らを守つてきた手でしょう。娘さんの最後を看取つた手でしょう。」娘さ

この手の、この指の、何が汚いべか！

汚いことなど、あるものか！」

幼い一喝が部屋を打ち、沈みゆく。

「おかあさん、おいらこの手が好きだ。

だから寂しいこといわんでくなせえ。悲しいこといわんでくなせ

え。そんなこと言つたら、おらは、ひばりは……」

それ以上の叱咤は、高ぶつた感情が堰きとめてしまつた。悲しみは細く小さい肩を微動させ、華奢なうなじまで赤くする。

三船は打ちひしがれたように、顔の皺を解いた。

そうして、自分の腕に絡みつく幼い熱、ひばりに視線をこぼした。親に捨てられ売られてきた少女が、見世の主人のために泣いているという情景。いや、主人という概念を越えて心をぶつけている光景。

それらが三船の潤んだ目に、ゆっくりと、染み込んでゆく。

しばらぐしてから三船は、右の無名指でついと眉間をなぞり、皺をほぐすようにひとしきり揉んだ。その動作は疲れているというよりも穏やかな気持ちから生まれたもののように、ビロか優美だ。

「「」めんよ。弱気になつていたみたいだよ」

眉間から、ひばりの髪へと指が移る。柔らかく芯のある黒髪を撫でる。

「なんだだらうね。ただ、小鳥が死んだことを伝えたかつたのにね。悪い話をしたよ」

三船の様子に応じて、ひばりは顔をあげた。

黒の眼に縁の眼に、長い睫毛が水に濡れた蝶となつて瞬き、ぱつちりと開く。

「そんな。おかあさん、わつちは有難いよ。なんだか」「ひじで一人きり、本当のおかあさんみたいだ。

おかあさんみたい。おうちで、一人で……」

安堵したのか、ひばりは笑みを漏らした。激情で固まっていた頬を緩め、花のように笑う。

そうしてひばりは、再び三船の手に頬を添えた。

## 第一十話「恋の無駄」

どんな人間も誰も知らぬ思いを秘めている。業を背負つてゐる。従順と私淑がひばりに『』えたものは人の生き様そのものなのかもしれない。

様々な命があり、道があり、故ゆえがある。それを知つていくだびにひばりは、自分がどうあれば良いのかを少しずつ学んでいるような気がした。

思想から五感、五感から肢体へと『』の何かが変わっていくような予感が。

そんな日々の中、膨らんでいく疑問がひとつあった。  
とらいちのことだ。

彼もまた、業を背負つてゐるのだろうかと、ひばりは不意に考え込むようになっていた。

顔に刻まれた醜い傷はどうして生まれたのか、その傷の裏にはなにがあるのか。

しかし、訊ねられはしない。

とらいちには嫌われたくないという思いが、ひばりの心のどこかにあった。会い合つとその気持ちはより強くなるのだ。

「 そうか、初花がきたか」  
「うん」

いつもの通り、屋下がりの密談。  
ひばりはとらいちと一緒に、部屋の中で座していた。

時折、とらこちにいつして田々の報告をする。とらこちはひばりから話を聞いて、助言を施し、必要なびや遊び、立ち振る舞いを教える。

主従であり、師徒である。この関係は崩れることなく、もう一年が経とうとしている。

ひばりの話を聞き終わり、とらこちは床に置いていた扇袋を引き寄せ、胡坐のまま中を探った。お守りのようなものを取り出すと、ひばりの手の中に握らせめる。

「これはなあに？」

「桃仁だ。月厄に効く。腹が痛んだら、飲め

ひばりは袋をつつつきながら、

「とらこちはなんでも知ってるね」

「俺はあまり知らん。蘭医に頼まれて売り歩いているだけだ」

知悉な男の思いがけない勤め」と、ひばりは刮目した。

「薬売りなの」

「言つていなかつたか」

「なにも知らない」

とらこちのことは、なんにも知らない。改めてそのことを自覚して、ひばりは心が僅かに波を打つを感じた。

些細な動搖。とらこちは気に留めしない。

胸が疼く。喉まで痛む。とらこちへの興味と恐怖がもつれあって膨張する。

けれど好奇心をむき出しにするわけにはいかなかつた。近づくと、つるりと離れていくような気がする。

とても寡黙な男だ。愛想笑いの出来ない、遁世しきつた、つれな人。

そのくせ纖細な表情をつくるとらいちには、無闇に触れてはいけないと、ひばりの直感が訴えている。

駄目だ、知つてはならない。自分はただ、知られる側であればいい。

ひばりは自分の突き上げる欲求を殺したくて、慌てて話題を探した。なにか、いつか疑問に思つたことを。

「……恋」

はたと閃く。

「秘める恋と、秘めぬ恋。どつちが、狂う？」

ひばりはとらいちの顔を横目に尋ねた。

雑談を舌で転がす風を装う。取り留めないものをと無心して、あまりにもとらいちの琴線を弾かないものを選んでしまつたよう

で、ひばりは恥じた。これでは子ども同士のお喋りだ。

しかし、

「何の話だ」

面を食らつたようなとらいちの顔。予想外にも無視されず、ひばりは言い淀んだ。

「その、えつと、操」

「操？」

「お密に操をたてたお姉さんがいて、その」

「小島か」

「そり」

大馬鹿をした。語るべき内容ではない。小島は自殺したのだ。自分  
のしぐじりに、胸襟で臍を噛む。

ひばりはなんとか話を誤魔化そうとして、

「恋が羨ましいか」

挫かれた。

「……分からぬ」

「狂うとは？」

「それは、どっちが狂うんだろ？　つらこんだろ？　」

口にしてみると不思議だ、重みを増す。

そこでひばりは途端に、それが単に結んだ口太ではないことに、  
隠れた妄執からもたらされた必然的な問いだと感づいた。

「でもきっと、秘める恋の方が楽。秘めぬ恋は、死んでしまうもの。  
殺されてしまうもの。だからずつと、秘めていた方が良い」

結果を口走る。そいつさとの話題を終わらせてしまいたい。とても  
嫌な気分だ。不気味な廃墟に立ち入ってしまったような。  
この話は、いけない。

「きつとねつ、だからー。」

「どちらの恋も、するな」

すじつと、心臓がひしゃげた。

「いいか。恋などするもんじゃない。恋など、無意味だ」

とらいちの鋭利な目が、重たい声色が、石のように腹にたまる。喉を詰める。

「お前は素直に、女になつて男を騙していれば良い。本気にはなるな」

「石に押されて、頭に血が上つやべ。

「どうして。そんな無体なことを、そんなことは」

「無駄だ」

「どうして」

ひばりは立ち上がり、堰を切ったように訴えた。

「なして無駄だと言うの？　とらいちは恋をしたことがないか。姉さんたちの気持ちがわからんか。ああも狂う思いをしたことがないからそんなこと言えるんだろう。姉さんたちを馬鹿にしないで……」

抑えてはいるものの、身体の内では憤怒が激しく燃え盛り、流動していた。溶岩が肉体を巡つてゐるよう。烈火の熱が瘦躯を巡つている。

そんなひばりを、正反対に、無愛想な眼差しが捉えた。

「冷静になれ。ソレはダメだ」

「吉原だ！」

「そう、吉原だ」

わっぱり言い放ち、とらいちは腰を上げた。長身が塙のよつと立

ちはだかり、幼い禿を威圧する。

負けじとひばりは拳を握り締めた。殴りかかってやつてもいいといふ意地があつた。姉たちのためにも引き下がるわけにはいかないと、ひばりは腹を括つた。

しかし、とらこちの切り返しはひばりの頑固な怒りを両断した。「吉原では、恋は出来ない」

すっぱりと、切られる。有無も言わせぬ氣迫に、ひばりは瞬く間にひるんだ。いや、当惑した。  
とらいちの田に、声に、嘲りの色がひとつもない。漆黒の、硝子球のような瞳。

ひばりの中で遠い日が急速に蘇る。とらこちと一緒に湯を浴びたあの日。乱暴にひばりの身体を晒したあの日。

「鳥籠では報われない。鳥は卵を産めても、その中には何もない」

淡々と語るとらこちの田に、光はない。泥のよひに、闇のよひに、深い海のような瞳。  
救われない迷宮に閉ざされた者の色。  
ひばりの、両親の色。

「冷静に考えてみるんだな。恋など、無駄だ」

ひばりを置き去りに、とらこちは襖を開けて外に出る。

「また来る。それまでに忘れておけ」  
言い捨て、乱暴に襖が壁となる。

ひばりは一人、立しひへました。触れではなうないと肝に銘じて、たまなのにて、溺れる。

己の浅はかをこ悔いて、悔いて、悔いて。

じつすれば良いか分からず、立しひへました。

## 第一十話「恋の無駄」（後書き）

書くべきか迷いましたが……、二船についてお話をしたいなと思いまして、よろしければおつき合って下さい。

IJのHPは実体験から生まれました。自分は療養病院に実習生として行つたことがあります。その際に、ある患者様から「あなたの手は綺麗。私と違うね」と言されました。

自分は、「 わんの手も綺麗」と答えました。すると患者様は

「私の小指は曲がってる」と悲しげに指をさすりました。

「私はひどかつたから」生きざまが指に出るんだと。

その患者様は裕福な方で、九十を越えて元気で、だからそんな風に悔いている姿に驚きました。

自分は昔、絵ばかり描いていて、沢山筆を握つたせいで右薬指にタコができるて爪が真っ直ぐ生えていません。

「私も曲がっているんだよ」と見せると、「あなたの手は綺麗。曲がつてて、私のは曲がてる」と言つて咳き続けました。

その患者様にそんなことは無いと訴えても、患者様は指を見て何かを恥じていてました。その方は「病気で耳や目がよくありません。記憶も保つことが難しい。だからずっと指を撫で続けてします」と言います。

患者様に恥じることはないと伝えたくて、けれど術が見つかりませんでした。

患者様が自分の小説を読むことはないと想いますが、あのとき伝えられなかつたことを残したくて、物語に少し加えました。

でも、たつた一言の難し方に、何万文字も使ってもまだ足りそう

にないと、最近思います。

## 第一十一話「お稽古とひばり」

太陽が照らすと江戸は起きるが、吉原は太陽が落ちて漸く目を覚ます。

昼間から遊ぶ客などは切見世に行くのだ。大見世で昼間から遊ぶのは「隠居くらべ」のもので、大海屋の禿や遊女の多くにとつて、昼見世時はひとときの休息となる。

しかしながら、引っ込み、つまり遊女の見習いとして上がつたひばりは、お稽古ごとに勤しむのが日課となっていた。

今まであつた習字や算盤とは違つ、琴や三味線。芸事のための慣れない稽古を身体に叩き込み、ぐたぐたになつて岐路につく。

毎日が、がむしゃらだ。

見世では、禿たちが蹴鞠でかいた汗を手ぬぐいで拭つていた。それを羨ましいとは思わない。お稽古をさせてもらひつゝとは幸運なことなのだ。

ひばり、十一歳。見世に来て約一年、異例の扱いである。見世が期待しているのならば、三船が気をかけてくれるのならば、彼女は全力で応える。それが筋であり、生きる術だ。

にしては少々無理をしているようでもあるのは、どちらかといの一件のせいだった。

数日前にとらこちと悶着して以来、そのことを考えたくないで、一心不乱になつてしまつている。許されたいという思いなのか、見返したいという思いなのか、漠としているけれど。

部屋へと戻ると、すれ違こざまにお富士が出て行つていた。

「お富士ちゃん、ただいま」

「あ、ひばりちゃん、おかげり……」

ひばりが部屋に帰つてくると思つていなかつたのか、お富士は田を丸くすると、そそくかと行つてしまつた。

「お富士ちゃん?」

普段は明るいお富士の、なにか氣まずいものを隠すような態度。僅かな引っ掛かりを覚えてみるも、それほど氣にせず、ひばりは部屋に入つて夜見世の準備を始めた。

朝からずつと、今日の夜見世はめりやす足袋を穿いていくつと考えていた。ひとつめのめりやす足袋に穴が開いてしまい、一円ほど前に新しいものを見世から貰つたのだ。つか佐から分けてもらつた麝香の匂い袋に包んでいるので、素晴らしい薫香が染み付いている頃合い。

ひばりは頬を紅潮させながら、簞笥を引いた。

「あれ……」

しかし、あるはずのめりやす足袋がそこにはなかつた。

田を疑つて、簞笥の中を探る。たちまち、その動作に、強烈なはずの麝香の香りは消えてしまった。

めりやす足袋も、匂い袋もない。そんなはずはないのに。

下の段から上の段へ、次々と簞笥の中を確認するも、やはり足袋はない。

ひばりは慌てて部屋を探した。しかしありやす足袋は見当たらぬ

い。

しばし呆然として、次第に激しい焦燥が沸き立つてきた。

「どうしよう。どうしよう……」

めりやす足袋は、匂い袋は、ひばりにとつて大切な宝物なのだ。  
それだけではない、大人たちがひばりに『えてくれたものをなくしてしまるのは、信用を失うのと同様である。

ひばりは再度、部屋の隅々まで確かめると、廊下へと飛び出した。  
通りかかる大人たちに聞いて回る。洗濯場と風呂と、あるはずはない  
と分かつていて、一縷の可能性にかけて巡る。

庭先で遊びつかれて座り込む禿たちに尋ねるも、彼らは知らない  
らしく、首を左右に振った。

「ええ、ひばりちゃん、つか佐姉さんから貰いものをなくしたんす  
か」

事情を話すと、一人の禿が大げさに両の手をあげた。その軽い振  
る舞いが驚くほど胸を刺す。

「わっちら、知りやせん。めりやす足袋など、とんと見てないよ  
「おおかた麝香の匂いがきつくて、逃げちまたのでないの」

けられると笑われて、動搖しきつていたひばりは目が燃えるよう  
に熱を出すのを感じた。

人前で泣くわけにはいかず、人目のない裏手へと回り、座りこむ。  
そこでぐつと、涙を堪えた。

泣くわけにはいかなかつた。泣いて探し物が見つかるわけでもない。目を腫らして夜見世に出るわけにもいかない。物がなくなるなど、それこそあるはずがないのだ。きっと誰かが持つていつたに違いない。

誰か。

冷静に考えて、真っ先にお富士の顔が浮かんだ。筆筒を共有しているのはお富士だ。彼女に訊いてみよう。もしかしたら間違つて持つていつたことはないだろうか。

ひばりは再び、遊郭を右往左往、お富士を探した。

手水の手前。よつやく田の端にお富士を捉え、呼びかけよつと口を開く。が、躊躇がそれを踏み止めさせた。

お富士が廁の板戸から、怪しげに田を配つてゐる。思わずひばりは物陰に隠れ、彼女の警見から逃れた。

何をしているのだろう。お富士の行動は不審だ。いつもは可憐で性根の良い朋輩が、打つて変わって、まるで人の田を警戒する猫のようである。

お富士は人がいないことを確かめ終えると、ぴゅんと反対方向へと廊下を渡つていつた。

鉢合わせしないで済み、なんとなしに胸を撫でる。しかしあお富士の行動は疑惑をひばりに残した。

「わっかかる、お富士ちゃん、変だ……」

一体、彼女は何をしていたんだろう。真相を知りたくて、ひばりは廁の戸板を引いて中へ足を踏み入れた。

ふいに、手水独特の臭気に混じって、甘い匂いが鼻腔を突いた。覚えのある、珍しい匂い……麝香だ。

怖気たつ嫌な予感が、ひばりの全身を引っかく。

床下に置かれた、便所の蓋。それをまじまじと見下ろしてから、ひばりは指先で摘んだ。人の糞尿を閉じ込めているそれを、一気にずらす。

悪臭と共に、麝香が舞つた。

間違いない。更に奥まで視線を落とし、そこに香り以上の証拠を認めて、ひばりは今度こそ、涙を止められなくなつた。

激しい熱が瞬く間に彼女の肺を満たして、感情の堰が崩壊する。ひばりは手水を駆け足で出ると、廊下に蹲つた。

一体誰が、誰がこんなこと。

考えてすぐ、誰かは検討がついた。彼女しかいない。彼女しかいない。

「どうして、どうして、お富士ちゃん……」

ひばりは嗚咽に溺れながら、人目も憚らず号泣した。

## 第一十一話「お富士とひばり」（後書き）

作品を手にとつていただき有り難うござります。春エロス参加なのにあんまりエロスがなくてすみません……。  
もうすぐ後半なのでがんばりたいです。

えと、オマケ小話です。

### 【過酷な環境？】

激しい折檻と性病、少ない食事などによって遊女の平均寿命はとても低かつたというのが通説ですが、それは誤りでないかといふ考えもあるようです。

蜃見世は殆ど暇であった、肉体的な仕事は殆どなかつた、病気になると医者に見せてもらえたなど、それなりに余裕があつたのではないかと言われています。

また、遊女は死ぬと寺に投げ込まれてろくに供養されなかつたといふ話も、足抜け（脱走）などの罪をした一部の遊女だけのものだけだつたと分かりました。

吉原は最新のファッショソなどを発信していました。上流階級の女性たちの中には遊女独特の言い回し、ありんす言葉を真似する人もいたそうです（ドラえもんのスネ夫ママがザマスつて言つアレです）。

調べるうちに個人的な疑問として、過酷な環境に置かれ売春を主な仕事とする遊女たちに憧れる人がいただらうかと思いました。

吉原での生活は意外にも過酷ではなかつたのでは……、「汗ばむ

「鳥籠」は大見世であるという設定を用いて、出せるだけ吉原を明るく描くことにしました。

## 第一十一話「匂を見ぬ」

「どうしたんだい、その田<sup>ひだ</sup>」  
夜見世の鐘がなる六つ時、ひばりは腫らした田を晒し、つか佐を仰いでいた。泣きすぎて疲れきった頭と喉はすっかり使い物にならず、居然とするしかない。

「つか佐姉さん、あまり怒りんで。ひばりちゃんのめりやす足袋と匂い袋、廁に落とされたんじや」

お富士が間に入り、事の説明をする。

あの後、ひばりの号泣を聞きつけてお富士が飛んできた。そして廁から部屋へと、ひばりを慰め連れ添つた。そのため、お富士は事の詳細をその場で知つたことになつていて

もし足袋と匂い袋を捨てたのがお富士だったら。考えるだけで眩暈を覚えることだが、あらゆる状況がその可能性を弾いている。笑顔で、何も知らないふりをして、朋輩を傷つけるための罵を張つているのだとしたら。狂言だったとしたら。  
これ以上のことはない。

「ひばりっ

叱責されて、お富士へと横目にしていた視線を正面に戻す。たちまち、頬をぴしゃりと叩かれた。一度で終わらず、一度、両の頬に痛みが爆ぜる。

眼前に立つは、威風にみちた姉女郎。

「よくお聞き、人から貰つたものはね、盗まれようがあなたの落ちは度だよ。恨めしくお富士を睨むんじゃない」

睨んでいないと強く否定しようとして、出来なかつた。ひばりの内に生じた疑心は、間違いなくお富士に向けられている。

「ちがう」

なんとか小さな声で呟くも、

「なにが違うんだい。あんたはね、甘いんだよ。自分の甘さを他人の恨みで誤魔化すんじゃない。頭を冷やしな！」

言い捨て、さつさと夜見世の準備を終えると、つか佐はお富士だけを連れて出ていってしまった。一人残され、ひばりは放心し、筆筒に寄りかかる。

こんな顔では夜見世になど出られない。

三面鏡でちらりと自身の顔を窺つて、残されたことの悲しみを癒してみるも、どうにも止まらない。納得がいかない。

何故、つか佐に怒られなければならないのか。甘いとは、どういうことなのか。お稽古事に精を出しているのに、これ以上なにをすればいいのか。

悔しくて、そのうえ道理も分からず、ひたすら黒い感情に心臓を潰されながら、ひばりは涙を堪えた。これ以上、泣くわけにもいかない。冷静になるのだ。考える。考えるんだ。

つか佐は、夜見世を潰したことを見めているのではなかつた。ひばりの行いを叱咤していた。

「落ち度……」

一体、どこが甘いのか。心を落ち着け、身に降りかかつたことを整理する。

もしお富士が自分を苛めているのなら、一体どうしてそんなことをしたのか。自分とお富士は、どう違う？

禿か引っ込みか。

お富士は引っ込み禿ではない。そのことで、考えうる理由。

「嫉妬……？」

信じられず、ひばりは口元を押された。

もしかしてお富士は自分に嫉妬して、あのような凶行に及んだのだろうか。

引っ込み禿は将来を約束されている。禿が全て引っ込みに上がれるということはまずない。大人たちの審美の、ほんの些細なことで弾かれてしまう狭き門だとは、知っている。

自分は一部の大人たちに応えようとするあまり、周囲がどう感じるか気にも留めていなかつたのではないか。

慢心はしていいつもりでも、他人の目は己の心まで知ることは出来ない。他人にとつて、傲慢になつていると見えたならば、それが彼らにとつてのひばりなのだ。嫉妬して、貶めたい気持ちに駆られるかもしれない。

頭を冷やしてみると、自分は確かに甘い。嫉妬をされるなど思つてもみなかつたのだから。

周囲、嫉妬……。

状況に対し静かになることで、次第に、新たな疑問が湧いてきた。引っ込み禿になつたこと以外に、お富士の自尊心を傷つけたり、迷惑をかけてしまうことはなかつただろうか。

お富士との日々を回想する。

出会いから今日までのこと。何も知らない自分に、遊郭の間取りやしきたり、里言葉を教えてくれたこと。

一緒に金平糖を食べたこと。方言を使ってからかわれたこと。

「……本当に、お富士ちゃんだらうか」

唐突に、悟る。自分が知つてゐるお富士という人間は、嫉妬したからといって廁に朋輩の物を捨てたりするだらうか。少し意地悪なところはあるけれど、そんな陰湿なことをする人間だらうか。

ひばりは思考をかちりかちりとまとめて、可能性の高いことから順序だてまとめ、更に自分の置かれている状況と、自分が他人に与えるだらう影響のことを考えた。

ひとつのことを考えるでは甘い。全体を見据えなければ、答えを決めるのではなく、あくまで見据えるのだ。

行動も言葉も煮詰めなければ失敗を引き起こす。

君が心配だ。つか佐に焦がれるばかりに、己を見失つていると、誰かの掘る穴にも気付かないよ。

ふと、八尋の言葉が頭を過ぎる。あれは、人を知ることで己を知れという意味だったのだろうか。

きっと、花魁になる。

大人たちは人や己を知ることで、未来を知ろうとしているのだろうか。

ひばりはまだ、未来のことは分からぬ。経験が浅い。無知が道理を知らせない。

だが。

おら、自分のことがちょっと分かつた気がする。

涙のせいでもまだ身体はひくついている。大切なものを失った悲しみは五臓六腑を絶えず責める。それでも、心は穏やかだ。頭は、すっかり冷えた。

「これから、どうしたらいいだろう」

自分がすべき振る舞い。最悪の事態が一度と起こらないための、布石。

いつだつたろ？ とらいちが慰めに言つてくれたことを思い出す。

苦しいことも辛いことも、賢くあれば、お前をそれほど襲わない。その術は、俺が教えてやる。

ひばりは目を伏せる。

とらいちがいたら。この状況に的確な助言をくれるだろうか。

しかし自分はとらいちの触れてはいけない部分に食つて掛かったのだ。知らなかつたとはいえ、思慮の浅い怒りにとらいちはきっと傷ついたに決まっている。

「また来ると言つたけど、とらいちはいつも来るんだろ？」

弱弱しい口ぶりで嘆息していると、後ろから物音がした。  
誰だらうとぽんやり振り向いて、度肝を抜かれる。

「呼んだか

そこには二つもの、変わらぬ仏頂面。

## 第一二三話「逆転」

「怒つてないの？」

「何のことだ」

とらいちはむつりとしたまま、視線を上にまわると、

「お前は気にするか」

ひばりは無言のまま首を振り、否定をの意をしるす。自分は気にしない。とらいちが忘れるならば。

「よろしい」

とらいちは部屋に入ると傍若無人に格子窓を引いた。窓に腰をひっかけ、ぞんざいに左足を右ひざに引っ掛ける。

「なんで見世に出でない

「なんでここにいるの」

二人は同時に口火を切った。お互い、呆気にとられる。すぐさま紛らわすように、とらいちは横を向いた。ひばりは見過『』さなかつた。その目が、ほんの僅かに細く伸びたのを。

それだけのことが、なんて嬉しい。

「三船に金を払いに来た。お前の所作が酷いというんでね」

「嘘……！」

「嘘だ」

挨拶代わりにぺろりと歎き、

「引っ込みになつたらしいな」

とらいちは視線を戻す。今度はひばりが顔を逸らす番だった。

自分を取り囲む状況は好みじゃない。報告するには、少しばかり心苦しい内容だ。

「うん。だけでものせいで、ちょっと困っていた」

「……話してみる」

ひばりは真剣にこちらと向き合いつゝ、深く呼吸をして、言葉を選び始めた。

翌朝の夜見世時。

お稽古から帰ってきたひばりは真っ直ぐ部屋に退いて、夜見世の準備を始めた。

「おかえり、ひばりちゃん」

背後からお富士に声をかけられ、正面を切つて、

「ただいま、お富士ちゃん」

ここやかに破顔すると、お富士は手をみはつた。

「ふうん、すっかり元気になつたね。お稽古は楽しかった?」

「楽しいばかりでりんせん」

いいか。まず、凛としている。そして朗らかであれ。弱みな  
ど、堂々とすれば相手の目から隠れてしまつ。

ところの口添えを反芻し、ひばりは背筋を正す。

「お富士ちゃん、夜見世に着てくるの準備しやした。七つ時だし、  
お出しあがりはどうしなんす」

「うん。これやしちゃか」

一人して、部屋を出て食事所へと足を進める。夕餉は夜見世の時間前に禿から遊女まで一緒に取る。そして、夜を過ぐのだ。

「今日は夜見世に続いて厚谷の若田那がいらっしゃる」

「つてえと、今夜は派手じや」

たわいもない話を交わしつつ廊下を渡つてこねと、まつとお富士が歩みを止めた。どうしたのと訊ねよつて、ひばりは顔を結ぶ。

ひそひそと、廊下をじやれる囁き。その中に含まれるかに、ひばりは耳をそばだてた。

「……ひばりさんは昨日泣こつたらしく」

「やまあない」

「未熟なくせに、引っ込みだと好い気になるからじや」

廊下を曲がった先にいるひばり。声色で誰のものかは判別られる。小島の禿たちだ。三人が集まり、あしきまに言つてゐる。

今は別々の遊女たちの下にいる彼らどうしてと、にわかに信じがたい思いに駆られ、一方で、納得する。

小島の振る舞いによつて、彼らは引っ込みの道から遠ざかつた。その頭でつけに、ひばりをあげつらつてこるのである。

下らない、なんて下らない。いくら陰口を呴いたとして、彼らに得はない。一時的な優越感を満たすだけで、その行為は彼らを高めはしない。引っ込みにしてはくれない。

空しくなつて、同時に、ひばりを怒りが襲う。しかしひばりはそれを耐えるべく数をかぞえた。感情を無闇に発露させるのは危険だと知つたから。

ひい、ふう、みい。そして顔を高くあげ、周囲を見渡す。障子に、庭に、池に。気持ちを落ち着かせる術はとらいちから学んでいた。

大丈夫。……そつ、ひばりが平静を取り戻すも。

「あんたたちでしょ」

唐突に飛び出した影。驚くことに、お富士であった。

彼女はさつと廊下を曲がると、庭を横切り、蜂の巣を叩いたように逃げる禿たちの前に立ちふさがった。

「ひばりちゃんの大切なもの廻に落として！ あんたたちも落っことしてやる！」

はんなりとした振る舞いが常行のお富士、その豹変にしばし啞然とし、

「おふ、お富士ちゃんつ」

ひばりも闖入する。

慌てたのは禿たちだった。

まさかの中傷的が後ろから攻めてきたのだ。彼らはひとつに寄り添うと、悲鳴をあげ、団子虫のようにその場に蹲つた。

「参ったか！ うふふふ、あんたたち三人とも、大便まみれの小便まみれよ！ わたちらの田から逃れると思うな！」

大手を広げるお富士にまみえ、ひばりは再びとらいちの言葉を聞いた。

ひばり、いいか。青天の霹靂など、ビリにもない。過去も未来も今も、全てが繋がっている。

もしかして、お富士は。

「お富士ちゃん！」

身体が弾む。ひばりはお富士へと首を左右に振った。

「堪忍です。この子らをせめんで」

「何を言つて、ひばりちゃん。懲らしめてやるの！」

「わつわは、ビリのことありやせん。へいちゃうです。未熟なんは、本当。

だから毎日、てんてこ舞い踊つてるんだじや。本当のことを話して、懲らしめるはないでしょ。

もしお富士ちゃんの気が良いのなら、ねえ……」

自分には味方がいる。その喜びが、出来ぬかもしれないと迷つていた最後の助言の扉を開く。

出る釘は打たれる。だがな、出すぎた杭はなかなか打たれん。いいか、全てのことを考えるんだ。大きくあるんだ。

ひばりは怯える禿たちに近づくと、膝を折つて、立ち上がるようにつながした。大切な術を忘れずに。

笑え。

許し、受け入れる。爛漫に微笑む。  
それが術、身を守る賢しも。

朗々と許して回れ。それが“あしらい”だ。

## 第一二三話「逆転」（後書き）

いつも作品を読んで下さりありがとうございます。

春エロス2008企画では投票や一言感想を下さる方までいらっしゃり、とても励みになっております。心からの感謝を。

一言感想については企画サイト管理人様に確認をとりまして、毎日返信をとاردえています。

次の更新についてですが、少々のミスを発見致しまして、次話は来週とおせち頂きます。「了承下さいませ」。

それでは、失礼します。よろしければまた、次話にて……。

## 第一十四話「このわらな仲直つ」

薄明かりの中で布団を引き終わって、ひばりは格子窓に手をかけた。

客は殆どいなくなり、遊女たちも僅かな睡眠を楽しむ時。吉原はひつそりと静まり返つておあり、夜警を勤める鉄棒引きの鉄輪の音だけ、じゅらじゅらと辻から響いてくる。

「ひばりちゃん」

お富士は行灯の傍であぶらを拭いていた。

「油、さす？」

「うん。もうわたりは寝るよ」

「じゃあ、ええね」

油皿に蓋をして火を消すと、お富士は布団の中に身体を滑り込ませた。

ひばりも格子窓をしっかりと閉じると、横に揃えた布団へと横たわる。

暗がりに皿が慣れて、少しづつ闇が輪郭を持つ。部屋の隙間から漏れる外の光が帯を作り、その中に埃が泳ぐ。光の帯はお富士の背中に接して、柔らかな影を作っていた。

「お富士ちゃん」

「ん？」

「夕餉の」と

すみつとお富士の身体が寝返りをうつて、面する。

「お富士ちゃん、もしかしてずっと」

「分かったの」

お富士が照れくさそうに手を出す。

「ひばりちゃんは心配せたくなかったんだけどな。知らぬが仏と言つてしまつ」

「こつから、どうして？」

「廻間と、おーんなじ」

細い腕を宙に突き出して、お富士は両の手の五指を広げた。それが光の帯を弄んで、爪が鏡のように輝く。

「少し前からかな、ひばりちゃんの悪口を言つている禿がいて、気になつて。ひばりちゃんの大変なものがなくなつた日、わっち、筆箋を整理していたから……」

「先に気付いて、探してくれていたの？」

「ぐりと首肯する様を見て、やはり、とひばりは思つた。お富士はけして自分を貶めようと画策などしていない。むしろ知らずに、守りつと/orしていたのだ。

「探して、知られる前に元に戻さうと思つて」

しかし、それは叶わなかつた。何故なら廻の底に落ちていたから。

「お富士ちゃん」

「なあに」

「謝らなければならぬことがある」

お富士は分かつてゐるのだから、光に翳していた手を布団の中に

引っ込めて、布団の中から布団の中へ、ひばりの手に触れてきた。ひばりはそれに応え、指を絡ませる。

「わっち、お富士ちゃんのこと、疑っていた。お富士ちゃんがやつたんじやないかって……」めんなさい

「そつかあ」

少しば勘付いてはいただらう。それでも、寂しそうにお富士は眉を下げる。

考え込むように一度だけ目を伏せて……、ぱっと開く。いつもどおり、ちょっとした悪童の表情。

「じゃ、仕返しをして」

「えつ」

「大丈夫、ちょっとだけ。ね？」

朋輩に疑われるることは悲しい。お富士の気持ちに納まりがつくのならと、ひばりは緊張する気持ちを抑え、相づちした。

「田を喰つて」

何をするつもりだらう。でこを弾くのだらうか。

お富士の手に頬を包まれる。ぎゅっと顔に力を入れる。その瞬間は、そつとやつてきた。

唇に何かが押し付けられ、その意外な柔らかさに身体が弛緩する。田を僅かに開くと、お富士の顔が密着していた。

口付け、だ。

頭がすっかり混乱しきってしまった、再び目を閉じる。身体をぐるぐると、惑いが駆け巡る。

お富士は軽い口付けから、更に舌でひばりの強張る唇をなぞり、割つて入り込む。

角度を変えて、ゆっくりと深くひばりはお富士が入り込んでくるのを感じた。自分でもそれほど舐めない部分を、お富士の舌の先端が刺激して、くすぐったい。

思わず舌を引っ込みで、逃さぬよつこと絡められる。追いつめられ、翻弄される。

次第に、えも言われぬ心地よい熱が自分の中を弄つていいくのを、ひばりは感じた。

胸元、脇の下、太腿の太腿の間、足の裏側。身体の内側を火が炙つていく。

身体がおかしい。

ひばりが今までにない感覚に全身を縮めたとき、お富士の口付けが終わつた。舌が離れ、唇が離れ、冷たい外気に晒される。

「お富士ちゃん……なんでえ？」

あまりのことに涙目、耳まで真つ赤にするひばりに、お富士は悪戯をやり終えた悪童そのものの笑みを返す。

「ふふっ、ひばりちゃんの初めて、頂いてしまつた。で、ひんなんかより、参つたでしょ？」

「お富士ちゃんのこちわる……」

してやつたりとこつた表情のまま舌を出しつゝ、お富士はぴょんと背中を見せる。

ひばりは呟めしわのあまつ、お富士をぱりぱり呶こた。

「お富士ちやん、いぢわる。こわいわるこわいわる」

「あー、もつ、はこはこ」

ぱつと布団を蹴り上げて、お富士は再び直ると、ひばりの布団に侵入し、そのままひばりの顔を自分の胸に押し付けた。

「よしよし、お姉ちやんが悪かった」

「もつともじいへ」

年齢など殆ど違わないのに、すっかり子ども扱いされて、ひばりはうな垂れた。こんな風に子鬼の角が生えたお富士には、敵わない。

「ねえ、ひばりちやん」

お富士の唇が頭の天辺に触れる。

「もし何か困つたことがあつたら、わつちに言ひて。わつちは、ひばりちやんの味方なんだから。ええ？」

少しばかり膨らんだお富士の胸に顔を沈めたまま、ひばりは仰ぐ。

「うん」

「わつちだけでないよ。

仁平、つか佐姉さん、三船おかあさん、あつとひばりちやんが困つたとき、手助けしてくれる。

勿論、ちやんと自分で解決することも、大事だ」

お富士の優しい慰めに、ひばりは嬉しかと同時に不安を覚えた。

自分のよひな田舎者にやられでする道理などない。

そればかりか、ひばりの考えがあたつていぬなうば、お富士は自分を良くは思つていないはず。

「どうして。どうして、そこまでしてくれるの。わっちが憎くない？  
その……、お富士ひちゃんより先に引っ込みになってしまつて」

直接的すぎる質問であつたが、聞かねばならぬと思つた。自然と、眉が曇る。

しかしお富士は、

「ひばりちゃんが、好きだからよ」

傷ついた様子ひとつなく、ひばりの眉根に指を置いた。

「引っ込みつてのは、十三かそこいらになるもんじや。わっちは、この冬が明けてから」

「そうなの。どうしてわっちが先に引っ込みになつたんだつ」「そりやあ、吉原の生まれじやあないからよ。そういう子は、早いほうがええの。安心した？」

なるほど。自分の勘違いだつたのだ。変わりゆく環境に順応す  
ぎて、物事の全てに盲目していたのだろうか。なんにせよ、疑問が  
解れて、ひばりは深く安堵する。

お富士は穏やかに身体の力を抜くひばりに、続けた。

「でもね。もしわっちが引っ込みになれなくても、ひばりちゃんに  
いぢまるなんかしないよ」「え？」

「引っ込みでないことがわっちの仕事なりば、それを受け入れる。遊女か芸舞妓か女中か検討もつかんけど、『下へられたことを顶くすだけのこと。

それがわっちの生き方なの。『うじて大好きなひばりちゃんを恨むことができるところの」

深く、たおやかな厚志。お富士がそんなにも清く潔く物事を考えていたことに、ひばりは言葉を失つた。

感銘がひばりの頬を、田頭を熱くさせる。

「ひばりちゃん。いつまでもわっちが、朋輩じゅや  
言じ切る、お富士。ひばりは涙を堪えて、  
「……うん」  
はつあつと答えた。

「じゃあ、おやすみしようか  
「うん、おやすみなさい……」  
お富士の肩を軽く掴んで、胸から距離をとる。  
自身の布団を正すお富士。ひばりはその様子を見やつて、  
「寒いから、お布団にしちゃでいい?」  
ぱつんと呟いた。

姉のように優しくされて、少し甘えたい心が生まれてしまつたらしい。幼稚な媚態に、呆れたよひにお富士は息をつくと、

「仕方ないなあ」

今度は悪童とこりより、本当の姉のよひに田て歯をいじりはじめて、ひばりの布団へと潜り込んだ。

## 第一十四話「こなわるな仲直り」（後書き）

作品を手にとったいただき有難いります。失礼ながら、オマケではなく今回はメッセの返信とさせていただきます。

四月五日にメッセを下さったYodafonの方へ  
メッセ有難うございます。サブアドの調子が悪くてどうしても返信出来ませんでした、すみません！  
でも、メッセいたただしたことが嬉しくて嬉しくて何度も拝読しました。お言葉励みに無理をせず、完結まで頑張りますね！

以上でお返事とさせて下さい。読んでいただけたと良いですが…  
…。

こんな長い話に付き合つて下さるだけでもとても有難いのに、メッセ、評価、企画サイトへの投票、一言感想を下さり、本当に嬉しく感じています。

実をいつと、自分は人に楽しんでもらうために話作りを始めました。小学生のときに学級新聞や友達に見せるべく四コマ漫画を描いたのがキッカケだと思っています。

自分のためだけに書くのは昔から苦手です。だからメッセなどで励ましを頂くと、そのまま活力となります。よし頑張るぞって思います。

企画を最後までやり遂げるという気持ちだけでは、もしかしたら作品にここまで真剣になれたろうかと思います。励ましのひとつひとつが小説の一文一文になっているのでは、と。  
感謝しても感謝したりない思いです。

恩返しは巧く出来ませんが、小説を少しでも楽しんでいただける  
よつ頑張りたいと思います。

ありがとうございます。

頑張ります！

第一十五話「ふたつの“とら”」…1861年春

ああ、もう日が落ちてしまった。

お稽古の帰り道。ひばりは待合の辻から、どつぶりと夜に浸かつてしまつた吉原を眺めながら、下駄で闊歩していた。

地面は昨日降つた雨のせいであかるんぢる。

年が明けて一月、二月。もう皆蟄だといふのに、名残惜しんだのか牡丹雪が舞つた。

しかしそれはもう、最後の雪だらう。春分が来て、昼間だつて長くなる。こうして暗い岐路につくのも後どれほどか。

もう少しで夜見世が始まるとあつて、見世先にある部屋、格子で囲まれたその座敷に、遊女たちが座つていた。

吉原中央の辻、見世の入り口には惣籬そうまがきが並ぶ。これは非常に細かい格子で、籬が細かいほど、見世としての質が高いことを差しているが、惣籬は最上級を現している。

辻から見れば、まるで女の檻。見物人たちはこうして女たちを選別してゆくのだ。

遊女たちはまったくといってよいほど、動かない。

たまに冷やかす客がきて、いくつか戯言を交わすが、それ以外は正座して、ずっと辻を行く人々を見据えている。

吉原の女は、美女中の美女。目の肥えた女衒たちが選んできた綺

麗どころである。それ故にどこか人間臭さが抜けっていて、どこぞの名匠が手かけた人形のようでもある。

凝視していると魂が抜かれそうだ。そのためだらうか、見物人はいくらか遠巻きだ。

少しばかり足をとめて辺の様子を眺めていると、後ろに気配を感じた。ゆっくりと振り返ると、馴染みの人物がひばりに近寄つてくるところだった。

木下八尋。大棚、両替屋の若旦那だ。

「どうしゃした、こんなとこりで。見世はあちらでござんす」

「いや、君を見つけたから」

駆け足で来たのか、白い息を荒く吐き出しながら八尋は告げた。この男は、妙にひばりを気に入っているらしく、こつしてよく声をかけてくる。嬉しいが、変人だとひばりは思つ。

自分はただの引っ越し元だ。格子の中で佇む女たちとは格が下がる。この男はもしかしたら、童子に対する“け”があるのかもしれない。

じいと訝しげな瞳を投げやつていると、八尋は照れくさそうに頭を搔いた。

「今日はちゃんと錢を落としていくよ」

ひばりは心臓に寂しい針がちくんと刺すのを感じて、踵を返す。  
「錢を落としてほしくて見たんじゃありんせん。ただ、その、まだ

……」

いつだつたか、八尋が秋空の下で語ったことが脳裡に浮かんだ。自分を知らないのかといふ言葉。あの「」ことで、自分の立ち位置を考える術を学ぶことが出来た。

しかし、

「わっちは、自分の価値を知りんせん。だから、若旦那がわっちに声をかけるのが、分からんのじや」

「変に思つかい」

訊ねられ、肩越しに視線をやる。

「若旦那は、子どもが好き?」

「え」

八尋は狐に抓まれたような顔で一寸かたまると、

「それは、……参つたなあ」

狼狽しきつたのか、今度は胸を搔いた。

「私は、ただその……、君と話していると面白いんだ。子どもがとか、誰がといふもんじやないんだよ」

何度か筆つて、胸元が少し赤くなる。だいぶ困らせてしまつたらしい。

根はさつぱりとした、素直な人だとはなんとなく分かつてゐる。こういつた切り替えしをすればどう反応するかも、分かつていた。

わっちは、少しお富士ちゃんに似てきたかも。

自分の行いに少々照れて、ひばりはぐるんと向き直つた。

「お話をじりしんす」

「お話？」

「や、お話。良いお話を持つてへると、ゆうたでしょ?」

八尋の表情が瞬く間に明るくなる。

素直といふか、単純といふか。ひばりはその少年のような心に、瑞々しい喜びを感じた。嫌いというわけでは、けしてないのだ。

「やうだなあ、あ、八百善にある田川屋の膳が皿いんだ。あれはねえ、江戸の台屋では一、一を争ひだらう。こつか君と食べたい」

「何をお言になんす。田川屋のお膳は一緒に口上がつたでしきう」。お座敷に出てへるお料理はたまご、田川屋よ、

「わ~……」

ふいに、八尋を可愛いと思つ。

ひばりに指摘されて残念そうに眉を下げる彼は、とても真摯だ。こんな田舎生まれの引っ込み禿のために、氣を使つて話題を探す。なんだか嬉しくて、可笑しくて、ひばりは口元を押された。

すると八尋は、欠伸でもされてこると勘違いをしたのか、うふと短く唸ると、

「いやね、本当の良い話はまだ調べてへる途中なんだ……、その、河童について調べてへる」

意外な話を切り出した。

「河童?」

「そや。君の里の河童は、赤いらしい。何故だかはまだ分からぬのだけど」

ハ尋が良い話といつていたのは、じつやら河童のことらしい。河童について調べて、里の話題で盛り上がりひとついう魂胆だったのだろつ。

ひばりを思つた上での優しさだ、しかし。

河童の意味を知るものにとつて、それは残酷な話題だつた。ひばりの心臓は雪崩れこんだ冷たさに覆われ、顔は悲壮の色に染まつた。

「じつしたの？」

瞬く間に意氣消沈してしまつたひばりに、ハ尋が問いかける。

「河童は」

仮面の口ぶりで、

「河童は、水子のことでありんす。子どもを殺して、川に捨てる」と

ひばりは続ける。

「ハ尋さん、もつ調べねえで。わつちの故郷が、嫌いになつてしまふ」

どこまでも残酷な冬、恵みのない土地、短すぎる夏。過酷な環境が是とする大人たちの行為。流れていつてしまつた同胞たち。流されてしまった自分。

その全てが河童だ。赤いのは燃えるような血、生きている証。故郷では許されない色。

故郷を恨んではいない、けして。仕方のなかつたこと。

そればかりか、あの厳しい場所で、家族や村人たちが健康であるだろうかと思つ。

離れてしまつた今、冷酷なのに美しく、とても懐かしく、胸を搖わふる場所。

夢想し、いつの間にかひばりの表情は強張つた。驚いたのはハ尋である。

「じめんー。」

ひばりの眼前で手を合わして、ハ尋は頭を下げた。

「ちやんと調べるべきだつた」

慚悔するハ尋にひばりは首を左右に振る。

「そんな。わつちがあのとき、河童なんて言つから。若旦那、顔をあげてくんせい」

ひばりはかじかむ手を擦り合わせてからハ尋の手首をとつて、さつと開くと、その間から顔を覗かせた。

「ね、見世にいきやしじう。歌留多でもなんでも、お相手しんす」

手格子の中で、ひばりは微笑む。

寒さに震えながらも血色の良い、秀麗な童顔。長い睫毛のその下に、瑠璃と黒曜石の瞳。

行灯の光が彼女を照らし、髪が薄茶色に染まり、蟲惑的に輝く。

吉原にも稀の、傾城の影を持つ生粋の笑み。人の心に吸い付く、哀婉がそこにはあった。

あしらい 、ひばりが教わった、生きる術。

八尋はひばりのたつたひとつ動作に、硬直した。ひばりのあしらいはそれほどまでに神がかっていた。

はたからは、密と禿の愛くるしいじやれあい。そこに一種の静かな制圧があることに気付く者はいない。  
いや、一人だけ。

少しばかり離れたところで、一人の男が二人を啞然と見詰めていた。

歳は五十を過ぎか。小脇に丁稚を数人置いて、男は小走りに一人へと歩み寄る。

ひばりと八尋が同時に、男の気配を察して頭をもたげた。

間髪いれず、男は叫ぶ。

懸命に足を震わせて。ひばりの心を奪い去るあの名前を。

「みどり……！」

立派な身なりをした男がそう叫んだとき、ひばりの身体を激しい熱が貫いた。

み“どり”。

見知らぬ男が愕然とした様子でどちらの名を叫んで立ち去っていく

る。その意図することが見当つかず、ひばりは反射的に周囲を見渡した。しかしそこには“とら”いちの姿はない。

「……西村屋の大旦那。西村屋の大旦那ですか」  
八尋が呆けた声を出した。知り合いだつたらしい。

男は八尋とひばりを交互に見やつてから、  
「ああ、木下のところの」

力をふいに抜いて、でこを擦つた。

「すまん、人違ひをした。その禿は？」  
「ひばりといいます。大海屋の引っ込みですよ。はて、人違ひですか。みとらという禿をお探しで？」

「いいや、禿ではないんだ。そつだな、こんなに小さいわけがないんだ」

八尋の問いかけに男は口を閉ざし、視線を地面へと逸らす。

「大海屋か。わしの馴染みは菊乃屋でね。いや、ご迷惑をおかけした」

愛想よく軽い会釈をすると、男はさつと引き返し、丁稚のもとへと戻つていく。

その背を見送りながら、ひばりはびくりびくりと跳ねる心臓に手を置いていた。心音は激しく、耳の裏まで震わす。

あの男は何者なのか。

自分を見て、とらの名を言つた。もしかして、とらいちのことを見ついているんだろうか。

自分が知ることの出来ない、とらいちの本当を。

「旦那様！」

高鳴る思ひに悶着しきつて、ひばりは呼びかけた。男が勢によく振り返る。

「みどらを知つてゐるのかね」

その眼光は粘つこく、恐ろしげであった。まるで食えた獣のようである。或いは、食物を前にした男餓鬼のようである。

ひばりは唾液を飲み込んで、

「いいえ、……よろしければ吉原の者にお尋ねしんす」

一步引いた。

その判断は正しかつたか、否か。男は放心したように視線を泳がせてから、ひばりに向き直り、口を開いた。

「みどらは、男児でな、今ならば一十半ば……、わしの那智なちだ」

瞠若する。

頭の先からつま先まで、男の発言を疑つた。

血の気が引いていつて、氷のように冷たくなる。

那智とは竜陽君。竜陽君とは、つまり。

「大旦那は男色を嗜んだことがおりでしたか」

「もう十年も前の話だよ。湯島にある茶屋からあげたんだがな、どこかへ行つてしまつて」

男は遠く田をやつてから、またかむと、

「ひばりとやら、気にしないでくれ。木下の若旦那も。下うぬ未練だ。では、失礼するよ」

再び会釈して、大門の奥へと去つていった。

## 第一一十五話「ふたつの“とら”」…1861年春（後書き）

### 【吉原は観光地？】

ただ通り過ぎる人が千、お客様になる人が百、愛人が十、本当に愛してしまった人が一。吉原にはそんな言葉が残されていると物語でも語りましたが、吉原へ見物に来たり冷やかしに来たりする人は少なくありませんでした。

遊郭の入り口では、吉原遊女たちを格子の外から窺うことが出来て、冷やかして歩く男たちを地回りといつていきました。

### 【遊郭以外の見世】

吉原は遊郭だけではなく、仕出し屋さんもあったそうです。  
饅で有名な江戸川屋、しらたま餅で有名な兵庫屋、「うどんと豆腐  
や山や……といった風に。

遊郭では下女が主な配膳を担当していましたが、仕出し屋さんに小料理を頼むこともあつたようです。

### 【定年】

遊女たちの定年はだいたい一十七歳でした。もちろん例外もあつたと思いますが、二十七歳を越える遊女はなかなかお客様がつかなかつたようです。

定年した遊女たちは、身請けといって誰かに買われたり、年季を終えて吉原の外にでたり、下女として吉原に残つたりしました。年季は人買いに買われた場合、約十年でした。数えで十七に遊女として売りに出されますから、平均的に十七から一十七まで客をとつたのかなと思います。

## 第一一十六話「ソルジャーの心」

那智、竜陽君。

転じて陰間とは、春を號べ男兒のこと。それへらこはひばりも知つていた。

みどらがとらこひなば、とらこちはあの田那に飼われていたのだろうか。

今まで抱いていたとらこちといふものから、あまりにも乖離しているように思えて、俄かに信じがたい。飄々として、野良のようなとらこちしか知らないのだから。

そもそも、全く証拠のようなものはない。ただの勘である。

しかしながらそれは、確信のよつた予感を持つていて、過重なまでにひばりを責める。

喉の奥でこぶこぶと、泣いてやまない。

「どうしたんだ、早く弾け」

琴を聞こ、ひばりはとらこちと面していった。今日は琴がどれだけ弾けるようになったか、按配をみるとこの通りにしてくる。

とらこちほりの仮頂面だ。動搖しているのせ、ひばりだけ。

ひばりはたゞたゞしい手つきで、ちゃんと琴線を弾きながら、想像する。もし今、みどらについて訊ねたらどうなるのだろうと。

ところががないのならば、それがなんだと、無愛想に言つ

放つて終わりだらう。しかし、ひばりの直感が正しければ。

あの日那からとらこちは逃げた、吉原ならば足抜けのよつなものだ。だとしたら、とらこちにとつての飼い主は、とらこちにとっての鳥籠は。

居心地が悪い。全身が妙にざわめき、うなじが逆立つよつた感覚がある。

それは当然のことながら、指にも及ぼした。弾く手が乱れて、調子はずれな音が響く。

「駄目だ」

とらこちの叱咤。

「どうした、前よりおかしこぞ」

やう言つて、立ち上がる。ひばりはとらこちの動作に萎縮する。

「いいか、腕の動きをまず教えてやる」

察して、ひばりは強烈に逃れたい感情に襲われた。そんなことをされたら、身体の中にある騒がしいものが皮膚から皮膚へ、とらこちへと伝わってしまうような気がして。

しかし逃れられるわけもなく、ひばりは琴に視線を落としながら、とらこちの気配が後ろへと回るのを認めた。

とらこちはひばりの真後ろに座ると、ぴったりとひばりの身体を包んだ。

「身体で覚えるんだ」

とらいちの重く、穏やかな声が鼓膜を微動させる。吐息が耳たぶを掠めていく。

弾力のある逞しい熱が、ひばりの背中に触れる。冷たい、大らかな手がひばりの手に重ねられる。

その感触に、ひばりは痺れ、汗ばんだ。自分の戸惑いが届かないめりと緊張し、あまりに心臓が高鳴つて、火傷してしまいそうだ。とらいちの指が、優しく琴へと落ち、小さな音を紡ぐ。なんと玲瓏な音だ。琴が嬉々としている。もつと触れてほしいと、鳴くようである。

ひばりは触れられたら、耐えられないのに。

「具合が悪そうだな」

いつの間にか、身震いしていた。意識が朦朧としていた。薄く汗を浮かべ、頬を紅潮させていた。

「今日はこれくらいにしよう。夜見世まで眠つていた方が良い」

とらいちがわひと離れる。途端に身体が冷えて、まるで本当に体調を崩したよ。骨まで冷える。

身体をかき抱くと、とらいちの匂いがした。胸の底まで簡単に染み込む、不思議な匂い。

「風邪か？ 軽く脱いで、横になれ」

押入れを開けて、とらichisは布団を持ち出し、敷いた。

「どうした、早く脱げ」

「うん……」

ひばりはよたよたと腰をあげると、筆筒から襷巻きを取り出した。

一寸、留まる。

「屏風がないから、一寸、じや着替えられ……」

とらいちは何気ない風に顎をしゃぐると、

「丁度良い。服の脱ぎ方を見る。身体も見せろ。歪んでいないか調查するべ

平然と云つて放つとらいちは、ひばりは再び身体が熱を持つのを感じた。

熱い奔流が腹から心臓から湧き出て、俄かに汗が出る。

反抗する気などない。しかし胸が千切れてしまいそうなくらい張り詰めている。

「分かった……」

ひばりは帯に手をかけて、慣れた手つきで衣服をはいだ。衣桁の傍へ行って、皺が出来ないように丁寧にかける。

「素早いのは良いが、舞と同じ動きを意識しろ。指先を見やつて、滑らすように脱げ。……そうだ」

とらいちの真剣な眼光がひばりを刺す。

細かい動作でさえ、とらいちの前では稽古になる。女になるための術に。女の素が花開くための儀式に。

蹴出し腰巻をすつと外して、ひばりはとらいちの前へ一步でた。

右腕で胸を、左腕で腹から股を隠す。

それで納得するとらいちではないことは、百も承知だ。ひばりは

ゆつくりと、腕を外へとずらしていく。

やがて、ひばりの裸体がとらいたに晒された。

今年よつやく、十一になつた。不順ながら月厄もくるよつになつた身体は、少しづつ女の形へと近づいている。来た頃より、頭ひとつ大きくなつた。

肌は浮き立つように白い。平坦だつた胸は掴めるほどではないが、ふつくらと育ち始めている。揉むことはまだ出来ない。脂肪がつく過程のためか、触れるだけで痛いのだ。

ぱつこつと出でていた腹は少しへこんで、肋骨が薄く浮き、くびれを描いている。女らしい湾曲は形の良い小さな尻へと続く。小さな臍のたもと、下腹部。股の間には焦げ茶色の毛が揃い始めていた。同年代の娘たちと比べると薄く、割れ目を隠しきれていなさい。

「とらこち

視線を逸らしながら、か細い声を繋ぐ。

「こつものよつこ、たゞなくて良いの」

「具合が悪そだからな。もう、服を着て寝ろ。身体が冷える」

首肯し、ひばりは言われたとおり寝間着に袖を通すと、布団にもぐりこんだ。

「つか佐と三船に言つておく。辛そだつたら、ちゃんと休むんだ」とらいちは裸に手をかけると、そのまま静かに廊下へと出でてしまった。一人ひばりは残されて、ほうと溜息をつく。

病気ではない。ただ、とらいちの昔が気になつて仕方ないだけだ

ところのこ、この有様はなんだろ？。

みるみるうちに愁嘆が全身の熱を静めていく。とらいちが去ると、少しばかり気持ちは軽くなる。それでもさすきと針が刺すように傷むことには変わりないので。

とらいちはみどりなのだろうか。だとしたら、納得がいくのだ。高級陰間は芸事に達者だとう。そして無論のこと、男を落とす術だつて心得ている。とらいちという人間のことに命脉がいく。

だとしたら。

かつて、彼もひばりのように身体を誰かに晒したことがあるのだろうか。

つか佐のよう、誰かに抱かれたことがあるのだろうか。

鳥籠に入つて、折檻を受けたり、嫉みに泣いたり、恋をしたことがあるのでだろうか。

どうして逃げてしまつたんだろうか。

とらいちのことが知りたい。

燃えるような欲求は炎のようで、このままでは焼けつくされてしまう。だけど知るのは、恐ろしい。

ひばりは震えながら、『せゅうつと』を抱き締めた。

## 第一十六話「イジヤマの世界」（後書き）

### 【企画についての「」案内】

「」の作品は春Hロス2008企画に参加していますが、企画ではただいま40作品、完結済みでは20作品が出揃っています。

様々な世界観、エンターテイメント、面白さ、そしてHロス……、たくさんの作者さんが秀作を執筆しています。もしよろしければ、そちらも「」覧下してませ。

投票や一言感想などもお気軽にどうぞ。特に投票は「良」「悪」ということが基準だそうです。何作でも一票を投じることができますので、気に入った作品がありましたら応援にポチッとお願いします。

各賞投票では、背徳賞や耽美賞、Hロトロ賞などモア溢れる賞があります。これにほれだ、と思いましたら各賞につき二作品をあげられるので、そちらも楽しんでみて下さいね。

どの作品を読めばよいか分からぬ場合は、レビューをご参考ください。

レビューも誰でも書けますので、おすすめの春Hロス参加作品に出会えたら、書き込みもどうぞ。

四月は桜もよいですが、春Hロス2008鑑賞も是非お楽しみ下さるこませ。

## 第一一十七話「散歩がてらの人質」

「いらっしゃは来ないと訊いた日に、ひばりは少し動く」とした。時が経つほどに好奇心が膨らんで、すっかり芸事に身が入らず、上の空になってしまった。このままでは吉原には居られないだらう。些細なことで良い。自分の主の秘密に接することが出来れば、痛みを伴うこの貪欲な気持ちは治まるはずだ。

ひばりはまず、つか佐に話題を振ることにした。  
四つ時、風呂から上がって髪結いまでの気の抜けた時間に、そつと挟む。

「つか佐姉さん」

「後でな」

つか佐は、ぶつきら棒に呟いた。

意外にも読書家の彼女は、南總里見ハ犬伝というやたら量の多い史伝物の三十巻ほどを枕に、二十巻ほどを膝にばら撒きながら、土蜘蛛作妖怪図という、まったく別の作家の本を啄んでいる。

だらしない姿であるはずなのに、美貌がそれを芸術たらしめてしまうのだから実に珍妙だ。

あしらわれて渋々、ひばりは他に知つていそうな人物を探して彷徨うことにした。うるうるしてみるもの、見世でいらっしゃを知つていそうな人物は皆、急がしそうである。

三船に暇があれば良いのにと、ひばりは遠巻きに三船の部屋を覗

いた。残念ながら二船は、下女たちと話をしていて、捕まつそつた。  
ない。

こんな時に限つて、いつも工作ばかりで暇そつた「平もい」ない。

溜息混じりに、ひばりは見世の外へ出た。散歩でもすれば、少しは気が紛れるかもしない。

弥生の吉原は、空が震んでいる。水氣をよく含んだ雲は躍たゞで、のろりのろりと風に押されている。

どじかで鶯が春の歌を詠んでいる。清い囀りは澄んでいて、仄かに暗い真昼にもよく響く。

仲の町から京町の一丁目の入り口まで小走りでいくと、だいぶ気持ちが晴ってきた。

だが立ち止まれば、雪のようにまた積もつていく。ひばりは振り払うよしに、再び大地を蹴つた。

と、そのとき。

出会い頭に何者かどぶつかつて、ひばりは尻餅をついた。  
何事かと目を瞬くと、途端に視界がぐんと持ち上がり、耳元で弾けるは、どすのきいた怒声。

「近づくところの餓鬼ぶつ殺すぞ！」

唾が頬をかすめて飛んでいき、ひばりは吃驚して身を竦めた。

喉下には冷たい感触。小刀だ。

どうやら自分は、男に人質として羽交い絞めにされ、宙ぶらりんになつてこるらしい。

対峙するは腰巻に羽織と、簡素な格好をした歳若い三枚目。

「往生際が悪いぞ、てめえ！」

「つるせえ！ 羅生門河岸の女に払う錢なんざあるか。こいつは鳥屋についぢまつたんだぞ！」

「粹だなんだと抱いたのはそつちだろが！ 抜いた分は返してもらつぜ、ござあ！」

背筋の凍る斜眼で、男は小刀を懐から取り出した。魚の腹のよくな鈍い光。

ぐつと腰を落として、男は刃を向ける。何度か人を刺したことがあるのか、その動作は流れようで、無駄がない。

それでも、人質をとった人間に敵うのだろうか。

泡を食いながら、ひばりは頭を回転させた。どうにか方法はないものか。考えに考えて、決めた。賭けに出よう。

「わっちなら、払えるかもしらん。おいくらなの」  
小娘の戯言に、背後の男が失笑する。

「お嬢、あんたにやあ払えんよ。こちどり一両もツケてるんでえ」

「なあに、お兄さん。たつたの一両でいいの？」

その返答に、背後の男は嘲りを止め、食いついた。

「本當か？」

「ええ。わっちの着物、見事でござんじょ。天下の吉原、大海屋の引っ込みよ」

その答えに狼狽し、拘束が緩む。ひばりの首に当たられていた小刀がふいに離れた。

それを対面する男は見逃さなかつた。

男の素早い突きがぐさりと、悪人の腕に刺さる。

悲鳴があがり、小刀がこぼれた。ひばりは地面に落とされる。

いつの間にやら、周囲には人垣が出来ていた。人質が解放されたとなつて、血氣盛んな野次馬が次々と悪人に覆いかぶさつてゆく。命からがら野次馬の間を縫つて出て、ひばりは漸く胸を撫で下ろした。

「おう、大丈夫か」

見上げると、悪人を刺した男だつた。

「えらい目に会わせたな。すまん」

「お兄さんはどなた?」

「羅生門河岸の始末屋よ」

始末屋。ひばりの記憶が確かならば、無銭遊興や勘定不足の客から金をふんだくる岡つ引きの手先である。

大見世では考えられないことであるが、小見世となると出し渋る客がいて、そういう客に対応する始末屋や付け馬屋を、小見世は雇うのだといふ。

「もしかして、さつきのはお客さん?」

「お客? ただの盗人よ。だからああして、天誅よ」

肩越しに後ろを見やると、さきほどの男は野次馬たちに滅茶苦茶

に殴られていた。一致団結した私刑である。

「それくらこにしといてくれよ、死なれちや 錢もとれん」

始末屋は二タニタと片頬を歪めながら一声投げると、その場にしゃがみこんだ。ひばりの着衣についた砂を払つ。

「いけねえ、ちょっと切つちまつたな」

言われてみると、小指から血が滴つていた。どうやら囚われていた拍子に切られていたらしい。

着物が汚れないようにと、急いでひばりは指で押さえ込んだ。しかし小さいながら深く切られているらしく、血は滲み続ける。

「おし、お嬢。見世に來い。薬を塗つてもうおひ

「え……つ、あのつ」

「なーに、遠慮するなつてー」

始末屋に引つ張られて、ひばりはあらわに辱められた。何処へと向けられた足の先は東。

吉原は、羅生門河岸。

## 第一一十八話「羅生門河岸」

京町二丁目を通り過ぎる。ここから先、ひばりは足を踏み入れたことがない。ならず者が多いから立ち入るなど強く留つているのだ。

羅生門河岸。吉原では最下級の見世や個人経営の局が軒を連ねていふ。

栄耀栄華な中央辻とはがらりと変わり、まるで貧乏長屋のよくな佇まい。酷く陋巷くわいじょうとしていて、端から突けばバタバタと倒れてしまいそうだ。

ここは本当に雅溢れる花街柳巷であるつか。

「お兄さん、わっち大丈夫！」  
「いいから、いいから。遠慮するなって」

するすると引きずられるままに、ひばりは見世のひとつに入った。華やかな匂いがなく、すえている。光がはいつているといふにどこか陰湿で、心を不安にさせる。

故郷にあつた鳥小屋を髪髪とさせる。失礼だと思いつつ、鳥屋に入るのは見世に入るといふ意味だろうかと考える。

本当にここは吉原だらうか。

「あれあれあれ！　ずいぶんと可愛いお嬢さんだこと  
始末屋が来たことに気付いて、奥から小袖の女が身を乗り出した。  
皺の深い、しかし声に高い張りのある女だ。

「どうしたの」

「いやよ、やつきの男がこのお嬢を盾にしやがって。捕まえたんだけどよ、お嬢が怪我しちまつたんだよ」

「あれあれあれ、大変だこと。お嬢ちゃん、じつあおいで」玄関のすぐ脇にある狭い座敷に女は引つ込むと、ひばりに手をこまねいた。

座敷の畳さえも薄汚れ、たわんでいる。なんだか本当に、田舎のようだ。おぼろげな懐古が胸を暖めた。

ひばりは頷くと、玄関口に腰を下ろした。袖からめりやす足袋を取り出して、素早く穿き、「お邪魔しんす」と座敷にあがる。

「ええと、切られたのかい？」

傷口を見せるど、女は目を丸くして、

「あれあれ、大変だ」

右往左往して、水を汲んだ桶を持つてきた。

水で傷口を洗い清める。

切られたところはよつやく血が固まっていた。

「薬、塗りやしょう」

今度は箆笥の上から薬箱を下ろした。薬箱にはぎっしりと薬やら草やらが詰まっている。大海屋でもまみえたことのない量だ。

「それにしても、あんた本当に、めんこいね」  
女の言葉に田を瞬ぐ。

「お姉さん、奥州の生まれですかい」

「あら、めんこいつて分かるの。友達に奥州の子がいるのよ

「わっち、奥州の生まれなんだ」

「あらあら、随分と遠くに来ちまつたなー！」

顔を合わせ、相好を崩す。先ほゞまであつた不穏な雰囲気が嘘のようだ。

女は親しげな笑みを浮かべたまま、蛙の絵がついた奇妙な塗り薬を取り出した。蓋が開いた途端に、つんと、かいだことのない匂いが鼻を刺激する。

「くっさいけどね、これがよく効くんだよ。腕をざつくり落とされてもね、これ塗れば熱が出ないんだからね。本当によ、こにはよく薬を使うんだから」

薬といつ葉葉にひばりは強く反応した。薬をよく使つのなり、とらいたことを知つてゐるかもしけない。

「お姉さん、とらいたて、知つてる?」

「とらいたて、蘭医の田那の使いのだる。よく薬を持つてくるね

薬を塗られながら、ひばりは感嘆した。

なんとこう偶然だわ。こんなところで、とらいたのことを知る人物に巡り合えるとは。

「お姉さんー、その、みとらって、知つてる……？」

藁にも縋る思いで、ひばりは勢いづく。

ひばりの様子に瞠目しながらも、女は語り始めた。

「みとらね、みとらっていつのはよく分からぬけれどねえ。といちの」とせ知つてこるよ。もつ十年来の付き合いだからね

十年来。となると、かなり古い馴染みだ。

「とらいちはずっと、薬売りなの？」

「いや。……そうだね、十年前だね。あの子がふらつと訪ねて来たのは。今は仏頂面で、顔に傷なんかもあるけど、昔のとらいちはね、別嬪だったんだよ。

信じられないかもしれないね。男に別嬪っていうのも、なんだか変な話だしね。でもさ、仲の町の花魁も田をひんむくくらいだったねえ～」

十年前、とらいちには傷がなかつたのだ。ならば一体、いつ傷がついたのだろう。この人物は核心を知っている。自分の毒気を抜くための、とらいちの過去を知っている。

ひばりは身を乗り出して、次を扇いだ。

「それで、……どうして」

「喧嘩だと言つていたね、顔に傷をつくつてまた見世に来たときは、薬屋でね。愛想くなつて、不遜な仏頂面になつていたよ。今じやあどんどん、人殺しみたいな人相になつちまつて」

人殺しという言葉にひばりは腹を抱えこんだ。

確かにその通りだ。初見ではひばりも、とらいちを熊かなんかの猛獸のようだと思ったものだ。

とらいちの話を他人とする機会はなかなかない。心を躍らせながらひばりは、女の話に耳を傾けた。

とらいちに関する他愛のない話が楽しくて、もつともつと強請つてしまつ。いつの間にやら、時間を忘れていた。

「あれ、あなた。もう牛の刻じゃないか？」  
はつとじて、ひばりは立ち上がった。

「お姉さん、わっしり、いかなきやあ  
「あらあら、やつぱりね。まむむむむむむ」だ  
「お姉さん、有難う」

深々と頭を下げ、ひばりは大急ぎで玄関口に向かつ。  
と、そのとき、女がひばりのめりやす足袋に視線を落とした。

「あら。あなたもしかして、お鈴ちゃんの子か？」  
「え？」

「やだあ、早く言つとくれよ。そのくントコな足袋、お鈴ちゃん  
が縫つてくれたんだわ〜。前に一度来たとき、お鈴ちゃんが置い  
ていつたんだよ、ほら。ねばさんと、おそろい」

女が足の裾を軽く持ち上げる。女は、つまはせだらけではあるが、  
めりやす足袋を穿いていた。

「とらいちの奴、お鈴ちゃんの話題になると照れるんだか見えにな  
つちまつんだよ。むつつりだから」

「あの……お鈴つて……」

「へえ？ ああ、お鈴ちゃんのトシじゃないの。なあんだ

女は残念そうに眉を下げるが、薬箱をしまおうと腰をあげた。ひ  
ばりは座敷に上がりこむと、中腰の女に取りすがる。

「ちゅうと、なんだい」

「お鈴ー。」

ひばりは強い眼差しで、

「お鈴つて人は、誰……」

それは懸念だった。女をつかむ幼い手はあまりに懸命で、白んで  
いる。

女はひばりの様に目を白黒しながら、ゆっくりと口を開いた。

「誰つて。やつやあ、といこちが身請けした子のじじやないか」

## 第一十九話「追求」

お鈴ちゃんをとりいちが買つたのは十年前かね。

突然やつてきて、お鈴を貰うつて言つてね、五十両をばら撒いて行つたんだよ。ぞつこんだつたんだろうね。

お鈴ちゃんはその後、一回見世に来ててくれたつきりだね。今も一人で夫婦をしているんじやないかね。お鈴ちゃんの傍にいる時は、あの仏頂面、結構な男前なんだよ。

めんこいって方言はね、お鈴ちゃんから聞いたんだよ。なんだか言いやすくて、ついつい使つちまうんだよね。

嗚呼。

頭がおかしくなりそうだ。

ひばりはふらふらと、大海屋に戻つた。すっかり青ざめた顔色を見て、最初に飛び出してきたのは、三船だった。

「どうしたんだい」

少し乱れた髪に、服についた土ぼこり、そして小指の傷。三船は仰天して、ひばりを抱きあげると、つか佐の部屋へと走つた。

「三船おかあさん、どうしました」

乱暴に襖を開けた三船に、悠々とくつりこいでいたつか佐が頭をもたげる。

「大変だよ、ひばりが

「ちがう。おかあさん」

狼狽しそれぬ三船は、ひばりが弱弱しく制す。

「なんでもありんせん。散歩をしていて、転んだだけ」  
「転んで指を切るもんかい。お前にれ、刀傷だらうー。」

「そんなことよつ」

激昂する三船は冷めた皿を送る、ひばり。三船はゆっくりとひばりを下ろすと、ようようとその場に腰を下ろした。

「三船のおかあさん、ちよことお尋ねしたいことが」

「なんだー」

「おかしなことをと思つかもしれんが」

「だから、なんだい」

「どちらこのこと」

三船が眉を顰める。

「……どちらが、どうしたんだ」

「どりこちもしかして昔、みどりとこいつだつた?..」

淡々とした口調だった。三船は何か後ろめたことでもあるように、視線を逸らす。

「突然、何の話だよ」

「ある日那さんが、わっちのことを、みどりと言つて勘違つて」

みどり、とこいつは、三船は強く反応した。瞳孔が僅かに細まつ、興奮の影が横切る。

ひばりはすかさず、

「とらいちは陰間だつたの」

迫つた。

幼い声には、強い芯があるようだつた。賢しい推測の上にたつ搖るがない訴えを、腹の底に据えた淒みがあつた。

三船は、怯えた。

「知つてどうするんだい。お前に、とらいちのことを知つて、何か良いことがあるのかい。それより、傷は一体」

すつと、ひばりが三船の脣に手を置いた。音のない所作。一陣の風のよくな、あしらじ。

「知りたい。知りたくてたまらないの」

黒曜の田が見るものに恐怖を引く、

「わづちは、なんなの？」

瑠璃の田が神秘を引く。

「とらいちの、なんなの？」

人間から遠ざかつた、蓮の花のような童子。

ひばりではない何か、妖艶な何かがとり憑いたような、威圧感。そのくせ澄んだ水のように心を吸う、深淵じみた魅惑。

三船にはもう、欺くことは出来なかつた。

「ああ、あなたは、みとらみたいだ……」

絶え入るような声。諦念したような表情で静かに咳き、三船は腰をあげた。裸に、手をかける。

「使いを出して急いでところを呼ぼう。今夜は見世に出なへて良  
い。つか佐、ひばりを借りるよ」

呼ばれて、つか佐はすんなりと頷いた。涼しげな顔は僅かにひつり  
たえているようだったが、事は察している様子である。

「好きにすれば良い。わっただけの禿じやないようだしね」「  
そう平素のまま口にすると、手にしていた本を投げやつた。

## 第二十話「花むしる」

居待月を一身に、風に曇られ夜桜が舞う。千切れた花びらは庭にある池に重なり、桃色の筏のよつに揺れている。

「行灯の焚きすぎだ。桜が、狂っている」  
格子の外に顔を向けながら、とうこちは口ずさんだ。

三船の部屋を借りて、ひばりととうこちは膝を向け合っていた。ほんの少し距離を置き、相対するように座っていると、まるでいつもと同じよう、自分の近況を報告する時間のよつに、ひばりには思えた。

しかし今日は、違つ。

「とらいぢ  
「三船から聞いている」

とらいぢは視線を真正面に直した。

右のこめかみから鼻先、そして左耳たぶの下へと、走る刀傷。強面に加わる不精髭は、遁世した流浪人のようだ。  
過去などないかのような、しかし重みのある面容。

「お鈴のことを知つたと  
「うん。だから、わつちはとらいぢに訊きたい。わつちは、一体なんのか。どうしてとうこちは、人買いの真似事などしたのか  
「教えるつもりはない」と、言つたら  
「三船に賭けをやめてもらひ  
すつぱりと、ひばりは言い切つた。

「どちらの代わりに、わっちが賭けをしんす」

三船とどちらちは賭けをしている。ひばりの成長に対して、大金を賭けているのだ。

その賭け事を、自分が三船としても別に問題があるわけではない。例え、どちらいちがひばりは不法の禿であると上に申し付けたとして、損はない。大海屋という看板にただの薬売りが敵うはずもない。戯言と流されるか、逆に不法をはたらいた人買いとして、どちらいちが囚われることになるのだ。

それはどちらいちも、言わずもなが、分かること。

「何故知りたい」

「知らないことは辛い」

「どうして。大海屋の禿としての矜持か」

「分からん」

何故辛いのか分からぬ。

ただの好奇心の暴走なのか。それともどちらいちの言つとおり、矜持なのか。

お鈴という切見世あがりの女を食べさせるために吉原に売られたということに対し、腹が立つて居るのだろうか。  
分からぬ、分からぬiga。

「知りたい。このままではきっと、壊れてしまう」

率直に真摯に、どちらいちだけを捉える。僅かもぶれることはない。ひたすらに、どちらいちだけを求める。

男と、少女。主と、僕。<sup>しもべ</sup>一人は相対し続けた。

どれほどの時間が経つたろう。やがてどちらいちは再び、ついと桜を見やつた。そして、薄く、唇を割つた。

「生まれは京都だった。親の顔は覚えていない。

ただ、京の生まれだと言われて育つた。下手な上方の言葉に囲まれて、陰間として仕込まれた。湯島の、今はない高級茶屋だ」

桜が舞う。花びらが風に翻弄されて、枝葉からその身を奪われる。

ひらり、はんなりと。

蒼穹に映える桃色は滑るように宙を泳いで、たおやかに失墜し、大地を埋める。花むしろはまるで絵巻物のよう。

眺望に心奪われていると、後ろから耳たぶを噛まれた。

「どうした、上の空で」

「桜が綺麗だから」

だみ声に、少年は応える。その横顔は整つていて、桜に負けぬほどの色香があった。人を酔わせる、蟲惑的な匂い。

女と見紛う容姿だが、声は幾分低く、おのこだと分かる。低いながら、澄んでいた。

少年の背後から声が離れた。粘着質な音が跳ねる。少年の眉根が僅かに揺れる。

「はあ……」

嘆息しながら窓格子を背にし、壁に背をもたせかける少年は、裸だった。

「旦那様は、桜はお嫌い？」

窓格子から漏れる光が瘦躯を愛でていく。華奢で、中性的な少年の身体には、ところどころ花びらを思わせるつゝ血があつた。  
女はない、だが男にもない妖艶を纏う裸体。それを、だらしなく褲を垂らす中年男が搔き抱ぐ。

「桜より、団子より、お前が良い」

「そう」

荒々しい呼吸を隠すこともせず、男が少年の腹に脂ぎった顔を押し付ける。発育途中の中心に、むしゃぶりつく。

「みどらも、旦那様が良い」

男に見えぬようにぺろりと舌を出して、少年は嫣然と微笑んだ。

江戸に残る数少ない、湯島の陰間茶屋。そここの高級色子であり、質屋大槻西村屋に請け貰われた十四の身姿。  
与えられた名は西村みどら。

といいちの、忘れがたい過去だつた。

## 第二十話「花むしる」（後書き）

これからは、とらいちの過去編に入ります。陰間であるため、人によつてはかなり毒の強い内容となつております。“了承下さいませ。”

### 【陰間】

江戸時代は舞台に出ていない少年役者や売春をする幼い男児の名称として使用され、本来は男女に通用していました。粋と珍奇を求める町人文化により栄え、有名な場所として湯島や芳町がありました。湯島が文京区にあるのは東京なら知つていらっしゃる方も多いかと思います。

人気の陰間となると花魁を買うより高くついたため、僧侶や金持ち商人といった一部の富裕層に求められたようです。

かなり流行となつた商売でしたが、1787年の寛政の改革をきっかけに規制され、どんどん潰されていき、明治にはなくなつてしまつたそうです。

### 【男色】

古くから日本には男色の文化がありました。明治初期には陰間茶屋は途絶えましたが、日露戦争の頃、富国強兵のおりに九州から関東の方へと流行の波があつたようです。軍人が美少年をつれそつてしまつという事件もありました。

やがてそれも、江戸で女色の文化が栄えたことやキリスト教の浸透によつて、息を潜めざる終えなくなつたようです。

### 【局見世】

羅生門河岸の話が出ましたが、羅生門河岸には最下級である切見世の他、個人経営の見世もありました。そういう見世は局や、局

見世と呼ばれました。

## 第三十一話「お籠との出合」

長い髪を下ろしたまま、湯船に口元まで浸かる。ふかふかと浮かぶ蜜柑の皮で軽く身体を擦つてから、みどらは風呂からあがつた。

湯を滴せながら、脱衣場に置かれた三面鏡の前に立つ。

彼は己の身体の隅々までを見やつた。骨は変わつていなか、肉は変わつていなか、背は伸びていなか。湯気に曇る鏡を手のひらで拭いながら、審美し、……その場に蹲る。

「また男に近づいている」

やけくそ氣味に言い放つと、布で水気を取つて、早々と浴衣に着替える。濡れ髪のまま、紐で縛ることもせずに、湯殿をする。

みどらは焦燥していた。日に日に成長する自分の身体が恨めしくて堪らなかつた。時の流れに逆らうことは出来ない、幼い陰間はずれ大人になつてしまつ。

承知のことだ。みどらも、みどらの主人も。その上で、みどらは茶屋から身請けされた。

しかし、承知と理解は全く違つ。実際に変貌してしまえば、主人に捨てられても可笑しくはない。

そういう陰間は何人もいる。

「くそつ、くそつ、くそつ」

子犬のうちは可愛かろう。だが、大人になるとしたら。

人間など、雑種の犬よりたちが悪い。両親に似ない子どもなど」

る。どういふのか、仏ですら分かるまい。

腹の煮える思いで、みどりは気まぐれに見世へと出た。

奉公人たちが品を持って錢を持って、町人どもの相手をしている。身体に価値がなくなつたとき、自分も彼らのように雇つて貰えるのだろうか。主人の道を助け、衆道を共にするような生き様が与えられるだろうか。

自分に何が出来るだろう。

算盤は出来る、口はそれなりに巧い。必要があれば、京の言葉でも使い、看板になる自信はある。主人が求めれば女だつて抱く。

だが、見捨てられぬ確証があるわけではない。

何か仕事があるのならば、みどりも少しがれほど不安にはなるまい。

焦つてしまつのは、日がな一日、何をするわけではなく、ただ愛玩動物よろしく、そこらへんに投げられるから。

願いいれても、主人は溺愛するだけ。奉公人たちに到つては、主人の目を気にしてか、腫れ物でも扱うような態度だ。

だから遠巻きに、見世を見やるしかない。いつか捨てられそうになつても縋り付けるように、そつして少しづつ、どのような仕事があるのか吸収していく。

実に、下らない。

みどりは草履につま先を引っかけて玄関先へと降り、靴箱の上に置かれた招き猫の山から、小さな猫を手に取つた。

漆塗りの、厄落としの猫。右手を掲げて、不敵に口元を丸めて、みどらを凝視する。

「お前と俺と、どつちが役にたつ寝子だらう」

みどらは、猫の間に入り込んだ埃を爪で穿りながら、呟いた。誰が聞くわけではないと思って。

しかし。

「めんこい猫ですねー。」

寸でのところで、みどらは招き猫を落とさずに済んだ。猫を抱きかかえながら振り返ると、地味な身なりをした娘が、玄関先に腰をかけて、にこにこしていた。

「おいらも猫、好きだ。犬より飼いやすいし、温かいし」

娘にまじまじと視線を注ぐ。赤ら顔にそばかすの田立つ、野暮つたい醜女だ。

つきはぎだらけの風呂敷包みを膝においている。下級の客か。

「あれえ、別嬪さんだ……」

「男だよ」

「ふん？　へえ！　はあ、こりゃあたまげた！」

大げさに両手をあげての、育ちの悪そうな出方。みどらにはそれがとても新鮮に思えた。

陰間として蝶よ花よと育てられた彼は、平凡な町人ととともに話したことがない。彼に話かけるのは見世の者か、花魁を抱くより高い金を払って上がりこんだ僧侶や金持ち商人か。

「おひりにせよ、いろんなに氣輕な口振りをされたのは初めてかもしない。

「お姉さん、名前なんていつの」

みどりは招き猫を元の位置に引っ込んだ。娘の横に座った。娘は急にみどりが近寄ったことに照れ、僅かに腰をすらすと、

「おりは、お鈴」

赤ら顔がますます紅潮する。世間慣れしていないおぼこのだらう。じめかみに、じんわりと汗が浮かんでいる。

「お鈴さん。わつきの、めんこいって、何?」

「はあ。めんこいは、方言だべか」

「少なくとも、訊いたことはないな」

お鈴は手の甲でじめかみを拭つと、姿勢を改めた。

「おらの生まれは、奥州なんです」

「奥州……、つて、北の?」

「へえ。めんこいは……めんこいつてこのは、なんだべか。

あがねわがねな、頭つこ悪いすがら。

えーと、猫でしょ、花でしょ、子犬を、あがんぼー。」

「あがんぼ?」

お鈴はうんうんと唸ると、思ついたよつて立ち上がり、招き猫へと駆け寄つた。

一番大きなものを手にとりて、抱き寄せ、あやす。そして千守唄を歌つた。

ぴんときて、

「もしかして、赤ん坊？」

「ああ、そう！ そうでがんす！」

安堵するお鈴に、みどりは続けて頭を動かす。猫、花、子犬、赤ん坊……。

「もしかして、可愛いという意味？」

「ああ、そうだ。可愛い。めんこいは、可愛えりてことです」

伝わったのが心底嬉しかつたのだろう。お鈴はぴょんと跳ねると、くるくる回つた。天真爛漫に白い歯をほほえて、きゅうっと、猫を抱きしめる。

「可愛いは、めんこい」

そう言つて猫に頬を摺り寄せるお鈴にみどりは、いつの間にやら、見とれていた。

飾り気のない、ありのままの生娘。

無垢すぎでお世辞にも美しいとはいえない彼女が、前触れもなく重たい心を軽くする。暗澹としていた心を忘れさせる。

素尚の可憐さが肺を満たし、声を奪う。

一瞬のうちに、身体がのぼせた。

惚れた腫れたが生きる術だつたみどりにはないものが、そこで花のように咲いていた。

山稜を描いて、朝日が静かに顔を出す。柔らかな暁光が格子窓をぬつて、みどりの長い睫毛をぐるみ、白く染める。

桜は時に流され落ちてしまった。かわりに青々とした緑が日を楽しませる季節の早朝にも、みどりは絶えることのない激しい劣情に貪られていた。

五臓六腑を押し上げる感覚、それがざるりと抜けていく感覚。魂ごとほだされているようだ。肉体と肉体が摩擦し、苦しいほど熱が骨と魂とを炎る。筋肉は享楽に痺れて、自分の身体ではなく、ひとつ棒のようである。

みどりという棒を、筒を、隙間なく埋め、削り、貫く。

生理的な涙を流して、身体を痛いほど反らして、みどりは喘いだ。噛んでいた唇はだらしなく開いて、不埒な声を生む。外に漏らすまいと布団に顔を押し付けているのは、悦楽の中に残された唯一の羞恥だった。

何かが自分の名前を呼び、激しく進入していく。蝕み、狂わせる。性的な喜びに陶酔しきった頭が完全に停止し、肉ばかりとなつて極致に突き上げられたとき、みどりは一気に白くと墜落した。

懸命に呼吸をして、潤んだ瞳で自分を組み敷く男と視線を絡ませる。

男はまだ、動いていた。幾ばくか腰を揺らしても、ようやく男が身体を止める。

梅干でも食べているような顔で意味のないものを搾り出す、男。

みどりにはなんだか、滑稽に思えた。

「この男は一体、何をしているんだろう。自分は一体、何をしているんだろう。

無様で、空虚で、この行為は一体なにを生むのだろう。

「この先は、この意味は。

「……快樂がなかつたかといえば、嘘になる」

畳の上に凜と正座しながら、とらいちは目を開じていた。

「それでも、虚しかつた。そこに喜びはなかつた。いつ終わるかもしれない脆い戯れに思えた。男に抱かれているときは、いつもそうだつた。主人の遊びにつきあつて、複数の男に嬲られて酒の肴にされたこともある。おかしなものだ。もう十年も前のことなのに、時折、昨日のことのように思い出す」

とらいちは自嘲すると、僅かに開眼した。

その瞳の色は、覚えのある色をしている。嘘偽りなどひとつもない、正真正銘、とらいちの過去なのだろう。例えそれが、今のとらいちと乖離していても、彼の人生の根は、陰間という生き方なのだ。

ひばりの心に衝撃はなかつた。ただ静かに受け止めていた。もしかしたら、あまりのことにも心が動かないのかも知れなかつた。

漠然たる印象を持つた表情で、ひばりは問いかけた。  
「とらいちは、女人を抱いたことはある？」

質問に、一拍押し黙る。とらこちは訥々と、

「ああ。抱いた……、ではないな。……抱かれた。初めて女に抱かれたのは、夏だった」

呴いてまた、遠くを見据えた。

みどらは特筆するような勤めがあるわけではない。

一日やることなど、抱かれるために身体を朝と晩、清めるだけだ。主人が仕事に出てしまえば、まるで猫のように暇になる。

晩夏の日は高く、入道雲がいくつも空に座り、くつりこぐら。胸が透くほど深い蒼は、不可思議な高揚をみどらに与える。

足取りは羽のように軽い。

手には先ほど花屋で買った竜胆りゅうじやくを携えていた。笹に似た葉は涼しげで、紫色鐘形の花からは薄く甘い芳香がする。

みどらは老舗の小料理屋の暖簾を訪ねた。そこに彼女がいると知っていた。

「あれえ、どうせ。ようこりつしゃこました」

勝手ながら裏手に回ると、そこに彼女はいた。

着物を膝上までたくしあげ、あつけらかんとした笑顔で、物干し竿に物や布団を干している。たくさんの中身に埋もれる彼女を、みどらは逃さなかつた。

みどらにとってお鈴を見つけることは、真っ白い雪原から一輪の赤い椿を探すことより容易い。

「お鈴さん」

躍る心を制して駆け寄る。

「お墓参りですか」

「お墓?」

お鈴の視線が竜胆に向けられていたのに気が付いて、

「ああ。これはね、はー」

みどりはお鈴に花を手渡した。お鈴は驚いて、  
「ええ、おらですか？ おらはまだ死にませんよー。」  
「何を言つてこりの。俺があなたを殺すわけがないでじょ。これ  
はその、」

説明しようとして、急に恥ずかしくなった。恋このぼせて女に花  
を持ってきたということだが、自分らしくない気がして、  
「見世に花を飾つたら、いいんぢやないかつて……」  
口ごもる。

「はあー、ヒラタ君は優しい方ですねえー！」

「優しい?」

「ええ、ヒラタ君は優しいにな。おらね、本当をこいつ、ヒラタ君  
が、ちゅうとおつかなかつたです」

優しことにつけたり、怖いところつけたり。面白い娘だ。

「どうこういと?」

首を傾げてみると、お鈴は困ったように眉をハの字に曲げた。  
「怒りんで下さること?」

「怒りなー

みどりがさつさつと言つたのをまじまじと確かめて、お鈴は続け  
た。

「とひわまつて、綺麗でしょ。綺麗なひとつて、近寄りがたいもんです。おひみたいな醜女なんかは、とひわま見てたら、心臓がもたねえ」

「心臓が、もたない?」

「どくつどくつてします。だから怖い。でも、今はとひわまが優しいと知つているから平氣です」

お鈴はそつと、自分の胸に両手を重ねた。ふつぐりとした胸に五指が軽く埋まる。

みとらは途端に、身体の内側が窄まるのを感じた。

花を買ってきて、お鈴に会いに来て、自分の心臓はお鈴の他愛無い所作でも潰れてしまつた……、平氣だと言われたことなどが存外にも響いた。

「お鈴さん、怖くしてあげようか

「え?」

悪戯に火がつく。

みとらは龍胆をお鈴の腹に押し付けると、そのまま抱きしめ、唇に唇を重ねた。こくつかの龍胆がこぼれて、一人の足の下で折れる。みとらは開眼したまま、舌をお鈴の唇に挟めようとした。

「とひわまー。」

動転して、お鈴がみとらを両手で押した。しかしみとらは抵抗するお鈴!」と、抱擁する。

お鈴の首下に頭を当てる、囁く。

「お鈴さん」

「俺が怖くなつた？」

無意識に、普段の声と格段に低い、男の声になる。みどりの突然の行動に、お鈴は素直にわなないた。

「……怖い」

その声があまりにも小さく、みどりは我にかえつて後悔した。

どうかしている。何を焦つているんだろ？

罪悪感と混乱が背筋に渦巻く。みどりはこの状況を繕つたために考えを巡らした。

「冗談にしてしまえば良いと、決断する。顔を上げる。驚いたかと、笑う。そうすれば

それを、恋は許さなかつた。

「だけど」

お鈴の濡れた目が、みどりを射る。

「嫌ではありません」

小料理屋の裏庭。幾重にも重なる浴衣や布が、口付けを交わす二人をかろづじて隠していた。

垣根の先には人家があり、小料理屋の壁の向こうには密やお鈴の主人がいる。奉公人だつて、お鈴だけではない。

人のざわめきがすぐ傍にある。

「お鈴さん……」

丁寧にお鈴の着るものを見下す。首筋から肩、胸元へと唇を押しつけ、舌で軽く弄る。汗ばむお鈴の身体は熱っぽく、塩氣がある。

「しょっぱい」

邪氣のない一言。お鈴は返さない。頬を紅潮させ田を潤ませ、片手で軽く顔を覆つ。きゅっと噛む唇の意味は恥じらい。そしてなによりの歓喜と期待だということは、みどりには手に取るようだ。何故なら、自分もまた同じであるから。

みどりは竜胆を完全に捨て去り、お鈴の身体を小料理屋の壁に押し付ける。見世の賑わいが壁を隔てて一人に伝わる。

気にせず、隠されていた女性らしい胸元は開かれる。光が差し込む。

「どちらま、いつも来ていのじ隠居さんが、珍しく、丼物を頼んでいのよ」

みどりは長い五指でお鈴の乳房を片手で持ち上げると、先を啄み、唇に含み、舌で転がした。纖細な舌は彼女の乳の、柔らかい部分をじぢめる。

「大丈夫だべか。残したり、お腹壊したり」

次第にお鈴の乳首は隆起して、小指の爪ほどの大きさになる。甘く噛み、吸つた。その形を辿り、先のへこんだところを刺激する。お鈴はいじらしく、耐える。余した左手を、お鈴の太ももに伸ばす。内側を愛撫する。

「あれ、そつかあ。お孫さんと来てる……」

お鈴の声が、不意にぐぐもる。初めて彼女は抵抗する。

「そこは」

みどらの左手に、お鈴の手が触れる。

「そこは……」

着衣の間から覗く、柔和な太ももと太もも。夏の光が濃い影をつくり、窺いにくくなつていてるその場所へ、みどらの左手は忍び込んでいた。

「濡れてる」

みどらは、

「入れても良い?」

お鈴は膨れるみどらの腰を俯瞰し、はつと顔を逸らす。みどらのものは、雄雄しく漲つていた。それは彼にとつて痛く苦しいほどで、激しく疼き、脈を打つていてる。

大人の男らしく、赤く剥き出している先端。幼い頃、彼は自分の小さなもののがこんな風に変貌するとは思つていなかつた。大人们のものを見て、恐ろしくて泣いたことがある。赤黒く脈

を這わせた男の証は不気味で、この世に在りがたひがいが恐れぬつ  
な恐怖を漂わせていた。

初めて入れられた時は痛くて痛くて、死んでしまえばどうぞ樂  
かと思つた。

つまく喋ることさえ出来ないこちらから小さな張形から始めて幾度  
となく尻を弄ばれてきたというのに、怒張したものは固く大きく熱  
く、彼の経験を無下にした。抉られるように中を蹂躪されて絶叫す  
る彼を大人たちは初物らしいと喜んで廻した。

ひい、ふう、みいと数を数え気持ちを落ち着かせる術を、行為の  
さなかでどれほど使つたろう。何度も終わることがなく、絶  
望したあの夜。一体どれほど涙を流したろう。

「どうぞまっ？」

お鈴が首を傾げる。

「どうして泣いているの」

お鈴の両手がみどりの頬を包む。

「怖い……、お鈴さんを傷つけるのが怖い」

過去の奔流が情素から唐突に吹き荒れ、みどりは蒼白になつて咳  
いた。

自分は何をしようとしているのだろう、お鈴を同じよつに痛めつ  
けてよいのだろうかとこう葛藤が彼を支配する。

しかしながら、そんな彼をお鈴はそつと、強く抱きしめた。  
「大丈夫ですよ。おらは傷つきません。だから……」

お鈴が右手でみどりの頭を撫でる。左手でみどりの腰を擦る。そ  
して自ら軽く股を開いて、みどりのものを導いた。

「おらを女にしてください」

涙を含んだ甘い決心が、二人の間に静かに結ばれる。皮も肉も服もあるはずであるのに、垣根などなく密着してこようと思える。

意を決して、みどりはお鈴の尻を両手で支え、腰を落とし、暗がりへと差し込んだ……、が。

「入らない……」

経験のないみどりのものが、濡れそぼつたお鈴の表面をつるつると滑る。

懸命に挑んでみるも、情けないほどに巧く入らない。引っかかりもしない。

慌てふためくみどりに、

「一人でしないで」

お鈴は両手を差し伸べた。

みどりの張り詰めたものを手にして、その先端を口の場所へとあってがう恥ずかしさに身を竦め、目を伏せながら、お鈴は声を絞った。

「ここです……」

お鈴の健気な様に、みどりは内心詫びながらも、それ以上の、溢れ突き抜ける思いに震えた。

明るくて、優しくて、健気で、愛おしい。好きだ、この人がたまらなく好きだ。

みどりはお鈴にもう一度口付けをすると、ぐつと腰に力を入れた。お鈴の肉の戸がゆっくりと口を開き、みどりの侵入を認める。

中は、とても狭い。

先端が入る前に、お鈴が苦悶の表情に顔を歪めた。

「痛い？」

気遣い、みとらは動きをとめた。

「平気です」

痛みに耐えながら、お鈴は言った。

「どちらまとだから、平気」

力強い優しさに励まされ、みとらは息を詰める。ああ、この人に恋をして良かつたと。

「お鈴、『めん。本当はもう、余裕がないんだ』

みとらは強くお鈴の身体を掴んで、一気に突き入れた。お鈴の身体が硬直し、わななく。

「あつ」

お鈴がひとつだけ、鳴ぐ。

みとらを抑えていた箇は、その初音によつて外れた。もう、止められなかつた。制御しきれない身体は、お鈴を欲してやまない。激しく、激しくみとらはお鈴の中を掻き回す。

お鈴は破瓜の鈍痛に身悶えながら、みとらの愛に委ねる。軋む身体に打ち付けられる異物感は裂けんばかりの激痛を引えているはずだ。それでも彼女は、耐えた。

肉と肉がぶつかり合う音。それに、周囲の喧騒が被さる。一人の猛々しい逢瀬はきっと、耳をすませば聞こえてしまうだらう。

客人たちは思つてもみないだろうか。なごやかに食事をしている  
その席で、壁一枚を隔てて、若い男女がまぐわい、情事に溺れてい  
る。想像するものは、いるまい。

みどりが固いものでお鈴を穿ち、お鈴はみどりの内股を血で汚す。

夏の太陽の下、熾烈に一人は互いを感じあい、奪い合つた。

## 第三十四話「女郎お鈴」

「俺はそうして、お鈴と度々会つよつになつた。心を傾けた」

淡々と、無表情で語るところ。しかし、けしてところに寂寥な思いはないだろうと、ひばりは察していた。ところの田中どじか、幸せそうだ。

つんと、喉が痛む。どうしてだろう、ひばりはいつしか沈み込んでいた。泣いてしまった。

とらいちを幸せにする女がいる、その事実がひたすらに苦しい。どうして、どうしてだろう？

「でもその人は、他の男の人へ、抱かれたんでしょう」

ひばりが切り返す。ところは刹那、口を真一文字にしてから、「それには、理由がある」

僅かに動搖した、重苦しい口調。

「枯れ草も舞うようになつた頃か。俺とお鈴は何度も会つた。勿論、主人には秘密にしていた。主人は江戸の質屋では大きい方だつた。手を回せば、お鈴の奉公する見世を潰すことだつて出来た」

あの男は、あからさまな嫌悪を噛みしめながら、ところは言つた。血走る目、感情の発露。だがそれは一瞬のことだった。

すぐここにじいちはあの、深い闇色の瞳に戻つて、また抑揚のなく語り始めた。

爪痕のような朧月が暗闇に漂っている。

吉原羅生門河岸は岡本屋の、くびれた、形の悪い看板を確かめながら、みどりは青ざめた。

先ほどまで懸命に足を動かしてきたせいで、息は上がり血が上つていたというのに、嘘のように冷えていく。

「こんな切見世に……？」

信じられない、信じたくないという、虚脱感が湧き上がる。懷疑心が希望を求めて、お鈴の顔を浮かべる。

それは青天の霹靂だった。いつものように花を持つて、お鈴の奉公する小料理屋へと足を向けた。

しかしそこに見慣れた暖簾はなく、覚えのない看板が掲げられていて、お鈴ばかりか働いていた奉公人たちは全員、いなかつた。

何故こんなことに。

歯がゆい思いに身を焦がしながら、みどりは岡村屋の張見世からお鈴を探した。

張見世は見世先についた格子で囲まれた部屋で、そこには今宵買える遊女が座している。格子が半ばしかない。最安値の見世だ。揚げ代は一分にも満たないだろう。

胸が切り裂かれる。見つけたい、見つけたくない。  
涙を堪えながら視線を横へと流していく。遊女たちは殆どが中年で、不恰好な姿をしている。芸を忘れて春を売るよつになつた転び芸者も混じつているかもしない。

「んな場所に彼女がいるはずない。

祈るよつて端まで見やつて……、

みとらはびつと安堵した。

お鈴のような若い女はない。白粉が厚く騙つていても、そればかりは隠せない。お鈴はない。

胸を撫で下ろし、息をつく。長居は無用だ。  
みとらは踵を返そうとして、しかし行く手を阻まれた。

「あんた、女を買いに来たのか」

品もなく顔を歪める、密呼びの男がそこここいた。せつと、みとらは頬かむつで顔を忍ぶ。

「女を捜している」

「吉原で女探しだなんて、稀有なじつで。どんな女だ」

「奥州の生まれで、そばかすがある」

せつと話を切つて立ち去りたかったが、誰何された手前、下手に悶着する危険は避けたほうが良い。いるはずがないと思いつつ、みとらは言葉を結んだ。

興味をなくして別の男を掴むかと思にさや、

「ああ、いぬよ」

岡本屋の看板を指差された。

「新しいのが売られてきたんだ。一階へあがりな」

再び背筋が凍る。

「嘘だ」

「嘘？ 嘘だと思つなら、一階におあがつよ」

男が挑発的に唇をあげる。

みどりは怖氣立ちながら、張見世の脇にある入り口を確かめ、足を踏み入れた。

狭い土間から下駄を脱ぎ、階段を上がる。どこもかしこもボロボロで、一段上がるごとに悲鳴をあげる階段は、今にも朽ちてしまいそうだ。

上るうちに、嬌声がねつとりと鼓膜に張り付いてきた。夜見世が始まつたばかり。普通の見世ならば、まだ酒を注ぐ時刻だというのに。

つんと酸っぱい匂いが漂つている。

階段を上がりきつた先の一階には、田を疑う光景があつた。廊下には襖がなく、大部屋がなんの隔てなく開け放たれている。

その中に汚れて破れかかった衝立やら屏風やらが並べられ、狭い区画をつくつていた。

狭い柵の中で、汚い身なりをした男女が恥ずかしげもなく身体を重ねている。

鳥肌が自然とたつ。醜悪で卑しい。まるで家畜小屋だ。雅も芸もない、ただ性欲を満たすためだけの引付部屋。

ここに彼女がいる？

「どうしゃした、旦那。若い娘は奥ですよ」

だみ声に背中を押される。苦渋を噛み締めつつ、みどりは一歩を

進めた。一步、また一步と。

そうしてあつという間に突き当たって、卑屈な空間を見下ろした。絶望が全身を突き崩す。間違いなく、彼女はそこにいた。

呼ぶための口は動いたが、声は出なかつた。彼女もまた同じで、唚然とみどりを見上げ、硬直した。

「御代は後でよろしいです。じゃあ、可愛がつてやつて下さー」

下賤に背中を押されて、みどりはふらふらと、煎餅布団に膝を下ろした。しばしの間、互いを見つめる。

お鈴の髪は乱れて、着物も乱れて、足は淫らに腿まで露出している。

一体、一晩に何人を相手しているのだろう。何人に股を開いているのだろう。

憤りが身体を縛り、みどりはひたすらに俯き続けた。先に声を繋げたのは、だから、お鈴だつた。

「どうれま、どうして……」

声は風邪をひいたように掠れていた。こんなに乱暴に扱われて、こんな劣悪な場所に閉じ込められて。

高ぶる熱は、みどりを突き動かした。お鈴の手を掴み、ぐつと引き寄せた。

「言ひな

思いは残酷なまでに伝わっている。みどりもお鈴も無言であるが、なにを考えているかは手に取るようわかる。心から、身体の底から怯え、震えている。

見たくなかつた、  
見られたくないなかつた。

「料理屋が潰れたと訊いて、探し回つた。やつと噂を聞いた。吉原の岡本屋だと。藁にすがる思いで来た。

言わなくて良い。何も言わないで。お願ひだから……」「

見世の形を繕うために、どうしてお鈴がこんな目に合わなければならぬのだろ？」

彼女は故郷を離れながらも懸命に働いてきた、それなのに、まだこれ以上の不幸を望むのか。

憤怒と悲壯が鬪きあい、みどりの身体を食つていいく。強烈な怨恨が溶岩流のように燃え、脈といつ脈を逆流していく。果てのない激昂の最中。高波にさらわれてしまつた心は、翻弄される果てで、ある思惑に触れる。

唐突にその考えが、閃いた。

「お鈴、良いことを思いついた」

傷ついた愛しい人の身体を抱きしめながら、囁く。

「買ひに来る。身請けするんだ、俺が」

「どうさま……？」

「金なら、あるんだ」

思いついたのは、正しい道から外れる行為。けしてやつてはなら

ないと戒めていた悪行。

「お鈴のためなら……」

主君だって、裏切れる。

## 第三十五話「駆け、落ちる」

質屋のビルに金庫があり、ビルに錠を外すための鍵があるのかは売られたすぐに知っていた。

ただそこから金を拝借することはしてはならないと、いや、するはずがないと思つていた。

主君を愛していないわけでは、けしてなかつたから。

五十両を包んだ和紙を懷に、西村屋を後にした。罪悪感はない。ただ使命感だけが胸をせいた。

あの爪痕のような月はどこにもない。

雲ひとつ無い朔の夜を駆け、吉原へと舞い戻る。

深い闇色に染まつた河岸を背後に、岡村屋の一階に飛び込む。

岡村屋の間取りは楼閣としては極めて典型的である。座敷に台所に風呂に便所に、一番奥に楼主の部屋。

不羈に、みどりは襖を開いた。楼主は女の上で腰を振つていた。淫らな腰使いをとめて、情けない格好で瞠目している。

「お姫さん、見世は一階にありますか」「知つてゐる。遊女を身請けしたい」

啞然とする楼主を尻目に、撫然と言い放つた。

「身請けには幾らかかる

「……遊女の年季に金十五両」

みどりは懐から百両を包んだ和紙を取り出し引き千切ると、十五両をばら撒いた。目に鮮やかな金色が飛散する。

小気味よい金の音に、楼主が恐る恐る一枚を手にして、噛んだ。本物の金だと定めると、反射的に十五両をかき集め始めた。

楼主に抱かれていた女はいつのまにやら着物を羽織つて、まじまじとみどりを注視し、何か言いたげにしている。

「なんだ」

睨みつけると、

「もしかしてあんた、 とらわまと聞こますかい」

「知つているのか」

訝しげに眉を顰めるみどりに、嬉々とした表情を見せると、女は部屋を飛び出した。

慌しく廊下を去ったと思いきや、今度は一階に上ったのか天井から埃が舞つほど物音をたてて、再び戻ってきた。  
その小脇に、お鈴を抱えて。

「……とらわま？」

お鈴は足元に散らばる小判など気に留めず、恬淡と呟いた。

「しつかりおし、お鈴ちゃん。あんたの好きな人が迎えに来たんじやないか！ ええそうだろう、田那さん」

破顔しながら女が目配せする。みどりは、強く頷いた。

「少し待つていて」

楼主人の首ねつこを掴んで、立たせる。

「主人よ。あと、幾ら必要なんだ」

「へえ、確か……、二十両」

もう一十両を、みどりは足元に投げやる。

「で、あんたを殴るのには一回で足りるだろ？」「へえ？」

最後の一両。それが畳に転がると同時に、みどりは楼主を力任せに殴った。楼主はばたりと腰を落とすと、その場に泡を吹いて気絶してしまった。

「あらあらあらー……やつちまつたね。まあひひほ向とかしておくれ」

女は口元を隠しながら楼主の傍に膝をつくと、お鈴に面を向けた。「短い間だったけど、楽しかったよ。身体には氣をつけるんだよ。みどりの旦那、どうかこの子を宜しくお願ひします」深々とみどりこ、頭を下げる。

みどりも頭を軽く下げる、手に残った十四両を懷に戻し、お鈴の手を握った。

女はそれを見て静かに微笑むと、楼主の腰巻に結ばれた鍵を取つて、錠前のついた箪笥から小さな紙を一枚取り、みどりに差し出した。

「これさえあれば、女も大門を通れます。四郎兵衛番所の男に見せなさい」「受け取つて、みどりは一寧にそれを懷へとしまつ。

「行こう」「でも……」  
みどりの言葉に、躊躇つお鈴。

「ほり、早く行きなさい。でないと楼主が起きつまつ

「すみません、姉さん」

「良いのよ。落ち着いたら遊びにおいでね」

そう言つて、女はふふふと笑つた。

みどりとお鈴は見世を後にし、手を繋ぎながら外へと向かつた。女のいつたとおりに紙を出し、大門を無事に通り抜ける。

見返り柳を過ぎ、一人して、堀に沿つて歩んだ。

月のない、提灯もない。他人のもつ灯や、家々から漏れる光を頼りに進む。薄暗い夜道だというのに心は晴れやかで、澄み切つている。

「いじらへんで、良いだろうか」

大川のたもと、漆黒の中に水の流れる音がする。船頭たちの、小節のきいた歌が花を添える。川の上にはいくつかの小舟があつて、螢のように泳いでいた。

暗闇に日が慣れてきて、土手の上に二人して腰を下ろす。そしてしばらく、穏やかに肩を並べて、大川を眺めていた。

「どちらさまの手は、温かい」

「お鈴の手が冷たすぎるから」

手と手を重ね合わせ、互いの温度を確かめる。しつとりと汗ばんだ手と、冷たく華奢な手と。まるで何年も何十年も寄り添つてきた夫婦のように、じつとそうしていた。

やがて、穏やかな時、柔らかな空気には身を委ねながら、閑話休題に話を切り出したのは、みどりだった。

「お鈴、俺は今、あと十四両を持ってる」

懐から小判を出して、みどりはお鈴へと傾けた。

「これで故郷に帰るんだ」

その言葉に押されてか、お鈴の寂しげな横顔に、涙のひと粟がと  
もつた。

お鈴には、みどりの言わんとしてこることが解かってしまったのだ  
ら。だからせつと、問いただした。

「どうして、どうしておいらにそんなことをなさるんですか」

「お鈴が好きだから。好きになつたことに、好きであることに、理  
由が必要?」

なんの濶みなく返される言葉に、お鈴はよつやくみどりへと回を  
直つた。そのままからは滂沱と、涙が流れ始めていた。

「やつでなくして。といひまは「これからどうなるんじす。それは、  
西村屋の田那様から盗んできたお金でしょ?。そんなことをなせつ  
たら、といひまは」

責めるように悔つてゐるよつて、お鈴はみどりの胸元に手のひらを押  
し付ける。

こつから、みどりの計画の結果に気付いていたのだ。彼女は  
しめやかな憤りに胸を焦がしているようだ。

「大丈夫だよ」

安心させるために、お鈴の背中に腕を回す。

「そんな酷いことにならないから」

しとやかに諭すみどり」、  
「といわま、おらは口べらしで売られたんですね」

お鈴は、打ち明け始めた。

「おらの故郷は貧しくて、食べるものがない。みんなして、ずっと  
ひもじい思いをして暮らしているんですね」

みどりは素直に、聞き入る。

「だから売られたとき、おらは死ななくて済んだと想つたもんです。  
そればっかりか、お腹いっぱい食べさせて貰えて、お話をかしても  
らえて」

割られた口は訥々と語る。

「お江戸の人は、優しいです。その中で、といわまが一番優しい。  
そんなといわまが、おらのせいで酷い目にあつのは、耐えられませ  
ん。

それにもう、といわまがいなければ、おらは生きていかれないと  
さえするんだよ」

静謐が一人を包む。お鈴はみどりの胸元に埋めていた顔をあげて、  
涙に潤う目を差し向けてた。

「後生です、といわま」

刹那の時、見詰め合つ。短い間が、一人にはまるで千秋にも感ぜ  
られる。いつしか、連れられぬほど恋慕の鎖は絡み合つ、一人を半  
身としていた。

「一緒に逃げてくれませんか。おうど一緒に、逃げてくれませんか

## 第三十六話「修羅の愛」

浅葱色の朝靄に光が差し込み始めた早朝、みどらはひとり、西村屋にいた。

お鈴と駆け落ちするのだと腹を決めた上で、彼がこのように戻つてきたのには、理由があった。金が足りないと、思ったのだ。

自分が今、手にしているのは十四両。これさえあればお鈴は国に帰れるだろう。

しかし一人で主人の田をくらまして逃げるとなると、話は違う。一体どれほどの金が必要になるのか、幼く、一人で生きたことのないみどらには検討もつかなかつた。

お鈴には、すぐに戻るから待つよつことだけ言つてきた。見世の者たちが眠つてゐるうちに金をとつて、早々と一人でどこかへ逃げるのだ。

幸い、見世はまだ冷たく、しんと静まり返つてゐる。

みどらはそつと、物音をたてないように足を滑らし、主人の寝室から再び鍵を盗み出した。注意をはらいながら、慎重に事を進める。金庫部屋の前にひざまずき、鍵穴に鍵を差し込んだ。金属の擦れる音さえ漏れないように手を添えて、ゆっくりと回す。回しきつてから、鉄格子の扉を開け、奥にある最後の鍵も解く。

圧迫感を持つた暗がりがみどらの前に現れる。

ここで踏みとどまれば、まだ引き返せるかもしれない。大川に残したお鈴を捨て、主人の寝室で眠りなおせば、折檻はされるだろう

が裕福な明日を迎えるだろつ。

少なくとも、年端もいかない若者同士での駆け落ちよりは遙かに苦労せずに済む。

激動にこのまま身を任せなのか。

答えは明白であつた。

紙に束ねられた小判の山、その中からひとつ摘んで、彼は懐へと忍ばせた。

これで完全に、主人を裏切つた。今日からは陰間ではなく、一人の男として女を愛し、守つていくのだ。

「お前は、馬鹿者だ」

何の前触れなく、重く沈んだ声がみどりの背骨を殴つた。血の気が、みるみる内に引いてゆく。振り向かなくとも、誰が背後に立っているかは瞭然だ。

身体が知つている。

「……旦那様」

「そこで何をしているんだ。それ以上、何をするつもりだ」

西村屋の旦那は、仮面のように固く冷たい表情で、みどりに問うた。酔つたように締まりのなく、蝶よ花よとみどりを溺愛するばかりだった中年男は、そこにはいなかつた。

「旦那様、俺は……」

「俺？」

ぴくりと、旦那が眉をあげる。

「わしのみどりは、もつと良こ子だらう」

調教された身体には重すぎる威圧。

旦那は面容を頑なにしたまま、みどりくとこじり寄る。両手を広げ、歯だけを見せる。

それが笑みだと分かつて、みどりは身の毛がよだつのを感じた。

「旦那様、み、みどりは……」

冷酷で禍禍しい所作で迫られ、身体の芯から凍える。

怖氣が走るところに、屈従してしまつ。隅々まで恐怖に躊躇される。強姦される。

「よしよし、そんなに震えるな。わしはそれほど怒つてはいない。賢いお前がそんなことをするものだから、驚いただけだ」

脛をたたいた手がみどりを掴み、恐ろしそ胸元へと弓を寄せる。

「可哀想なみどり。ただの氣の迷いだらう?」

「か、堪忍じす、旦那様、みどりは……」

懐柔されられてしまつ。

「やうだよ。お前は騙されているんだ」

「のまま抱かれてしまえば、みどりは旦那を籠絡せることが出来るだらう。旦那にひれ伏して股間のものをしゃぶりあげて股を広げて誘い込んで丸く慰めて絶え間ない肉欲に身を投じて。

情事の喜びが染み付いた身体が絶望に陥落する 。

が、寸でのところでお鈴の顔が過ぎた。  
途端に恐怖が晴れ、頭が冴える。

「旦那様」

「なんだい？」

「どこまでがあなたの策略ですか」

「なんのことかね」

旦那がみどらから身体を離して、破顔する。

口元は柔らかなのに、旦那は寒月のようだ。こうして人を、嵌めていくのだろうか。

「知つていて、手を回したのでしょうか」

どうして気付かなかつたのだろう。よくよく考えれば分かることだ。あんなにも繁盛していた料理屋が、夜逃げ同然に暖簾を外すわけがないのだ。

奉公人たちが借金の形に売られる先が吉原だなんて、切見世だなんて、出来すぎている。

「今頃か。お前はやつぱり、馬鹿者だな」

氣付くのが、あまりにも遅すぎた。

「だがまさか、お前が見世の金を盗もうとするなんて思わなかつた。女を抱くと無駄な度胸が生まれるな。やれやれ」

鬼蜘蛛のような男は、にたりとしながら、みどらの頬を両手で包んだ。

「馬鹿者だが、わしはお前が可愛くてたまらないのだよ」

「触るな」

みとらは俯き、呟いた。

「俺に触るな」

「みとら、お前は騙されているんだ。あの女は汚い。田舎育ちのおぼこに見えて、ああやつて男を丸め込んで骨抜きにするんだ。」

女郎が、今頃は吉原で男どもをくわえて、むせび泣いておるわ

卑劣な男の謀<sup>はがうじょ</sup>、まんまと食わされ、お鈴を吉原に売<sup>はせ</sup>りせてしまつた自分。

一本の残酷な線が繋がり、みとらは絶叫した。

「汚い手で俺に触るな！」

一気に旦那から距離をとり、勢いあまって小判の山にぶつかる。金の音が下品に響く。

よひめきながらも、みとらは更に叫んだ。

「あの人何を知っている！ 俺の何を知っているんだ！ お前なんか反吐が出る。反吐が出るんだ！」

咆哮をあげて、みとらは怒りのままに小判の山を振り払い、ひと掴みを旦那へと投げた。

ひるむ旦那に、

「死ねば良い、お前も俺も、死んでしまえば良い」

よたよたと歩み寄る。

「殺してやる、お前なんか殺してやる……。」

掴みかかると、みどらは床を蹴った。

激情に爆発した身体はもう止められなかつた。憎悪に満ちた手が

旦那の袂に触れ、握りこむ。

その時、風を切つて何かが一閃した。

「ひっ」

旦那が引きつった声をあげる。

その両手に小刀を認めながら、みどらは壁に背中を打ちつけた。

拍子に、懷に忍ばせていた小判が音を立てて床に落ちた。

「何を……」

疑問を口にした瞬間、血の雨が降つた。

視界が赤く染まつて、眩暈を覚える。床を血が濡らしているのを横目にして、それから、燃えるような熱が、激しい痛みが襲つた。

「あああああ……！」

裂帛に似た雄叫びが轟く。大きな零が足元に滴る。流血を抑える手は、傷の形をなぞらい、すぐに顔全体を覆う。

斬りつけられたのは、美貌。みどらがみどらであるための刻印。

「お前が、お前が悪いんだ……」

自分がしたことに慄く旦那の手から小刀がこぼれる。

しかし、みどらに逆襲する意思はなかつた。強烈な痛みと共に、全てが終焉なのだという達観が彼を貪り、憤怒も殺意も崩壊させる。

「お前が、お前が悪いんだ……」

真紅に眩む視界の中、みどりはその見苦しき披露を置き去りにして、一步を踏んだ。

思考は痛みによつて途切れている。朦朧としながら、ふらつく足へひづりを伸ばす。

「お前が悪いんだ……」

終わりを告げる声が鳴り響く中、みどりは向處ぞくと歩き出った。

## 第二十七話「命拾い」

混濁しきつた世界で、身体だけが鉛のように重たいと感じた。その感覚はそのうち不快感へと変化していき、全身の細やかな変化まで針のようにみどらを刺し始めた。

顔が痛い、背中が痛い、頭がかゆい、小便が出そうだ、ああ、腹も減つた……。

薄く開眼する。紗幕のような視界は、ゆっくりと鮮明になつていく。覚えのない天井が広がつていて。

「ここは……」

存外に弱弱しい声が出る。一体どれほど眠っていたのだろう。

「起きましたか」

聞いたことのない、気楽そうな男声。鈍った頭で

「起きた」とだけ応えてから、みどらは勢い良く上半身をあげた。

「誰だ！」

みどらが布団に寝かせられている座敷、その奥にある板敷きの部屋で、ちゃぶ台に本を広げる人物がいる。太つちょの髭もじやで、頭の髪は禿げかかりで崩れている。

「貴方こそ誰かと？」

「俺は……」

「どちらまー」

愛らしい声が響いて、お鈴が廊下から顔を出した。

「とひわまとひわまとひわまとひわまー。」

とひこちの膝元へと飛び込む。

「す……」

愛おしい人の名前を発しようとして、だが、激烈な痛みがそれを阻んだ。鼓動に合わせて松明を当てられているような痛み。頭を抱え込んで、みとうは呻いた。

「とひわま、あんまり触ると傷が開きます」

「せうだ。何針縫つたと思ひ。せうせうと寝れ、黙つて寝れ」

みとうの顔にはぐるぐると、布が巻かれていた。勘が正しければ、この男がやつたに違いない。縫つたとなると、

「蘭、学者？」

「机かじり虫と一緒にしないで頂きたい。私は蘭方医です」

むつつつと男は言い放つと、

「田村孝臣と申す。貴方様は西村みとうによろしいか」

みとうは素直に首肯など出来なかつた。西村の金を盗んで斬られてきた。もう西村の名を名乗るつもりではない。西村から貰つた名も名乗るつもりではない。

「……とひ」

「ただのとひか？」

「とひ……こち」

適当に結んでみる。お鈴は膝元でみとうを窺い、見つてくれたのだろう、こじりと蘭医に微笑んだ。

「はい、とらいち様です。ただのとらいち様ー。」

蘭医はしばし考へるよつに眉間に歪め、髪を引っ張る。そして軽く頷いた。

「よろしい、とらいち殿。なにか聞きたいことはあるかね」「俺はどうしてこの場所に？」

「大川に散歩へ行きました。血まみれで倒れているとらいち殿、そしてお鈴さんにお会いしました。急いでこの診療所に連れてきた次第です」

「そうか。……かたじけない。金を置いてすぐ出て行きます」

答えてみると、蘭医は俯瞰し長嘆息した。

「すまない、お鈴さん。とらいち殿と二人にしてくれないか」

お鈴が素直に立ち上がり、奥へと引っ込んでいく。どうしたことかと警戒していると、蘭医はちやぶ台を押して立ち上がり、座敷の敷居を踏んだ。

そして、

「お尋ねしますが、お金などござりますか」

聞いただされで、おもむろに懐をまさぐる。そこで、はたと気付いた。持つていない、と。金庫部屋での悶着によつて、ほぼしてしまつていた、と。

「訳ありでしょ。お金もなしで何処へ行くおつもりか知りませんが、若い二人の身空、一人は顔をぐるぐる巻きにしている男。目立つてしまふでしょ。」

責める病人に、蘭医は追い討ちをかけるよつて言葉を繋いだ。

蘭医の言つてゐる」とは正しい。今の状態は田立ちすゞめる。もし西村屋が追つ手を差し向けていたなら、まず、お鈴もりとも捕まつてしまつだらう。

察知したことを踏んでか、蘭医は口元を柔らかくあげた。

「じばらぐ、この診療所にいなさい。木は森に隠せとこゝでしょ。」  
なら人は、江戸に隠れてしまつた方が良い。下手に閑所周りをうろするよりは、見つからないと思つが

驚いた。なんてお人好しな医師だらう。  
絶句して、穴が開くかと思つほど凝視する。

蘭医は照れたように髪を引っ張ると、  
「食事や治療代については気にしなくていい。お鈴さんは家事を手伝ってくれているし、男の独り身、助かることが多い」

一言付け加え、

「私はそれなりに、信用がおける男だよ」

## 第二十八話「もつれ合つ傷」

どれほど長く昔話を聞いているだろつ。夜見世の殷賑が本格的に鎮まり始め、外からは冷氣が吹き付けてくる。

ひばりが寒さにぶるりと痙攣すると、とらいちが火鉢をひばりの膝元に押しやつた。

「そうして俺は、田村先生に出会つた」「ひばりは遠慮なく火鉢に手を当てる。

「とらいちに薬を売らせている人？」

「そうだ」

「診療所に、とらいちは住んでいるの」「ああ、根を張る予定はなかつたんだが。冬を越えたら診療所を出て行こうと思つていた」

「どうして、残つたの？」

「それは……」

再び、思い出す。あの頃の記憶を、あの頃の思いを。今へ通じる過去へと。

二人で逃げ出した季節を越えて、江戸には霜が下り始めていた。蘭医は診療所を運営しながら、蘭学を研究し、実践しているようだつた。ただの腹痛から牛痘まで診察する彼であつたが、扱う薬といえば漢方だつた。

元々、家が漢方医をしていたらしく、蘭学や西洋医学を書物で学

びながら、そこから漢方へ独学で共通項を探していた。

そのために、一階建ての彼の診療所の庭には、多くの薬草や漢方薬に使える木々が育てられていた。冬を前にして寂しげになつた庭を、手入れする役目をとらいたいちは『えられた。

かじかむ手で丹念に、草木に病氣がないか見回る。  
土は腐つていないか、水を撒いたほうが良いか、草木の量は足りているか。そんなことを書物片手に確かめていると、清涼な空気によつて心が穏やかになる。

とらいたいちはこの作業が好きだ。昔から学ぶことや働くことに喜びを感じる性分であつたが、植物について知識をつけるということは初めてのことだ。

植物は自然科学、そして西洋医学に繋がっていく。書庫に入ることを許されて、ますます好奇心は膨らんでいくばかり。

知識というものは一本の大樹のようなもので、どれほど興味をもつて知識を得ていても限りがない。

畠の上に広がる水溜りに、澄み切つた空の藍色が映りこんでいる。俯瞰してみると、自身の顔が映つた。

塞がり始めた傷は大きい。かさぶた瘻蓋の川は醜い赤茶に変色していて、なんの心積もりが無い者か見たら、あからさまに目を背けるに違いない。

布を払い、鏡を手にしたときの最初の衝撃は、身を裂くようなものだった。女々しく号泣し、情けなく躊躇される夜もあった。それが一月で、胸は痛むものの、少しは受け止められるようになった。知的な深淵はいつしか、陰間としての喪失感をも拭っていた。

春になればここを立ち去るだろ。それまでに、吸い込めるだけの知識を吸い込みたい。

ああでもきっと、この穏やかな気持ちは、学問による喜悦だけが起因したものではない。

「どうさま

家事がひと段落ついたのか、お鈴が小走りに診療所から出てきた。「もうお寒いのですから、あまり外に出ては毒です。先生も無理はするなと言つていたでしょ」

「ああ、そうだな」

とらいちの面容を見ても、お鈴の態度は変わらない。そればかりか、傷の心配をし、細やかに労わってくれる。とらいちといつ男の人生に付き合つてくれる。

一人で逃げ出してしまえば良いのに、彼女はけしてその道を選ばない。

そのことがどれほどの救済となつていいか、彼女は知つていいだらうか。伝わつていいだらうか。

踵を返すお鈴。

結い上げた髪、少しの乱れ髪が絡むつなじ。愛しくなつて、どちらはそつと、お鈴に手を翳した。

「や……」

途端に、お鈴が振り向き、勢いよく後ずさった。

「「」めん」

反射的に謝り、手を引っ込める。

お鈴は自身の両の手で身体を搔き抱きながら、じぼし呆然と、とらいちの所作を見据えた。

「どちらま……」

縮み上がるお鈴。その目に涙が薄く浮かんで、どちらこけは咄嗟に取り繕つた。

「気にするな。俺は何も傷ついていない

嘘だつた。それでもお鈴を安心させたかった。

「さあ、今日の晩御飯はなんだろ？。鈴の手料理は、美味しいからな」苦い感覺を噛み砕いて笑顔にする。お鈴はそれを見て、俄かに安堵し、再び診療所へと歩き出した。その背中は華奢で、少し痩せたよつな気がする。

とらいちが負つた傷は深い。しかしながら、女郎生活がお鈴に与えた傷はそれ以上に根深い。

彼女が吉原の切見世に売られてからというもの、一人はひとつになつたことがない。手を繋いだり、軽い抱擁をするのがやつて、女を感じさせる部分には触れたことがない。

「ねえ、どちらま

「なんだ」

「もし、鈴が病気になつたら、迷わずお捨てになつて  
時折、こんな寂しいことを、言つ。」

「じゃあ、俺が病気になつたら捨てる?」

「そんなこと、けして」

「なら、俺だつて同じだ。けして鈴を手放さないから、ずっと傍にいてくれ」

言葉に嘘はない。伝わってほしい。

お鈴はもう悲しい唇を閉ざしてしまつて、ただ肩だけ震わせて歩く。少し距離を置いて、とうとうもつてていく。

愛が変わらない自信はある。何度も何度も好きなように抱かれてきた身体がやつと見つけた憩いが、お鈴なのだ。他に愛を捧げようと思つ人物など、けして存在しえない。

例え、もう一人、吉原に売られた過去を持たない鈴が現れたとして、選びはしない。

ゆるぎなく、愛している。

だから、ただひたすら、お鈴が思いつめないよつと願つ。お鈴の心が自分の態度でもどうすることのないよつこと戒める。

どんなことがあらうともだけは離れはしないと、強く誓つていた。

とらいたちはいつの日か、診療所を離れ、一人で平穩に過ごしていくだらうと思つていた。

お鈴が心変わりをする口は来るかもしない、それでも、暫くは愛を紡いでいるだらうと考えていた。心を乱す変調などあるはずがないのだと。

……懐かしいお爺さん、今度のやうなものを、感じ取っていたところ。

## 第三十九話「誓い」

それは唐突にやつて來た。少なくともどちらには、唐突以外の何物でもなかつた。

雲の重たげな夜のこと、お鈴が高い熱を出した。

とらいちは桶に水を入れて、冷やした布を絞つて、布団に横たわるお鈴の額に置いた。苦しげで熱い吐息の匂いが部屋に充満している。

「先生、お鈴は大丈夫ですか」

お鈴の細腕から脈をとつてゐる蘭医に訊ねてみる。蘭医は渋い顔をして、溜息をくゆらせた。

「分からぬ。季節の変わり目であるし、ただの感冒かもしけない。お鈴、なにか覚えはないか」

お鈴は頬を赤くし、薄く汗をかいてゐる。荒れた声は苦しそうに、「先生と一緒に」と揺らめいた。

頷き、とらいちは一人、廊下へと出た。  
しんと冷えた床を踏みしめて、声の届かぬ場所へ出る。外には雪がちらついていた。

女特有の病氣かにかだらうか、お鈴には覚えがあるのかもしれない。月厄は思いもよらない状態を引き起こすといふ。

ぐるぐると黒い風車が腹で廻る。それに応じるように右往左往し

ていると、話を終えたのか、蘭医が襖を開ける音がした。目が合い、急いで駆け寄ると、より苦渋に染まつた顔が目に飛び込んだ。

「……とらこち、心して聞くんだ。何があつても、お鈴を責めるなよ」

鉛のよつな声色に、一瞬うろたえる。

「……はこ」

「約束できるか」

「はい」

一体どうこうことだらうか。それほどに重い病なのか。緊張しながら、覚悟を決めながら、とらこちは言葉を待つた。どんなことを言われても耐えられるように。

しかし、それら構えは簡単に打ち砕かれた。

「そうじく瘡毒そうじくだと、お鈴は言つてこむ」

身体が血の氣を失う。

「そんな」

瘡毒とは、男と女が身体をひとつとすることであつる病だ。十年のうち身体を蝕み、命を奪つていぐ。治ることは、ない。

強気な氣概は崩れ、悲壯のままにとらこちはその場に膝をついた。

「鳥屋についたとの由慢の客を、何人も相手にしたと。だから、なつたのだと」

「そんな馬鹿な」

ひざまづき、蒼白に眩くとらこち。だが、彼の中では、髣髴と浮

かぶ過去の事柄が是を記していく。思えば思つほぞ、そういえばとこゝとは、あつた。

何度か夜に求めたとき、彼女は静かに拒んだ。それは男に対する恐怖に寄るものだと言われ、納得していた。本当にそうだったのだろうか。

またいつぞやは、もし病気になつたら捨てて欲しいなどと言われた。恋における不安から口にしたものだと思っていた。やうでは、なかつたのだ。

お鈴は予兆を感じて、とらこちを思つて、行動していたのだ。

消沈するとらこちの肩に、蘭医が手を置いた。

「とらこち、よく聞くんだ」

そして更に耐え難い言葉を、放つた。

「お鈴と別れなさい」

耳を疑つ。とらこちは信じられなくて、啞然と、蘭医を見据えた。

「何を言つんですか」

「瘡毒は夜伽どうつる。聞くところによると、お鈴とお前の関係は純潔だつたと。いいか、お前はついつていられないんだ。お前は若いんだぞ」

「なにを!」

怒りが脳天を突く。衝動的に、とらこちは右の拳を上げた。

しかし天に掲げられた拳は落ちることはなく、ふるふると白く震えるだけだった。ひとつの思念が拳をどぎめたのだ。

「……お鈴が言つたんですか」

蘭医は何も答えない。それが眞実を結ぶ。とらいちは立ち上がりた。

「ならん」

止めに入る、蘭医。とらいちは緊迫する蘭医に向き直ると、「先生、大丈夫です。お鈴を責めません。酷い目に合わせません。だから、話をさせて下さい」

穢れのない誠実な瞳を傾けた。

ぐつと蘭医が言い淀み、腕の力を脱する。とらいちはそれを擦り抜けると、廊下を渡つて襖に手をかけた。

「お鈴、入るよ」

すうっと襖が開き、熱の匂いがとらいちを抱く。お鈴は廊下に背を向けていた。

「ずっと気付いていたんだね」

弱弱しい背中に投げかける問い。

「知つていて、懇情するのも拒んでいた。そつだろ」

一拍の間。お鈴は口を開きし続ける。ならば、

「俺は別れない」

「どちらま」

正直に繰り出すると、お鈴が小さく呻いた。憐れな後姿が、小刻みに震える。

「いけません、おらば」

「瘡毒だから? そんなことが理由になると?」

とらいちは一步を踏んだ。

「お鈴、俺は貴女にどれだけ救われたと思つ？」

尋ねながら、そつと布団の脇に座る。

「俺は愛を注がれて育つた。何人もの寵愛を受けて育つた。けれど、俺の魂まで愛してくれた人がいただろつか」

流暢にとらいたいとは語つた。ずっと思つていたことは、なんのじがらみもなく、とらいたいの唇を動かす。

「お前は、綺麗だった顔を怖いと言つてくれたね。俺はその言葉が悔しい反面、すごく、すごく嬉しかったんだ」

長々と話すことで顔に大きく出来た瘡蓋が少しかゆくなる。構わず、とらいたいは言い切つた。

「救われたんだ。意味がなく思えた日々に、貴女は一筋の光だった」

お鈴の背中を見て、その目はどうしても穏やかになる。強くなる。

「俺だつてそうだ。貴女の魂を愛したんだ。身体じゃない。病気がなんだ、俺が愛したのは魂だ。明るく笑い、魂を愛してくれるお鈴。こんな傷を負つた男を愛してくれるお鈴。貴女だ」

男の目を、真に注ぐ。

「俺は貴女に救われているんだよ、今も。変わりなく、救われ続けている」

とらいたいの視線の先、お鈴の震えは次第に大きくなつていった。そして嗚咽を噛み締めるような痙攣が。

「傲慢な男だと思つかもしない。でも俺は、貴女を愛してこの手をのばす。骨の大きくなり始めた手のひらで、布団を撫ぜる。」

「ねえ、鈴。こんな俺でよかつたら、振り向いてくれ。お鈴は振り向かなかつた。両の手で顔を覆つてゐるようだつた。わななき、号泣をひた隠し、咳く。」

「もつたいない。もつたないよ、とらさま。おらは汚いんだ。こんな女と一緒にいて、なんになるんです？」

「こんな時になつて、いじりじい。」

堪らなくなつて、とひこぢは布団」とお鈴を抱きしめた。

後ろから強く引き寄せ、

「汚くなんてない。とてもとも、綺麗だ」囁いた。

「熱が下がつたら、雪を見よう。春になつたら、桜を見よう。秋になつたら、枯れ木に山の賑わいだ。また冬になつたら、今度は温かいものを一緒に食べよ。……お前としたいことがまだ、沢山あるんだ。きっと、きっと何年かつても足りない。百年あつても足りそつになり」

夢を語る。口にはしていなかつたが、ずっと胸にあつた夢を。

「お前のために生きたいんだ。ねえ鈴、許してくれる?」  
お鈴は何も言わない。ただ、振り向いた。

潤んだ目には涙が、緩やかに絶え間なく流れている。

「ねえ鈴、笑つて  
柔らかな希求。

お鈴はよつやく頷くと、薄く、小さく、少し困ったよつて、微笑  
んだ。

## 第四十話「馴染み」

瘡毒は熱が収まると、暫くは落ち着く。

とらいちは頭を下げ、お鈴を見てもうつために診療所に住み込みで働くこととなつた。診療所の手伝いに加えて、薬を売つて回るよう言われた。

膝の悪い年よりの家や忙しい家々を回つて、薬箱に薬を補充し、とらいちを介して診察をする。暇があれば医学書と辞書を開く。そうしていろいろに、蘭医ほどではないが、とらいちにも医の心得のよつなものが出来てきた。

「こつもすまないねえ、とらさん」

常連様の玄関先、薬箱をつめ終わり、とらいちは腰を上げた。年老いた婆が見送りにと下駄を引っ掛けのを制して、

「無理するな、お婆」

「いやいや、悪いねえ、悪いねえ」  
掌を合わせられる。

いついつ風に感謝されるのはどうにも苦手だ。苦笑いで踵を返そうとするが、玄関口に佇む少年が目に入った。

鼻水を垂らし、睨むようにこちらを仰いでいる。

「」数年で、とらいちの背は劇的に伸びた。

匂いがないものや脂の少ないものという風に陰間として食事に気をつけることがなくなり、調子に乗つてお鈴の手料理を腹いっぱい食べているからかもしれない。筋肉も大分つてしまつている。

もう鏡で身体を調べるような習慣はないが、熊のよつた風体などではないかと思う。

顔の傷も加わって、すっかり恐ろしげな男なのだろう。

人は容姿で善し悪しを決める。

とらいちを見ただけで怯え、或いは絡んでくる。遠巻きに、まるで猛獸を見るような目を向けられる。

嫌われた経験がなくて少し苦労したものだ。  
だが最近では慣れてきた。こんな風に。

「がああー！」

とらいちが去り際に振り向き、両の手をあげると、

「あぎやああああー！」

悲鳴をあげて少年が尻餅をついた。

すぐさま這つて逃げ、老婆にすがりつく。  
老婆は腹を抱えながら、少年の頭を撫でた。

「お婆を大事にしりよ」

歯をにやりと見せて、家を出る。

薬を詰めた荷を担いで、長屋の並ぶ路地を進む。時折、江戸に響く鐘の音を頼りに、時間を推測した。

「早く終わつたな……」

水無月。梅雨があけて、そろそろ夏の賑わいだ。当然、日もまだ傾きそうにない。

「寄るか」

考えを巡らして、どちらちは歩を速めた。

蘭医の勧めで、どちらちは吉原にも薬を売り歩いていた。瘡毒は吉原に多い。必然的に、吉原には瘡毒に詳しい者が集つ。

医学はまず、情報収集だ。知識をもつて、症状から病を判断し、治癒を促す。

氣は向かなかつたが、お鈴のためになることならばと仕方なく通い始めた吉原も、もう慣れたものだ。

大門を通りて、吉原は大海屋の門をくぐつた。

「頼もう」

裏手から入ると、小さな禿を仁平が肩車であやしているところだつた。とらいちを見やつて、そろりと禿を下ろす。

「よひ、とりこち。久しぶりだな」

「ああ。三船はいるだらうか」

「残念だな。丁度出て行つたところだ。まあ、ゆづくつしていけよ。そのうち帰つてくるだらうから」

仁平の言葉に甘えて、荷を降ろしていくと、覗き込むような視線を感じた。見やると、仁平の足に隠れて禿が凝視している。

「あんまり見ると歯むかせ」

囁いてみると意外なことに、

「あい、すいません。お富士どす。よろしく」

丁寧に頭を下げられた。これには素直に感嘆する。

「驚いたな。小さこの度胸がある」

「つか佐のとこの禿だ。氣位がめっぽつ高いや」

けりけりと笑う仁平。と、そこに手が伸びてきて、仁平の耳をきゅうっと引張った。

「こりえ、こじててー！」

「つかの禿に変なこと教えるんじやないよ

尊をすればなんとやら、つか佐であった。風呂上りの濡れ髪を流して、どこか流麗である。着物の間から覗く谷間がいやせかだらしないが。

「」の間新造から上がったと思こあや、もう禿持ちか。おめでたいな

とらじこまつか佐に微笑んだ。つんとすます、つか佐。矜持のか、じうじむとらじこまほほ素つ氣無い。

「あ、お富士。行くよ

「へこ

つか佐はそう言つて、立ち去ろうと廊下へと足を滑らした。それを一目見て、とらじこまにある違和感が走った。

とか佐はそつと向かはれる冷ややかな目。全く物怖じせず、とらじこまは荷から薬袋を取り出して、ぽんと投げた。

つか佐は反射的にそれを受け取ると、

「なんの真似だい」

「足を捻つたんだろう。薬草だ、湿布にでも使え」

つか佐はひくつと眉の片方だけ動かすと、

「金はないよ」

「禿持ちになつた祝いだ、少ないがな。無理はするな。お前は身体が弱いんだから」

忌々しげに、むつとしながらも、つか佐は謙虚に薬袋を帯にしまじこみ、ぐるりと背を向けた。

歩き出すその足使いは至つてまともであるが、ほんの僅か、普段では見られない癖がある。足を庇つて歩いているのだ。

そのまま去るかと思こいや、つか佐はふいに立ち止まって、

「……ありがとつよ」

歎き、階段を上つていった。少しばかり、耳たぶを赤くして。

「天邪鬼、か

「はあ？」

「ヒツの話だ。ヒツの仁平」

「なんだよ」

「見世にくるのだから、遊女の足くらに見ておけ」

「あ、あんなの分かるかよ」

仁平は唇をひょいといよろしく突き出した。

とらじこちはそんな仁平に、玄関先に並べられた下駄のひとつを持つと、差し出した。裏側を晒して。

意味が分からず、仁平が眉をハ文字に曲げる。

「医学でもなんでもないがな、分かりやすいのに履物がある。履物ひとつ見ただけでも、人がなんの病を持っているか分かるぞ」

「下らねえ。粋じやないね。女々しく履物を見るなんてよ」

「そつか。いざれにしろ、お前は不寝番なんだ。惚れない程度に遊女を見とけ」

助言するといらっしゃて、仁平は腕を組み、にたにたと悦喜した。

「おあいにく様、この田じやあ見たくても見えねえ」

「今度、お前にも良いものを持ってくるよ。眼鏡といつて、役にたつ」

せりりと言葉を返すといらっしゃて、つこに臍を曲げたのか、仁平はふんと顔を逸らした。

「気取りやがつて。てめえの施しなんざ、誰が受けれるかよ」

その時、一度からりころりと下駄の音色が響いてきた。その足使いに、仁平がびくんと反応する。

「三船だ」

筋は良いんだがな……と、といらっしゃは唇だけあげた。

## 第四十話「馴染み」（後書き）

読んで頂き有難うございます。ケータイ小説を書いて二年くらいになりますが、短期間でこんなに書いているのは初めてです。これも評価や一言感想、ご投票下さる方のお陰です。

物語も後半ですが、最後まで楽しんで頂けるよう頑張ります！

### 【瘡毒】

瘡毒とは、梅毒のことです。

直接接觸、通常は性交により伝播される急性および慢性の感染症で、症状には四期あり、二期になると抗生素質でも治癒が出来なくなります。

鳥屋につくなどと言い、梅毒の女郎を抱くのは粹、一流だとされていた時代もあったそうです。なぜ鳥屋といったかと言つと、髪の毛が抜ける様子が鳥みたいだつたからのようで……。

それにもしても昔は不治の病だった梅毒をそんな風にいうなんて、昔の人は現代人と感覚が違います。

梅毒自体は、日本では江戸後期からよくみられるようになります。海外ではコロンブスが流行らしたなんて俗説があるそうですが、なんにせよ記録上はかなり新しい病のようです。

### 【走れない】

江戸時代以前の人は走れませんでした。手と足をばらばらに出すという行為、いわゆる“ねじり歩き”が出来なかつたため、富国強兵の折りには大変苦労したそうです。

走るという行為は飛脚などの急ぐことが仕事の人の特殊技能で、特に農民などは走ることが難しかつたといわれています。

お陰様で汗ばむ鳥籠は“走るシーン”が極端に少ない構成となつております（笑）。

## 第四十一話「忘却の轍」

とらこちとお鈴、極めて平穩な日々を送っていた。医学を知れば知るほど、触れれば触れるほど、治るかもしれないといつ薄い希望が木漏れ日のように心を照らす。  
しかし、それが希望を望む故に起る一種の盲目であることも感じていた。少しづつ痩れ、確実に何かは崩壊していた。

お鈴の全身に赤い点が浮かび、頭皮にまで回って髪が僅かに抜けた。

しばらぐして、顔面が山のようにでこぼこと膨らむ。ぶよぶよと、水疱とも違う異常な感触を持った出来物が身体の節々に出来る。骨も折れやすくなつた。

痛みに我慢強いお鈴も、この頃に入るとよく泣くようになった。とらいちは慰めたくて抱きしめる。  
そうしていると不思議と、これは現実ではないのではないかと呆けてしまつことが時折あつた。

こんな愛の結果を望んでいたのだろうかと、これは悪夢じみていやしないかと。

思い、その度に罪悪と後悔がとらこちの胸を責めやつた。それはお鈴といないいうちにも疼くようになり、まるで深く肉に埋もれてしまつた棘のようだった。

動くたびに、息をするたびに、棘は刺さる。ずく、ずくと。

意識をしなによつにしていたが身体のどこかは思い知つてゐる。

次第に理想と現実が、誓いと思いが乖離していつてはいるのだと。

「どうせんよ、なんだか人相が変わったね」

診療所で馴染みの患者にそつ言われて、とうこちは息を詰めた。

「どう、変わったうか」

「どうつて……なんだかなあ、前と少し違うねえ」

大工仕事をもう何十年と生業にしている頑固親父で、どちらかといふと喋るのが得意ではない患者は、口をへの字に曲げてそのまま噤いでしまった。

魚の骨が喉に引っかかったような感覚を飲み込みつつ、とうこちは玄関先で患者を見送り、診察室へと戻った。今日の昼間はもう、診察する患者は一人だけだ。先ほどの患者から手渡された礼金を蘭医に渡したら、お鈴の様子を見に行ける。

「よろしいですか

襖を隔てて向こう側へ声を投げると、一拍おいて

「よろしい」という返事がきた。

襖を開き、膝をついたまま部屋の敷居を越える。中では、女性患者が上半身だけ着衣をはだけていた。

浮き立つような白い肌が飛び込んできて、とうこちは少し田のやり場に困った。ほどよく肉のついた背中、そして斜め後ろから僅かに窺える乳房は大きく、はち切れんばかりにふくよかだ。

意識しなくとも、目に入ってしまう。

なるべく見ないようこと俯きつつ、早々と礼金を蘭医の傍に置いて、とらいちは診察室を出た。

心臓が妙に跳ねている。股間が僅かに熱っぽい。

自分はまだ二十を超えたばかりの若い男なのだ、仕方ないと思想つも、思うとやりきれない気持ちになる。意識してしまつと黙りだ、出したいたいという生理的な欲求が高まる。

お鈴とは何年も“して”いない。

「……馬鹿な」

とらいちは呟いた。

女にも性欲はある、辛いのはお鈴だって同じだ。なにを傲慢なことを思つているのだろう。一人で決めた道ではないのか。

急に悔しくなつて、とらいちは些<sup>少</sup>か乱暴に歩を進めた。

早くお鈴に会つて、声をかけて、そのまま薬売りに出よ<sup>う</sup>。やるべきことは沢山ある。身を投じていれば、なんともなくなる。

渡り廊下を早々と渡り、とらいちは庭先に出た。庭ではお鈴が、咲き誇る花々を愛でている。そして心を安らかにしているのだ。

「お鈴、仕事がひと段落ついたよ」

腰を軽く落としながら、顔花を指先でつゝく、愛しい後姿。とらいちはお鈴に大きく呼びかけた。

「はい？」

お鈴がゆつくつと振り向く。顔の半分は腫れがひいていて、少し機嫌が良さそうだ。

とらこちは嬉しくなって、今朝の話をじょいと口を開いた。

「おめえさん、誰だべが」  
が、声は喉に留まった。

「おうあ、お鈴だけんど、おめえさん……」

お鈴が首をかしげ、きよとんと濁みのない目を向ける。その嘘のない、純な瞳に、言葉に、とらこちは言葉を失った。

「俺は、お前の……、いや、貴女の……」

頭が混乱する。毎日毎日呑みしている顔を、自分が忘れるわけがない。間違いなく彼女はお鈴である。

しかし奇妙なことに、どのお鈴だらう、といふ感覚が浮かんだ。今日会ったお鈴なのか、数年前のお鈴なのか、お鈴の中にお鈴が重なる、遊離する。無数のお鈴が、とらこちの言葉を惑わせる。

身体の感覚が薄らいだ。まるで、田舎夢のよつじ。

「あんれ……？」

お鈴にも、なにかの違和感があったのか。彼女は開いた手の甲をおでこに当たると、眉を曇らせた。

「とひ、わま？」

そよ風が庭の草木をなぐる。ほんの少しの静寂に、戸惑いの顔。

病いに蝕まれて少し細く潰れている田が潤む。そして一筋、涙の線を描く。

ゆつくつと、頬を、顎を、流れて墮ちた。

「なんで……いやつ、いやあー。」

お鈴が絶叫し、庭の向こうへと走り出す。華奢な手を伸ばす。指の先には、鎌。

とらこちは寸でのところから抱き壓しかめた。お鈴の手から鎌がこぼれ、地面に突き刺さる。

「離して、離してくださいー。」

「落ち着くんだ鈴、落ち着くんだ」

「お願い離してえー！」

痩せ衰えた身体のどこからそんな力を、と思つほど、お鈴の力は強固であった。

とらこちは全力でお鈴を搔き抱き、なんとか鎌から引き離す。

「とらこまを忘れそうになつた、とらこまを、とらこまをー。」

とらこちの耳元で弾ける獣じみた悲鳴、咆哮といつても差し支えない。

鼓膜を悲痛な叫びが埋める。それでも制止する腕を緩めるわけにはいかない。

号泣が轟き、お鈴の口が大きく開く。

閉じられんとした刹那、とらいちが右の四指を差し入れる。噛み千切らんばかりの力と痛みが、とらいちの親指以外の指に襲いかか

つた。血が滴る。

お鈴は自害を阻まれた舌を懸命に動かし、小さく唸る。すすり泣く。

「お願いだ、死なないで。お願いだから」

とらいちは必死の思いでお鈴に囁きかけた。何度も何度も囁き、お鈴の背中を自由な左手で撫で擦する。

次第に、お鈴の荒い呼吸が納まり始めた。お鈴が激しく咳き込みながら頷くのを認め、とらいちは指をひき抜いた。

「どちらが……」

涙にまみれたお鈴の顔は、驚愕に固まっている。強い哀惜が弱る身体に食いつ前にと、とらいちはお鈴の顔を胸元へと寄せた。

「大丈夫、少し調子が悪かつただけだ」

伽藍とした慰め。無意味で、なんと無力なんだろう。

視線を落としてよく見やると、お鈴の着物には血が滲んでいた。とらいちの血ではない。

悶着した際に、弱つた腕の皮膚や背中の皮膚が破れたか、崩れてしまつたのだろう。障子紙などよりずっと、彼女の身体は脆いのだ。絶望はこんなにも進行していた。そのことが、とらいちをさいなむ。無駄な慰謝を繰り返しながら、二人抱き合い、愕然とする。か弱く震え続ける。

胸元に埋もる愛しい者の涙の、なんと熱いこと。そして冷たいこと。激情に翻弄されるお鈴は、小さく、とらいちに訴えた。

「殺していくだせー」

逼迫した懇願はとらいたちを強く穿つ。心が揺れる。だが、理が許さない。生きることの渇望にひれ伏す世界は、許してはくれない。

そして若い愛情もまた、それを超えるのは恐ろしい。

「殺して……殺して……」

切なる思いはとらいたちの内へと木霊し、深淵へと沈み込んでいく。また棘が増える。流すことの出来ない血の涙を生んで、心を赤く染め上げる。

鈴を宥めながら不意に思った。

ああそつだ。笑わなくなつたのだ、と。

## 第四十一話「崩壊」

お鈴の様子は日に日に悪くなる一方であった。

記憶が部分部分、抜け落ちていく。それが積もり積もって、まるで今というものを知らない人間にする。

家事も出来ない。ただ寝るか、彷徨うか。性格も変わつて、以前のお鈴からは考えられない言動をするようになつていた。

「おめえだれだあつ！」

とらいちを見るなり、お鈴はそつまご放つと、ふらふらと歩き回りつゝする。

「鈴、こっちだ」

「知らん、あべ」

まるで狐にでも憑かれたように、行動に一貫性がない。狐に疲れていたほうが、まだ良いかもしねれない。

思つて、戒める。看病できるのは自分しかいないのだから。

「鈴、そつちは外だ。危ない」

庭を越えよつとするお鈴の前に出て阻むと、お鈴はじりじりと油っぽい田玉でとらいちを射つた。そして小さくわななくと、咳をしながら、ううと泣いた。

「おらをこじめる、いじめるよお

とらいちの胸がぐつと痛む。心を穏やかにさせてやりたいが、お鈴を慰めることが出来ない。

頭を撫でたり、抱きすくめたり、それらの愛のある行為は、どちらを忘れたお鈴にとつて今、脅威になってしまって居る。

「おつかあ、おつかあはど」「お……」

むせび泣くお鈴に、眩暈を覚える。

彼女はこれからどうなつていくのだろう、自分はこれからどうなつていくのだろう。

どちらちは感心、田の前が曇つていくような気分になった。そう言えば、同じ何日も眠つていない。体力はすでに空になりつつある。  
無意識に過去のことを思い出す。お鈴と過ごした日々のこと、病気が発覚して誓いをたてた田のこと、お鈴の自害を抑えたこと。  
ただ沸々と浮かび上がり、どちらちは立ち尽くした。

「どちらこち殿……」

と、庭先から蘭医に声をかけられて、どちらちは診療所のほうを見やつた。そこには蘭医と、小脇に見知らぬ青年がいた。

「少し話がある。彼は蘭医の卵でね、ちょっと彼にお鈴さんを任せて、診療所のほうへ来てくれないか

「はい」

すれ違ひ様に青年を横田にする。彼は真意が汲み取れない仮面の笑みでどちらこちに会釈すると、お鈴のほうへと駆けていった。

早く話を済ませよ。どちらちは診療所に入ると、玄関先、蘭医が腰をかける前に立つ。

「話とは？」

と、いちから切り出され、蘭医は腕を組んで、眉間に皺を寄せた。あまり良い話題ではないらしい。多分、お鈴のことだらけ。

「单刀直入に言つ」

いつたん、深く呼吸をし、蘭医は言葉を継いだ。

「しばらく暇をやるから、お鈴さんと離れなさい」

耳を疑う。

「先生……、『冗談を』

「冗談ではないよ」

蘭医はきつぱりと言い切つた。

一緒にお鈴看病して来た者として、正氣の沙汰ではないと思つ。と、らいちは湧き上がる怒りを抑えつつ、「俺はそんなこと出来ない。それに俺がいなくなつたら、誰が鈴を看るんです。放つておけば、すぐにいなくなるの！」

「心配しないで頂きたい。離縁しろと言つてはいるのではない。間を置けと言つているのだ。知り合いの蘭医が、少し看たいそうだ。鈴のような症状を出す若い女性は珍しい。つてを回れば、多くの医者が看てくれる」

といひの追求にせりつと返す蘭医。あまりのことになると、といひちは蘭医に食つて掛かつた。

「そんな、鈴は見世物じゃない！」

「馬鹿者っ！」

弾き飛ぶ、一喝。蘭医は立ち上がり、とらこけに迫つた。

「ここのままでは共倒れだ、その事実をいゝ加減に受け止めるんだ」  
他人をねじ伏せる、強い語氣。とらこけは思わず口を開じた。青ざめ、屹立する。

「とらこけ殿だけではない。私とて、もう限界なのだ」

蘭医は俯き、唇を噛んでから、再びとらこけに向き直つた。

「辛いのは今だけだ。今でこそお鈴さんは外へ逃げ出さうと躍起になるが、そのうち歩けなくなる。

食事もあまり取らなくなり、ついには寝たきりになるだろう。やうなるまで人に預ければ、君も看病をしやすくなるんじゃないかな？」

「なんてことを、言つんだ」

「まだ言いたいことはある。貴方はお鈴さんが死ねば良いと思つたことはないか」

「それは……」

深く、蘭医の言葉がとらこけの心臓を抉つた。その言葉を否定するなど、とらこけには出来なかつた。

お鈴と対峙すればするほど、過去のことが思い出され、現実を搖り動かしている。それは後悔に酷似していて、耐え難い罪悪、不安となる。

もしお鈴を好きになつていなければと遠い過去の自分を非難し、なぜお鈴の自害を妨害したのかという今の自分を疑う。

その背後に、死を求める気持ちがなかつたといえはそれは嘘だ。

自分は、お鈴の死を望んでいる。

落石のように、隠していた事実が身体を押しつぶす。耐えられず、  
とらいたるは膝をついた。

「いいか。このままお鈴さんと一緒に居続けたら、とらいたる殿まで  
も狂う。もしかしたらとらいたる殿が、お鈴さんに手をかける日がく  
るかも知れないんだ」

蘭医が失意するとらいたるの肩に手を置く。とらいたるは我を失つて  
視線を地面に泳がし、頭を深く垂れた。

「先生、俺は……」

「仕方がないのだ、これは貴方のせいではない。仕方がないのだ」  
優しい声が軽々しく琴線に触れる。拒絶したいのに、癒されてしま  
う。そのことが悔しい。悔しくて堪らない。

とらいたるはその場に蹲り、頭を抱え込んだ。

そして人生というものの、その奈落の深さを呪つた。

## 第四十二話「ひばりとこゝう物」

その夜から、とうじちは診療所を出た。漆黒には爛々と月が輝き、じつとこゝうりを見下ろしている。まるで惨めな男を蔑むように。

何がいけなかつたのか。最初から恋など、しなければ良かつたのだろうか。

迷いは、かなたこなたへ揺ら揺ら動き、定まることはない。ただ幸せであろうと望んだだけだつた、そのことが仏も怒髪を晒すほど浅はかだつたのだろうか。

罰が下るべき人間は自分だけのはずだ。どうしてこんなことになつたのだろう。

せめて、お鈴の病氣を治すことが出来たなら。

大川を下つていいくと、港が広がつていた。暗忽として、水面すらはつきりとしない。ただ、水の流れる音がした。

果てのない大海原。人生が川ならば、死は海だろうか。海まで流れていけば、救われるだろうか。

一人で駆け落ちした夜に眺めた川は、こんな暗澹とした海に繋がつていた。

自嘲する。馬鹿馬鹿しい。なにが川か、海か。所詮は水の流れだ。そんなことを思い、お鈴が助かるものか。

「こゝの先には、ただの異国だ」

鼻で笑う。そしてふらふらと歩き出す、が。

「……異国」

暁灯のように、思案が差し込む。貫くような衝撃に痺れ、とうにちは両手で身体をかき抱いた。

「異国。異国……」

縋る藁はまだある。まだあつたではないか。  
蘭よりもっと先の医療を金で買えないか……」

女性のために異国に田を向けるなど狂恣だ。しかし困窮する今、それは何よりも素晴らしい考えに思えた。

金を貯めて、お鈴に今よりもっと良い医療を受けさせてやるのだ。時代はやがて変わるだろう。もしかしたら民衆でも海の外へと行ける日が来るかもしれない。

「金だ……金を集めんんだ」

そうだ、金を集める。お鈴の看病をしながらも大金を集めん。なにか、なにか良い方法がないだろうか。

悶々と知恵を巡らすうちに、とらいちが今まで培つてきた経験がひとつずつ奇策を弾き出した。

身分の低い、醜い男が金を掴むための甘美な夢物語。

狂わずに生きるために、一縷の望み。  
彼は決断し、北へと足を向けた。

桜の花びらの一枚が、格子窓の隙間を縫つて、火鉢の中へ舞い落ちる。

焦げ臭い匂いを放ちながら花びらは黒くくすんで、ただの灰と化

した。

ひばりは燃え尽きた花びらに視線を流し、自分で蠢く感情がなんなか惑っていた。心臓を抉り、内臓を翻弄する狂おしい熱。これは怒りなのか、それとも悲しみなのか。

「金になるとと思って、特に白子を探した。奥州まで行つて、よつやく金になつそうな子どもを見つけた。お前だ。お前で賭けをすれば、三船から楽に金を搾り取れるという算段だつた」

「わっちは……」  
「お前は、物だ」  
「そり」

ひばりは憮然と呟いた。

そうだ、自分は物なのだ。ひばりは、かつて吉原への道中で知ったことを、改めて思う。

ずっと物であり続けたのだ。とらいちが賭けをしているのは知っていたのだ。それがどうして、こんなにも苦しいのだひつ。

「俺の話はこれでおしまいだ。どうする。賭けを奪うかどうかはお

前次第だ」「どうして、こんなにも。

「賭けは……」

ひばりは心から言葉をこそぎ取る。

「わっちはただ、知りたかった。それだけのこと」  
口を動かしながら、まるで他人の意思のようだと思つ。どこか薄っぺらだ。

こんなにも五臓六腑に感情が渦巻いているのに、どうして素直に唇から出でていってはくれないのか。

壊れてしまわないようになると願つて、事実を求めた。しかし事実を知つた今、より壊れてしまいそうな自分がいる。

「ひばり」

とらいちが名を呼んだ。

「俺を殴りたいか」

ひばりは火鉢から、真っ直ぐ、とらいちを見やつた。

とらいちは凝り固まつたいつもの仏頂面で、両腕を広げる。まるで誰かを抱きしめようとするかのように、大きく。

「吉原に売ったことを怨むのならば、俺を殴れ。それでお前の気が済むのなら、殴れ。俺はお前には謝らん。気が済むまで怨め」

ひばりは口を閉めた。

自分でさえ戸惑つている感覚をこんなにも簡単に、とらいちは見透かすのだ。

怨みつらみを覺り知られて、ひばりは自分の中の熱が瞬く間に萎んでいくのを感じる。

とらいちが何をするでなくとも、自分はきっと死ぬか売られていただろう。流れ流され、辿り着いた先が吉原であつただけのことだ。とらいちを殴る腕など、どこにあるう。

「殴りんせん」

ひばりは言い切つた。

「最初から、物だと知つていたんだから」

感情のこもらない言葉が、風とともに去つていった。

## 第四十四話「生れるも死ぬも」

暗がりに姉新造の調べが遠くから聞こえる。膝を折つて正座をしつつ、その音だけ掬うようにしていると、間に割り入る声があつた。

「ひばり、一寸おいで」

行灯に浮かぶ金屏風、その奥でぐもる、つか佐の声色。

「あい、何でしよう」

ひばりは膝を滑らせ、屏風の脇へとつむ。そして横から、顔を覗かせた。

屏風を隔てた先には、布団の上で男とまぐわつか佐がいた。豊満な乳房や、ほつそりとした腹を差し出す。股間には男の頭がある。遊女の纖細な部分を舌で舐つているのだ。

「お冷を」

つか佐は男を片手で撫でながら、恍惚とした表情で艶然と微笑んだ。

「あい、お待ちなんせ」

ひばりもまた、微笑を返した。

かつては性交を覗き見、つか佐と目が合つたことで言葉を失つたものだ。しかしながら、一度目は心の乱れることはなかつた。

愛想笑いを生意氣だとでも思つたのか、つか佐は途端に唇を一文字に下げ、男の方へと視線を落とした。

ひばりは、お富士に後を任せつつ廊下へと出た。三日月が爛々と空で輝いている。夏の高い闇に、よく似合つて美しい。

佳月にしばし見瀉れてから、進む。夜見世の前に女中たちが用意した水がまだ残っているはずだ。階段を一階まで下りて、渡り廊下を歩く。

角を曲がり、そこで偶然、仁平とハ尋の姿が目に入った。  
庭先で岩に腰をかけ団扇を扇ぎつつ、談義と洒落込んでいたらしい。

「ひばりじやないか」

「氣付いて、ハ尋がぱっと顔をあげる。

「おひなじゅう」

ハ尋と会うのは、年の変わった啓蟄の頃以来ではないだろうか。西村屋の一件、あの夜から。随分と音沙汰がなかつたようだと思つ。

「おひ、ひばり聞いてやれ。こいつ見世を継ぐ羽田になつたらしいぞ。なんとあの兄貴、借金作りまわつて隠居に勘当されたらしい」

「仁平、下手なことは言わないでくれ……」

ハ尋は気まずそうに眉を下げた。

木下ハ尋。両替屋の次男坊である。彼と親しくなつたきつかけのひとつに、ある騒動があった。

売られて初めての夜、宴会の先で、彼の兄は遊女が来ないと当り散らしていた。そのとき、酷い訛りで大立ち回りをして、笑われたのだ。

あの頃の自分はなんて不羨だつたのだひ。今ならもう少し、見苦しいところなくあしらえるかもしれない。

「それよつ

ひばりがふにこ両のことを想い出しこれと、仁平が机から腰をあげた。

「思い出すせぬよつて悪いが、のこと、本当にすまなかつた。子どものよつな謝り方をしてしまつたね」

のこと、

河童の話だらう。

八尋はひばりに良い話をと、河童のことを調べていた。何故、ひばりの故郷の河童が赤いのか分からないと頭を捻つていて、その答えをひばりは教えた。

河童とは水子なんだと、ロベラじて川へと流された子どもなんだ

と。

彼はまだ、気にしていたのか。

「仁平が言つたように、あのあと、俺は兄の仕事を回されてなかなか家から出られなくてね。……謝りせてくれないか

「ええのに

この人はどれほど眞面目なのだろう。ひばりがきっと傷ついたままだと思つたのか。あしらつて誤魔化したのはひばりの方だというのに、ずっと考えていてくれたのか。

優しい、けれど、綺麗過ぎる。

「わつちは流れでここに来た河童みたいなもんぢんす。お気遣いな

く

自分は河童だ、自分は物なのだ。ひばりは既にそう達観している。情けをかけられるほどのものではない。割り切って接してくれれば良い。ひばりは思い、微笑んだ。

「そんなことを……」

しかし今度の仁平はあしらいに囚われず、酷く困惑したように首を左右に振った。

寂漠として、

「そんなことを言つてしまったら、生きているのも死んでいるのも同じではないか」

生きているのも死んでいるのも同じ。

ひばりは仁平の言霊がしんと自分の腹の中に納まるのを感じた。それはなんの淀みもなく心に浸透していく。

生きているのも死んでいるのも同じ。

いつだつたろうか、とらいちば恋をしても無駄だと言つた。

鳥籠では報われない。鳥は卵を産めても、その中には何もない。

そうだ、生きているのも死んでいるのも、ひばりにひとつ同じこと。何もないのだ。何もならない。無駄なのだ。全ては無駄なのだ。

泣いても何が変わるというわけではないよつに、熱い心を持つて

いても鳥籠では空虚に終わる。

ただ笑つてさえいればいい。心をなくして笑つてさえいれば、痛みも苦しみも最初からなかつた。あの人も、あの人も、あの人も。なんてことはない。

「失礼しんす。姉に頼れておりますんで。また今度」

ひばりは会話を断ち切るよつて会釈した。仁平が語れないよつて  
背中で拒む。

「ああ、また」

仁平の侘びし氣な言葉が、夜闇へと消えた。

## 第四十五話「ひばりとみどり」

「もう、夜見世が始まる頃合だな」人々のざわめきに耳をすませて、とういちが顔をあげた。

こつものよつて聲を間に面する、昼見世と夜見世の境の時間。ひばりは髪から手を離すと、すっと姿勢を正した。

「少しはまともになつたな」

「お陰様で」

やう返事をすると、とういちは腰をあげた。襖に寄り、手をかける。

「今日は日が終わるまで二船の部屋にいる。何かあつたら、来い」「あい」

ひばりが三つ指で深々と頭を下げる。あげる頃には、とういちはおらず、閉まりきった襖がどんと佇んでいた。

とういちの過去を知り、八尋の言葉を胸に納めてからとくもの、心は風のない湖畔のように静寂だ。心が壊れてしまつたように、とういちに触れられても感じない。

物だ、河童だと身体の底から悟ることで、本当に死んでしまつたかのように心は平穀だ。

最初から、こうすれば良かつたのだ。

ひとつだけ、深呼吸をする。

長持に琴を仕舞つて、ひばりは見世先へと向かつた。

今晚の座敷では、木下の若旦那が知人を連れてくるのだと聞いている。もう謝られることはないだろう。知人を連れてくる建前、ご隠居のようにつか佐の相手をするかもしない。

それならば少し、楽だ。

「ひばりちゃん、お疲れ様」

お富士が軽く手を振る。

「姉さんは？」

「今、簪を付け足してある。……来なんした」

流麗な足取りで、しずしずとつか佐がやつってきた。そのまま流れ違うように座敷へと向かう。その後を、お富士とついた。

「つか佐であります。よろしくお頼みしんす」

襖を開け、宴に入る。芸子姉さん方が三味線を鳴らし、小唄を口ずさんでいる。料理や酒に舌鼓をうちながら、それを楽しむ二人の男。

木下八尋、それに……、西村。

「西村様、お初にお目にかかります。つか佐と申しんす。可愛がつてくださいまし」

ひばりは記憶の糸を手繰つた。西村屋の旦那は菊乃屋の『常連のはずだ。どうしてこんなところにいるのか。

馴染みの客が別の見世に入つたら、つけ断り文という知らせが回る。他の見世に浮氣することは認められていない。帰り際の大門に新造たちが並んで、客を責める規定があるほどだ。

連れだといえ、馴染みの見世で肩身の狭い思いをすることは避けられない。けつたいなものである。

八尋は当然のことながら、つか佐の酌を求めた。『隠居がいないのだから、つか佐をたて、ひばりの相手をしないのは当然のことである。西村も同じよし、つか佐の酌を味わい、話に花を咲かせている。

だがその一方で、ちらつちらつと、ひばりは西村の視線を感じた。氣のせいだろうか。

疑問を浮かべつつも、ひばりは菫子への手拍子をし始めた。

「ひばりちゃん」

そつと、お富士が小さな声で耳打ちをしてきた。

「西村様を知つていらつしやるの」

「どうして」

「さつきから、ひばりちゃんを見ている」

ひばりの氣のせいではなかった。

そつと西村へと顔を向ける。真つ直ぐに視線を注いでいると、西村と目線が結ばれた。

西村の目は、魚のようだつた。黒々とぬめり、ずっとひばりだけに集中していたように、揺らぐことがない。正に凝視である。

どうすべきかと迷う前に、ひばりの身体はあしらいを選んだ。からくり人形よろしく、くくつと、頬が緩む。心のない傀儡じみた、しかし表面だけではいつも変わらぬ笑み。とらいちから学んだ、あしらい。

愛想よく会釈を加えて視線を別の果てへと流す。そして、ひばりは菫子への手拍子を再開した。

が、三拍も叩かぬつちに、手は空中で固まつた。

「似すぎて」

鬼の形相の西村が田の前にいた。脈が張り老いも深くなり始めた両手がひばりの手首を掘みあげている。それは紛おつことなく、男の力であった。

「お前は、似すぎて」

西村の奇行に、座敷が声を失う。三味線の音さえ止まり、痛いくらいの静けさが周囲を覆つ。

「あの田のみとら、あの田のみとら、あの田のみとら。何故お前に中に無数のみとらがいる」

「何を……」

「お前はみとらを知つていいだろ!」

罵声がひばりの頬を叩く。手首への力が膨れる。

「答える!」

手首に爪がめり込む。更に強く捻じられ、ひばりは呻いた。

「何をするんですか!」

慌てて八尋が仲裁に入る。引き剥がすべく間に身体」と出で、西村の手を握りこんだ。五指を割り込ませ、力づくでかかる。若い力が勝つて西村の手が離れた。

拍子にひばりが倒れこむ。八尋はひばりを庇つように前へ一步出て、両の手を突き出した。

「落ち着いて下さい」

「そこをどいてくれ」

血眼の西村。あきらかに狂氣の滲んだ様子で、彼はゆりと前へ踏み込む。周囲は逆に、緊迫して距離をとる。

「どうんだ、木下。わしが話したいのはその禿だ

「ならん！ 私はどかない！」

「どけ！」

西村がひばりに飛び掛る。寸でのといりでハ尋が西村の胸元を掴む。

西村が倒れこみ、間髪いれずハ尋を殴る。  
血反吐がぱつと畳に散る。

「やつ……田那様」

ひばりは青ざめ、竦みあがつた。

西村の強行は続く。口から血を垂らすハ尋の顔面にもう一発放つ  
と、じろじとひばりを睨み付けた。

「逃げるんだ……」

ハ尋が血の泡で口元を汚す。

しかしひばりはその場にしゃがみこむことしか出来なかつた。す  
つかり、腰が抜けていた。

「答える」

ゆりと立つ西村。

狂氣に染まつた面容は、底知れぬ恐ろしさをもつてひばりを張りつける。釘でも打たれたように、ひばりは動くことが出来ない。西村が近づいてくるといふのに。

全身が激しく震える。奥歯がわななき音をたてる。  
怖い、怖い怖い怖い。

「答える！」

西村が身体を突き出す。その腕が急激に伸び、ひばりに襲い掛かる。

ひばりは悲鳴をあげ、助けを呼んだ。  
真つ先に浮かんだ、あの名前を。

瞬間。

涙に潤んだひばりの視界が、時を失った。

泥のように現状がゆっくりと流れて、未来を捉えていく。  
襲いくる西村、恐れおののく芸子たち、青ざめる姉遊女、朋輩。  
重く閉ざされた襖、開かれて、飛び込む影。

西村の脇に駆け寄り、その腹を、蹴り上げる！

音が弾けた。

重い音が響き、西村が吹っ飛び、襖にぶつかる。激しい騒音をたてて襖がはずれ、西村が視界から消える。そして変わりに現れた影。

ひばりはもう一度、その名を口にした。

「どちらいち……つ

## 第四十六話「決着」

心がズブズブと熱に跳ねる。再び、堰をきつて溢れる。  
とらこち、とらこち。

「どうして来たの……」

ひばりは自分の田の前にたつ影を仰視した。  
「三船から聞いた。これは俺の問題だからな」

とらこちは、無愛想にそう言ひ放つと、ハ尋を抱きかかえ支えた。  
「大丈夫か」  
「貴方は？」  
ハ尋が鼻と口と流れ出る血を手で押さえながら、起き上がる。

「……巻き込んでもまない。ひばりを頼む」

とらこちの目は既に、襖を隔てた先にあった。  
そつとひばりの方へハ尋を導くと、後退する。外れた襖の向こう  
から、ずるずると、足を引きずつて西村が現れる。髪は乱れ、夜叉  
のような面持ちで、首を傾げている。

かつと見開かれた田、その田がしつかととらこちを捉え、色が、  
みるみるうちに歡喜へと染まる。

「おお……」

感嘆の声を漏らし、西村はぶるぶると身体を痙攣させた。

「お前は、お前はみとらかい？」

首を反らし、身体をざわざわ揺らし、喜びに浸る。顔をぐにゅ  
りと曲げる。

眉と頬を極限まであげ、田を細め、黄色くぬめつた歯を晒す。

「探したよ、ああ、酷いことをしたね。美しかった顔がこんな傷を負つて」

「俺はみどりではない」

「何を言つ。田に面影があるな。ああ、あんなに美しかったみどり。こんなに醜くなつてしまつて、あの女のせいだな」

「黙れ」

「とら一ちは語氣を強めた。しかし、

「臍を曲げているのかい。悪い女に捕まつて、可哀相に」

「黙るんだ」

「いりり、お前はそんな子じやないだり」

「とにかくその子はなんだい、みどりにそつくりで、まるでお前の子どものようじやないか。まさかあの女と子どもを作つたのか。そんなわけがないよなあ、あんな切見世で男に回された汚い女、お前が抱くはず」

刹那、べらべらとやまない唇に、とら一の右手が伸びた。大きい手のひらが頬を掴み、ぐいとあげる。

背の高いとら一と西村、必然的に、西村は後頭部を後ろに埋め、つま先を立てた。

「やめ、やめなさい……」

とら一の威圧の前に、西村の舌は止まらない。

「どうしたんだい、みどり。みどりはそんな子じやないだろ」

あんなに可愛くて、あんなに愛し合つたじゃないか。毎日、肌を重ねた仲じやないか。今でも思い出してしまつよ。お前の中は吸い付くよ'うで、果てても果てても欲は尽きなかつた。

「お前もわ'うだらう、あんなに鳴いて、わしに縋りついて」「変わらない屑だな」

と、こちらの長めの黒髪から、猛禽のよつた眼が光る。

怒りに燃えて大きな傷は歪み、こめかみに脈が浮き出る。

「自分の欲に忠実で、身体しか見ない。この下衆が、生める価値のない下郎が」

嫌悪と憎悪、そして殺意が進る。と、こちらは正に一匹の猛虎となつて、西村に牙を剥いていた。恐ろしきほどの緊迫が周囲に漂つ。

と、こちらの腕の筋肉が盛り上がり、血管が這つ。

「お前、お前はみと、じやないな……。お前は誰だ」

「ここに西村はと、じの氣迫に負けた。恐怖に身体を縮め、惨めに震ぐ。」

「みと、じはみんな子じやない。そんな子じやない」

西村の膝ががくがくと笑い、体制を崩す。

と、こちらはぐいっと、西村を片手で持ち上げた。空に浮く西村。押し付けられた口内が歯で傷ついたのか、舌が赤く染まつていぐ。血の混じった唾が飛散した。

「お前は誰だあ！」

「とらいちだ」

言い捨てる。冷語が座敷にしんと沈む。

途端に、西村はぐつたりと脱力した。

「そんな……、そんな……」

とらいちが手を離すと、西村は情けなく尻餅をついた。力の入らない膝を漸う立てて、なんとか四つんばいになる。

「わしのみとらは何処だ？ わしのみとら、可愛いみとら……」

「何言つてやがるんだ」

失意で赤ん坊のようになつた西村へ、とらいちは問つた。

「てめえがあの夜、小刀でぱつさりと斬つたのは誰だ。殺したのは誰だ」

淡々ととらいちは告ぐ。

「みとらは死んだ」

引きずる過去と決別するよつこ。

「てめえが、殺したんじやねえか

ひばりの心は囚われる、八尋の肩越し。

とらいちの輪郭は光に包まれ凜としていて、力強い。そして一方で、哀婉としていた。

ああ、さつととても傷ついている。

ひばりはそう思った。

つんととらいちの横顔が沁みて、視界は涙で霞みがかる。熱い、心臓が火を抱いたように熱い。

揺らめくひばりの世界で、とらいちだけが鮮明だ。そのとらいちは、はたと思い立ったように首をあげ、ひばりへと向いた。

「ひばり！」

駆け寄つてくる。八尋の隣に膝をつき、ひばりの肩に手をかけた。

「大丈夫か、怪我はないか」

右の手のひらで頭や頬や、そして赤く染まつた手首を撫でる。どこか懐かしい感覚、心の硬い部分を解してしまつ不思議な温もり。

いつだつてそうだ。とらいちの手は汗ばんでいて、だけど触れているのが気持ち良い。

ひばりは涙でつかる喉を懸命に絞つた。

「うん」

「そうか」

とらいちがゆっくりと頷く。とても穏やかな目、安らかであることを望む目。纖細で、過去といつ棘に傷つき続ける目。

「よかつた……」

そつと、安堵と共に伏せられる。

とらいちとこう主の温もりに緊張が薄らいだのか、ひばりの中に

よつやく恐怖ひじきものが湧いてきた。怯え、壇を出して泣いてしまつ。

激しい熱がぐるぐると皿まぐれしきばつを巡つてくる。皮膚の内側、あらぬところにしづつかる。

まるで肉体とこゝ狭い鳥籠の中、暴れる小鳥がいるよつ。羽をばら撒き、檻に身体を打ち、どこにもけなこと血を流すよつ。激しい叫びとなつて込み上げる、この気持ちは一体、何なのだろう?

こんな思い、必要がないよつ。  
ああ早く、凍つてしまえば良いよつ。

## 第四十七話「闇話」

西村の一件から、西村は大海屋と菊乃屋のふたつの見世からの締め出しどなつた。これから西村が吉原に足を踏み入れる」とはないだろり。

ハ尋もまた、西村の真意を知らなかつたとはいへ迂闊に連れとしで招いたことを反省し、しばらく見世から離れることとなつた。

といこちにつこては。

蒸し暑い夜、鈴虫の音色が楼閣を包んでいる。といこちとひばりは三船に呼ばれ、三船の部屋に座していた。

三船は床几に肘をひっかけながら、キセルをくむらせる。紫煙がふうっと、遠くの闇に消えた。

「今年は逆に、払つて貰うことになりそうだね」

氣だるそうな三船の物言こと、

「そうだな」

といこちもありなんと答えた。

「迷惑をかけた」

「まつたくだ。しばらく見世にも来ないでおくれ。

騒ぎが外に漏れて、うちは誤魔化すのにてんやわんやなんだ。噂に尾ひれがつくような危ないのは避けたい。騒ぎが鎮まつたら文でも出すよ」

「承知している」

「ひばりも、分かつたね。あんたはしばらくといこちに頼らずに修

練するんだ

ひばりとどちらちか、そしてどちらちかと西村。珍奇な関係はひとたび漏れたら江戸の好奇をさらってこくことだらう。間違いなく大海屋の矜持に大きな傷をつけた。

楼主として必然の対応だ。

「話は終わりだ」

三船は嘆息すると、鉢にキセルの灰を落とした。それを合図に、どちらちかは立ち上がる。

ひばりも倣おうとして、

「ひばりだけ、少し残つておくれ」

三船に止められ、姿勢を正した。

「ひばり」

去り際にどちらちかが一度振り返った。

「情のなよ」

素直に頷く。ぴしゃりと襖が閉められ、部屋にはひばりと三船だけが残された。

「さてつと……」

三船は鉢にキセルを引っ掛けると、適当に床几の上へ乗せる。それからすっと、真顔になおつた。ひばりは畏まって耳を傾ける。

「どちらちのことを、全て知つたんだろ？」「あー」「そうかい

おでこに手のひらを当てて、三船は惱ましげに眉間に揉んだ。それからじばりくして、熟考を終えたのか、ゆっくりと喋り始めた。

「今回のことばは、私も同罪だね。とらこちの昔を知つていて、西村の大旦那を通しちまつたんだからね。

浅はかだったよ。まさかあなたからとらこちの面影を見つけちまうとはね」

「三船おかあさんは、陰間だつた頃のとらこちを知つていたんでしょ？」

「ああ。不思議だね、あんたたちは顔がたち全く別なのに、どこか似ているんだ」

三船の視線が空を泳ぐ。遠く田を細めて、懐古に耽つているようだ。

「とらこちは湯島の天神とまで呼ばれていた。噂があんまり大げさに思えて見物に行つたのさ。

そしたら、怖いくらい綺麗な生き物がいた。男でも女でもなかつた……あれは魔性だね」

「魔性？」

なかなか耳慣れない単語が出て、ひばりは聞き返した。三船はふふふと微笑むと、頬に手首を押し付けた。

「まあ、昔のことさ。今は傷に仏頂面だけどね

「ぶつせりほうながら、どこか慈しみの隠れた声色である。とらいと大海屋の付き合いはそれなりに長い。馴染みとして想つところがあるのでう。

「三船おかあさん」

「なんだい」

「もしかして賭けをしたのは、どちらかのことを慮つて？」  
三船が僅かに微笑を固めた。それを誤魔化すように、視線をひばりから外す。

「別に、面白そうだったからさ」

強風が一陣、吹き抜けて格子窓を叩いた。鈴虫たちが警戒して羽音を静める。だがすぐに鈴虫は糸を切つて、再び歌い始めた。

「お前は、賭けをどう思つ?」

自然がもたらす妙なる歌を背に、三船が問う。

ひばりは間髪いれず答えた。

「まあ、わっちの外のことですか?」

「何も感じてはいないのかい」

「あい」

するりとひばりの唇を縫つていぐ返事。

三船は何か言いたげに口を薄く割ると……そのまま隣み、ふんと鼻を鳴らした。

「……なら、良いんだけどね」

## 第四十八話「轍の果て」

時は流れる。季節は押しやられる。

あれほど高かつた空も低く沈み、蒼にくすんだ灰色が混じるようになつていた。海から吹いてくる風は冷たさを増して、江戸の街に牡丹雪を降らせる。

人々の歩調は速くなり、その間をゆつくつと、火の用心の声がよく練り歩くようになった。

ぬかるんだ道に莫産が敷かれている。莫産の上を選んで着物を汚さないよう進み、季節の移り変わりを感じる。木々には緑が落ちて、枝が天に脈々と噛み付く。まるで空が鱗割れしているようだ。

仰いでいると、しばらく会つていないとある人物の顔が頭に浮かんだ。

いつも胸に棘を刺し、世の中の全てを悲觀するような仏頂面。大きな傷があつて、恐ろしげな風貌なのに、時折ひばりを見詰める目は纖細で穏やかだ。

西村の事件が招くかと思われた悪しき風評も三船の機転で振り払うことことが出来た。

そろそろ、彼がやつてくるだろう。

ひばりももう、十三だ。身体はまだまだ未熟だが、芸はだいぶ身についた。外ハ文字も習い始めた。

彼はなんと、言つだらう。

俯き、足を外ハ文字にくねらせる。踵から払い、外へ抉るよつにして滑らす、ハを描いて大きく進む。もう、転んだりはしない。

意氣込んでから、背を僅かにそらせ遠く一点を見つめ、しづ、しずとゆく。それは完璧に近い外ハ文字だつた。

しかし数歩進んだところで、足は鈍り、泥に濡つた藁の上に沈んだ。目だけが一点を捉えたまま、大きく開かれる。

「とらいち……」

視線の先に、ぼんやりと浮かぶ大柄な影。ひとじごみを縫つて歩く、長髪の男。

頑固そうな強面には傷があり、荒々しい印象を人に与える。そのくせ、目は微笑んでいる。

「元気にしていたか

いつもの通り、不遜な唇。

「今日から見世に?」

ひばりが訊ねると、とらいちはふんと首を振り、

「見世には行かん」

「そつ……。薬を売り来なんしたか」

仕事のことと思い出して納得しようとして、ひばりはとらいちが何の道具も持つていなかったことに気が付いた。

「とらいち……?」

怪訝を含ませ上田を使つと、とらいちはまだむづな面容で返

してきた。

「好きなように生きる」

似つかわしくない言葉に、ひばりは目を丸くする。

「え？」

問い合わせると、行き違いでどちらちは顔を上げた。眉間に皺を寄せた。ひばりは、はつと振り返った。

「ひばりー！」

離れた場所からこすりあへと、誰かが手を振り、大慌てで近づいてくる。月代が蒼っぽく、ふたつの丸い硝子が目を飾る。

「仁平」

「探しだぞー！」

「どうなさつた

「どうなさつたもこいつなさつたも、ねえ！」

顔を紅潮させ、と荒く呼吸を整えながら、仁平はひばりの手首を掴み、引っ張つた。

「ほほじやあ話せねえ。見世ん戻るぞー！」

勢いに圧倒されつつ、引きずりられるよつて仁平の後につべ。軽く肩越しに後ろを見やつたが、既にどちらちは何処にもいなかつた。まるで忍ぶ者のように、忽然と消えていた。

見世に戻ると、廊下でひそひそと女中たちが談話をしていた。ちらちらとひばりを窺つ。好奇と、どこか哀れむような表情に、ひばりは嫌な汗をかいた。

西村の騒動が、今頃になつて尾ひれを付け始めたのだろうか。

仁平は女中たちを氣にもとめず三船の部屋に行き、声もかけずに襖を開いた。中では三船と、つか佐が座っていた。

三船はまた渋い顔をしていた。それはまだ良い、驚いたのはつか佐の様子だ。

大海屋で一番の遊女としての矜持を背に、常々凜とした余裕を醸し出しているつか佐が、蒼白だった。

唇を軽く噛んでいる。今にも倒れてしまいそうな身体を精神で支え、なんとか正座しているように思える。酷く憐く、弱弱しい。こんなつか佐を、ひばりは見たことがない。

「来たね」

三船はさつと手を畳に添えた。導きに従つて、その場で膝を折る。

「ひばり、あんたにとつて良くない話だ」

「西村の田那の件ざんすか」

「違う」

三船の表情は強張っていた。困惑と動搖の色がはっきりと混じっている。

「もつと良くない話だ」

重苦しき空気が部屋を覆う。ひばりは緊張しながら三船の話を待つた。三船は言いにくそうに嘆息を一度繰り返してから、ゆっくりと、唇を開いた。

「どういちが人を殺した」

鈍痛。

何の前触れなく殴られたような衝撃がひばりを貫いた。瞬間に眩暈を覚える。背骨が氷柱に変わる。

「何、何を……」

激しい戦慄に襲われながら、ひばりは首を左右に振った。信じられない、信じられるはずがない。どうしてあの男が人を殺す理由があるのか。

まさか。

「お鈴という女を、知っているださう」

まさか……！

「剃刀で喉を切り裂いて、殺したそうだ」

心臓がひしゃげる。重圧にひばりは手をついた。苦しみに縮む五指に畳が噛み付く。両腕がわななき、上半身すら支えられなくなる。

「ひばり」

仁平が後ろからひばりの背中を擦る。

「な、んで……」

舌が痺れ、千切れる門訊。喉の奥が燃えるように熱く、萎んでいく。肺だけ溺れてしまつたように、苦しい。

「街の噂では、邪魔になつたとか。詳しくは分からぬが、病人を

殺したとあって、大騒動になつてゐるようだよ

「そんな……」

じゃあ、さつきとらいちが消えてしまったのは、そのためか。仁平に捕まると思って、早々に立ち去つたのだろうか。さつきの、とらいちからぬ言葉は、その意味は

体中が軋み、悲鳴をあげる。

とらいちが殺した、とらいちが人を、それもあの人を殺した。

ぐわんぐわんと叫びは轟き、身体のあらゆる部分を傷つける。頭が痛い。心臓が止まつてしまいそうだ。

ひばりは必死に、がたがたと泣く両腕を叱咤して地に伏せまいと堪えた。そうしていふうちに、ばたんという大きな音と共に畳が震えた。

「つか佐！」

なんとか顔をあげると、つか佐がばつたりと横に倒れていた。陶器人形のように唇まで血の氣を失い、目蓋を瞑っている。そのままから、つうつと涙がにじみ、一本の線を描いて畳の上に滴つた。

隠れた恋慕をとらいちに寄せていた、つか佐。その勝気な彼女の魂を、悲壯は引き裂いたのだ。しかし、

「つか佐姉さん……」

彼女は一方で、あの天女のように妖しい笑みを口元に浮かべていた。

## 第四十八話「轍の果て」（後書き）

いつも作品を読んでいただき、ありがとうございます。汗ばむ鳥籠ももうちょっとでお仕舞いです。そして春エロス2008も……、萤の光が脳内で響いている中、続きを今も書いています。たぶん、間に合つ、間に合わせます……！

ではでは。

四月十八日にメッセを下さった方へ  
やつぱりこちらのサブアドの調子が悪いようなので、後書きにて返信させていただきます。

お話も佳境の佳境、ああようやく佳境です。少ない語彙を絞りつつ、なんとか佳境が書けそうです。よろしければ、お付き合いください。

登場人物は、強くなつていっていますか？ 成長を本筋のテーマとはしていなかつたために、ちょっと不安だつたりします。ちゃんと、ひばりが大きくなつていると良いのですが。

完結まであとちょっと、実はまだラストは書いていません。今から書きます。どんな風になるか自分でもちょっと分からぬのですが、楽しんでいただけますよーに！

頑張ります！

## 第四十九話「恋」

つか佐が臥床してしまった。

事が事であつたので、冬終わりに身体を冷やしておひつた感冒として、三船の部屋でしばらく様子を見ることとなつた。

休み続けて一日、つか佐は更に熱を出したらしく、嘔吐世もなくなつた。

お富士と一人で、いつものように朝を起き、楼閣を掃除して回る。ひばりもまた、つか佐と同じように狼狽しきつてい。でも、身体を動かしている方が楽な気がして、いつもより多く掃いては、拭いた。

掃除する部分が綺麗になることで、磨耗しきつた心をなんとか繋ぐ。身体は羽のように軽いが、なんとか重心を保つていられた。

「ひばりちゃん、大丈夫かえ」

声をかけられて、少し身体が重くなる。

「ええ、お富士ちゃん。平氣」

「無理せんの。つか佐姉さんが倒れたんじや、どうせわっちら、今お座敷もないんだから。寝ていたつて、三船母さんは何も言わんしよう」

お座敷がない。そのことに、ひばりは改めて瞠目した。とらいちのことを考えてしまふだらうという恐怖が疼く。

ずっと働いていたら良い。布団などに入つたら、とらいちで頭が一杯になり、とても寝てはいられない。

昨晩は日蓋を閉じても閉じなくても同じで、時間をいくら数えても朝が来なかつた。そんな夜が、また来るのか。今晚は、耐えられるだらうか。

「ひばりちゃん」

暗鬱に田を瞬いていると、お富士がそっとひばりの頭を撫でた。

「今から、部屋の掃除じゃ。先に行つてちょうだい」

お富士が水桶をもつて反対へ駆けていく。

ひばりはお富士に従つて部屋に戻ると、雑巾で格子を丁寧に擦り始めた。何度も、何度も執拗に拭いていく。

格子窓の隙間から空風が吹き、ひばりのかじかんだ手を更に冷やす。感覚がなくなつても尚、ひばりは雑巾を格子に押し付けた。

「おまけどう」

明るい一聲とともに、お富士が襖を開けた。後ろ手にびしゃりと閉める。

片手には先ほど持つていた水桶のかわりに、市松絣の風呂敷包み

を握り締めていた。

「それは、何……？」

ひばりの問には答えず、お富士は屏風を開いて、その裏からひばりを手招いた。まるで忍ぶよつた所作に小首を傾げつつ、お富士の向かいに座る。

「何をなんすか」

「渡したい物がありんす

そういうて、お富士は風呂敷の結び田を解した。丁寧に開いたその中についたのは、着物であった。茶色にくすんだ、男物。

「仁平が前に捨てたやつ。頬かむりをしてこれを着て、草履を履いて手足を汚したら

……すっかり男になりんす。これで大門を通つたらええ」

訳が分からず、ひばりは畠然として、唇を手で覆つた。

「なんで……」

「とらいちに会いたいんでしょ」

「何を、何を言って」

ひばりは喘いで、なんとか内なる否定を探す。しかしその隙を与えず、お富士はひばりを直視した。漆黒の闇に一筋の光をたたえた、意志の強い瞳がひばりを射る。

「誤魔化しては駄目。」のままでは、ひばりちゃんはつか佐姉さん よりもっと、悪うなるよ

「何を」

「とらいちが、好きなんでしょ」

ぶすりと、言葉が突き刺す。

「好きで好きで、たまらないんでしょ」

「お富士ちゃん……、違う」

ひばりは顔を背け、お富士のひたむきな目から逃れよつとす。お富士はさつと、ひばりの頬に片手を添え、

「誤魔化さないで」

更に思いを注いだ。

「ひばりちゃんは、どうこかで、恋をしてる」

「違う！ わたしは恋と呼んで……！」

「違う」とありますせん！」

凛然としたお富士の両手が、紅潮するひばりの頬を強かに打つた。向き直り、ひばりはお富士の淀みない思いと対峙する。熱く、強く、搖るぎ無い霸氣。

「叶わぬ恋だと、ひばりちゃんは自分の田を潰していくだけじゃ。嫌われてしまつて恐れていますだけじゃ！」

お鈴さんのことを探して、心を開けただけじゃ、だけど

俄かにお富士の眉が曇る。それを打ち払つよつ、「お富士は小首を振つた。

「恋には抗えん。誰も恋には抗えんのよ、ひばりちゃん」

「……恋？」

「わ、恋じや」

恋といつ一文字が、ぐつとひばりの喉を押す。胸まで落ちてこき、腹の底を静かに焦がす。

次第にひばりは、自分の身体の中に湧き上がる熱を感じた。あの時の、耐え難い高温たち。

西村から救つてもらい、声をかけられた時の熱。

といちの過去を知りたいと願つた時の熱。

羅生門河岸でお鈴のことを知つた時の熱。

琴のお稽古で肌と肌が触れた時の熱。

恋を無駄だと言われた時のこと。

花魁道中に姿を見つけた時のこと。

怯えてしまって撫でられた時のこと。

あの時も、あの時も、あの時も。

そして。

初めて肌に触れられ、自分の価値を知ってしまった時のこと。

いつからか、いつの頃からか、自分はずっと恋をしていたのだ。  
飼うものと、飼われるものと、その関係が始まつた時から、深まつた時から、とらいたに惹かれていたのだ。

理屈も理由もなく、道理も義理もなく、惹かれていた。  
思ひ、感じ、誓い、願い、恐れ、望み、探し、隠し、壊し……、  
ずつとずつと、恋をしていたのだ。

「わっちは、わっちは……」

溢れる熱に翻弄されるひばりの身体を、お富士は抱きしめた。そしてそつと、耳元に唇を寄せた。

「ひばりちゃん、ええかい。わっちら、まだ引っ込み禿でしょう。  
朝から御昼間までは、掃除だ稽古だと姉さん方より慌しい。それに今は、つか佐姉さんが寝込んでる。

今なら、わっちは残つてひばりちゃんの分動けば、なんとか一日くらこは見世の田を欺ける」

お富士の囁きが深く漫透し、ひばりは目眩んだ。しかし、すぐそれま我に返る。

「駄目！ そんなの駄目！」

吉原での足抜けは禁物だ。もちろん、その手助けをした者もただでは済まされない。

記憶が、一年前に見た折檻を手繰る。縄で逆さづつにされ、針を押し付けられた美佐。三船が心の傷をそうして癒していく今より過剰だったとはいえ、足抜けが激しい罰則を「えられる罪」であること変わりはない。

「お富士ちゃん、分かっててるの？ そんなことをしたら、そんな」としたら……」

「大丈夫じゃ」

「いけん！ 朋輩だからといつて、お富士ちゃんがそんなことまでする義理はありんせん！」

ひばりは叱りつけようつてお富士の胸を叩いた。勢いがあまつて、お富士が後ろに押され、手をつぶ。熱っぽい吐息が互いの頬をなぶつた。

「朋輩だからではないの」

畠に足を崩し、両の手を後ろに、頭を垂れて、お富士は呟いた。

「朋輩だからでは、ないのよ」

その声は、くぐもる。

「ひばりちゃん、あのね」

少し乱れた前髪の間から光が一粒離れ、お富士の襟に小さな水たまりをつくる。骨が落ちるような音が聞こえた気がした。

「わっちゃん、恋をしてるの」

お富士が顔を上げる。

「叶わぬ恋を、ずっとしているから……」

潤んだ田舎、ひばりに向けられていた。じつと、ひばりに。

「お富士ちゃん……」

雷撃のような確信が、ひばりに流れた。思わず唇を手のひらで押さえる。

過ぎ去った夜、柔らかで悪戯な感触が思い出されて、ひばりは動搖した。そして滂沱と、涙が流れた。

思いは高い音をたてて弾ける。

「…………ごめん。お富士ちゃん、ごめん」

ひばりは畳に手を置いて、深々と頭を下げた。それから熱と涙の絡む喉を懸命に絞った。

「出来ん、わっちゃんには、出来んよお……」

深く深く詫び入る。弱さに負けて、痛みに負けて、ずっと見ないふりをしていた。聞こえないふりをしていた。多くのことを、知らないふりをした。

穏やかなあの田舎が、本当は自分を透かして通り過ぎ、違うものを

見ていたから。気付いていたから、知つてしまつたから。

「でも、好きだ。本当は、本当はずつと、ずつと好きだった。ずつ  
とずつと言つたくて仕方がなかつた」

号泣し悔いるひばりに、お富士の温もりが被さる。熱いものが後  
から後から込み上げて重なり、一人をくるむ。

「お富士ちゃん、お富士ちゃん。会いたい、会いたいけど、出来な  
いよ……」

泣く。

「会いたいよ……」

## 第五十話「眞実」

連日泣きすぎて目が腫れぼつたく、疼痛がある。

昨晩は赤ん坊のようにまた泣いて、お富士に背中を撫でてもらい、よつよつ眠りについた。

途切れ途切れ、水に濡れた薄紙のような淡い夢でも安寧をもたらす吉時である。軽い倦怠感はあるものの、少しは体力が回復した。胸の熱はまだ温度を保ったまま渦を巻いているが。

「あ、いたい」

と、仁平に呼び止められた。仁平は軽快に廊下を渡り、ひばりの前にでんと立つと、指で膨れた目を突いた。

「ひでえな、後で水風船でも当ててやるつか」「なんざんしょ」

不躊躇仁平の所作を適当にあしらひ。すると仁平は、「客が来てんだ。裏に回つてみろ」と裏を指差した。

自分に客など、珍しい。誰だろうと裏へと回つてみると、裏庭で椅子に腰掛ける一人の男が目に入った。

どっしづとして貴祿のある、髭の長い初老の男だ。小奇麗な服を纏い、形良い頭を丸めている様は、重鎮の雰囲気を放っている。

しかしながら腰をかける椅子が小さすぎて、どこか諧謔の風も呈していた。

「こたにちはあ、ひばりさんす」

「これは、可愛らしいお嬢さんだ」

男は腰をあげ、頭を下げる。

「お初にお目にかかる。田村孝臣と申す」

覚えのある名だった。確か、

「田村……先生」

「私を知っているのかね」

「とらいち殿から話を」

「そうか。とらいち殿が……」

腕を組み、遠い目をする男。この男がとらいちの心の師ともいえる人物、蘭方医、田村孝臣その人なのか。

ひばりが想像していた人物はもっと小柄で、賢しそうな老人であった。しかしながら蘭医の図体は想像を凌駕し、でかい。

とらいちとびちらが高いだろうと田で測つて、心が沈んだ。

人前で泣くわけにはいかず、ぐつと田元に氣力を注ぐ。ただでさえ、唇のように腫れた見苦しい目で出ているのだ。例え不安定な心であつても、泣くわけにはいかない。

「座つてください」

促され、ひばりは蘭医と相対するように椅子へと腰を下ろした。

蘭医はまじまじとひばりを見やつてから軽く頷くと、早々と本題に入る。

「今日は貴女に話があつて参りました。……とらいち殿のことです

緊張が走る。ひばりは大きく開眼し、深く吸氣を胸に納めてから、相槌をうつた。

蘭医はにこりと笑うと、

「とらいち殿は、人を殺めてはおりません」

驚愕の一言から、口火を切った。

「これは五日ほど前のことです。とらいち殿に祝言をあげてはいいな  
いが、思い人がいたことをご存知ですか」

「……あい」

「世間ではその方を、別れ話のもつれで殺めたなどと噂しております」

下世話な風評。

「ですが、その思い人は、病に伏せておりました。不治のもので、  
毎日横たわり、死を前にしていた。彼女は動けなかつた……、喋る  
ことも出来ませぬ」

ひばりは胸が切り裂かれるような痛みを感じた。とらいちの愛し  
た人の容態は、そんなにも悪くなつていたのだ。

蘭医は続ける。

「別れ話など、ただの噂です。真相は全く違う」

首を大きく、がえんじた。

「昨晩、とらいち殿の代理として時折、思い人の看病をしている者  
が白状してくれました。

彼は彼女の口ひげが伸びていたことに気がついて、剃刀を彼女の  
枕元に置いたそうです。そこではたと、忘れ物を思い出しても、席を

外したのだと

柔らかな声は次第に、重みを増す。

「彼女が動けるはずないと、彼は思っていた。私も聞いたときは驚きました」

悔悟するよつこ、瞑田する。短く、年のせいでもばらになつた睫毛が微動する。蘭医はそうして沈黙してから、再び口を開いた。

「寝室に戻つてみると、彼女が自分の手で、剃刀を喉に当てていたそうです。刃は既に深々と刺さり、彼女の周りは血の海だった。しかし、まだ彼女は生きていた」

首を押されて、

「弱つた彼女の身体は、完全な自害を併せてはくれなかつたのだろう」

吐露するよつこ。

「血の泡を吹いて、彼女は息をしていた。

息をするたびに首の傷から息が漏れ出て、苦悶の表情で、彼女は生きていた。

あまりのことに、彼は絶叫したそうです。その声を聞いて、とらいち殿が飛び込んできた。

そして彼女を見て、……全てを理解した

蘭医から聞く、事実。ひばりの中で風評が立ち消え、違和感が崩れた。と同時に、悲哀が募る。

「どちらいち殿を駆け寄ると、彼女が持つ剃刀を一気に喉に押し当てたそうです」

「うう、とうにちは。

「介錯だ、介錯をとうにち殿はしたのだ。どんな思いで刃を押し当てたのか……」

声を絞りきり、

「とうにち殿はそれから、息絶えたお鈴殿をつれて忽然と消えた」  
蘭医は天へと喉を反らせた。

「看病人はそれを利用し自分の罪から逃れんと、とうにち殿を貶める嘘をついたのです」

田村孝臣、彼の中にあるのは、後悔。防ごうとしたことを防ぐことが出来なかつた己の無力を。

「申し訳ない。真に、申し訳ないことをしました」

蘭医はひとしきり仰ぐと、今度は深くうなだれた。

「とうにち殿は人を殺めておりませぬ。彼はそのような人間ではない。信じていただけないかもしねないが……」

「いいえ」

ひばりは間髪入れず答えた。

「眞実を教えてください、有難うござります。わっちは信じます。とうにちを、知っていますから」

知つている。ひばりの知つているとうにちは、ただの色恋沙汰で思ひ人を殺める人間ではない。けしてそんな人間ではないから、ひばりは好きになつたのだ。

それはひばりの、紛れもない誇りのひとつ。

蘭医はひばりのせっぱつとした返事に目を瞬くと、ふと細めた。  
「今日せ、このことを伝える他に、もひとつ用があつて来たので  
す」

そうことわつて、蘭医は椅子の脇に置いていた袋を両手にとりて、  
ひばりに差し出した。

「と、りいち殿の部屋から見つけました。この見世の名と、あなたの  
名がある。重たいですよ」

言葉の通り、達筆に名が刻まれている。と、りいちの字だ。

素直に受け取ると、ひばりの腕に思いもよらない重さがかかつた。  
ひばりのようにと持ち上げると、鉄と鉄が噛み合う音が軽やかに響  
いた。その独特の、誰もが吸い込まれてしまつような音にひばりは  
驚き、蘭医の顔を見やる。

「彼は、この見世の楼主と賭けをしていたそうですが、……  
まさか。

「彼は一枚も手につけていませんでした。これは、貴女に返せつ  
「頂けません!」

反射的に返すと、

「私はもつと、頂けぬ人間だよ。貴女がいらぬなら、楼主にでも渡  
せば良い」

蘭医はゆつくつと立ち上がった。丁重に丸まつた頭を下げる。

「さて、私は用があります故、これにて失礼します。なにかあつた  
ら、つでもお呼び下れ。では……」

胸元を引つ張り正して、蘭医は玄関先へと足を伸ばした。去り際  
に、思い出したように振り返る。

「やうやう、もうひとつ」

一本の指を虚空へ突き出して、

「貴女の出身は、何処ですか」

「……奥州です」

ひばりは布袋をしつかと抱きながら、故郷の名を口にした。

「そうか、奥州。どうで、めんこ」

意図の捕れない蘭医の言葉に首を傾げる。

「いえいえ。奥州にも白子がいるとせ、と思いまして  
そういう意味か。了解して、ひばりは朗々と綴った。

「白子は北にあること、どちらいちが申しておりました  
「はて……」

ひばりの返答に、蘭医が鬚を引つ張る。

「白子は探しは江戸にもありますが」

不可解なことを而て残すと、

「では、失礼」

会釈し、蘭医はくるつと背中を見せた。

## 第五十一話「炎上」

「とらいちがこの金をね……」

畠の上に広げられた布袋、口からはみ出た一両小判を一枚摘むと、三船はふうと溜息をついた。

蘭医からとらいちが残した金を受け取つてすぐ、ひばりは部屋で帳簿を観覧していた三船のところへ来て、ひとの経緯を語つた。

「全く、お前もよく馬鹿正直に持つてきただよ。とらいちも蘭医も、お前も、よくやるよ」

「わっちが持つていても、仕方ありんせん。盗人扱いでもされたら、大変ぞんしょ！」

「こんな大金、どうしてしまおうね。これだけあつたら、お前はお前を身請けできやうだよ」

とらいちが残した金は、ひばりでやつた賭けで儲けたものより幾分多いものだつた。間違いなく、薬売りなどをして稼いだ金も混じつてゐる。お鈴を救うために何年もかけてこつこつと貯めたものだらう。

「とらいちはまた、なんでお前にこんな大金を残したんだろうね」

分からるのは、ひばりの方である。しかしながら、お鈴が死んでしまつた今、彼にとつてこの金は無意味な代物なのだろう。

死体を抱いて逃げ去るという奇行をした彼の罪が、まつたらしく白く晴れることは恐らく無い。

「とらいちは、本当に馬鹿者だ」

三船はぼつんと呟いた。その声色は懸念を孕んで、小さく震えている。何を想つたのか、三船は寂寥に満ちた目をつゝとひばりに向けた。

「あんたには、言つていないことがある」

三船の眉根は厳しく、冷たい。ひばりは背筋を張つて、言葉を待つた。

三船の唇が、

「心中死体が……」

思いもよらない話を紡ぐ。

「三日ほど前から、大川に男女の心中死体が浮かんでいる。

……一人は小さい女、一人は」

暫時をおき、

「……顔に傷がある大柄の男だと」

三日、前？

ひばりの中で、最後にとらいちと会つた時が飛散する。いつもと変わらぬ、苦虫を噛んだような顔。そのくせ纖細で、愛に満ちた目で、彼はなんと言つたろう。

好きなように、生きる。

三日前。とらいちがお鈴の遺体をつれて失踪したのが四日前。三日前、彼は“一人”で忽然とやってきて、忽然と“消えた”。

身体を突き崩す衝動。目の前が白む。とらいちが人を殺したと訊いたときより遙かに激しい眩暈と痺れが花火のように散り、五臓六腑を炎る。そのくせ、手足は凍り付いてしまったように冷たく、汗ばんだ。

「とら……いち……」

ひばりを震撼させる恐ろしい確信。喪失感に打ちのめされ、朦朧と、ひばりは畳に肘をついた。もう終わりだ……。

頑張ることがもう出来ない。生きるも死ぬも同じだと心が泣き叫んでいる。

何も、したく、ない。

ひばりがついに絶望へと墜落する、その瞬間、重厚な鐘の音が、『ごんごん』と腹に響いた。

「なんだい？」

三船が真っ先に反応する。鐘の音は吉原中に轟いているようだった。

分厚い鉄が木で殴られ、罵声を放ち続ける音。江戸に生きる者ならば誰もが心から怯える、地獄からの共振である。

「なんてこった……」

その意味を成すところ、全てを灰燼と帰する。

四方八方を駆け回る足音。鐘の音を背に、吉原のありとあらゆる建物が人の波によつて喧騒の塊となる。

しばし呆然とする三船、ひばりのもとに、人一倍大きな足音が近づいてきた。

「三船！ てえへんだ、火事だ！ 京町二丁目、瑞乃屋だ！」  
勢いよく、襖を引いたのは仁平であった。

火事！

一言で三船は畳を蹴つて、格子窓を大きく開け放った。楼閣の外廊下を右往左往する見世のものをぐるりと見渡し、「なんてこつたい、今日は客の入りが多いんだよ。密はどうしたんだい！」

「今、逃がしに回ってる。他の見世もだ。遊女に禿も順に出た」

「風は？」

「強い。見事な空つ風、羅生門の方からぐるりと回りそうだ。早いぞ。大海屋まで来る。小火じや あすまねえな」

三船は片掌を眉間に押し当て、息を吸い、吐いた。

江戸の多くの場所がそつだが、吉原もまた限られた区画をぎつしりと埋めている。楼閣やら茶屋やら小料理屋が、殆ど間なく立ち並んでいるのだ。

火がつくと、どんどん燃え移る。周囲を突き崩して回らぬようにと火消しらが奔走するが、こんな乾燥しきつた仲陽では無情にも大きく広がるであろうことは間違いない。

おはぐろじぶが三十尺と広い堀であることから、火の手が吉原を超えることは殆どない。

しかし逆にいうならば、火の手は堀を背として一気に食らいつくということだ。吉原は四角い朱色の箱となつて隅々まで燃えることだろう。

「……地震以来か。ああ、なんてこつたい、なんてこつたい」

三船はそうして、ひとしきり混乱を撒き散らしてから、せつと天井を睥睨し、背を凜と伸ばした。

「ひばり」

「三船おかあわん」

突然の出来事に怯懦と座り込むひばりの両腕をもって、三船はぐいと立ち上がらせた。ひばりは小刻みに震えてやまない足をなんとか棒のようにして、身体を支える。

「いいかい、ひばり。お前もさつわと出るんだ。私は楼主として残つてやることがある。金だ着物だなんだのは、奉公人たちでやるから、お前は身ひとつで、姉さんたちについて逃げるんだよ」

三船はぐつとひばりを抱擁し、優しく言いつける。明確な語調で、すべきことのひとつひとつをひばりに教えるよつこ。

「良いかい、今、お前はとても悲しいかもしない。だけどね、ふんぱりな。絶対、燃えるんじやないよ。これは、お前のためだけに言つているんじやないからね」

「三船おかあわん」

ひばりは心の底からひばりを思いやつて生まれている三船の切言を腹にしまいこんで、力を振り絞り、手足に気合を入れた。

空っぽになつた心に力が少し戻えられ、動かぬと思つた身体はしなやかな硬さに満ちる。

なんとか自力を筋肉に注いだらしさ」とを感じると、三船はふつと微笑んだ。

「早くお行きー。」

背中を激励が打つ。ひばりはふりふりと廊下を出、眩暈をかみ殺しながら足を一步一歩前へ出した。

## 第五十一話「会いたい」

心の悲しみが鋭く重い杭となつて刺さり、ぐらぐらと見えない血を絶え間なく流させる。

朧気な頭で、息をするようにひばりは、大切な名を呼んだ。

「とういち、とういち……」

けして来てはくれないだるうとは分かつていた。だがその名を呼ぶと、ほんの僅かに心は痛みを和らげた。

人がひばりを追い越していき、ひばり後ろへと戻る。激しい流れの中、ひばりはなんとか渡り廊下まで来て、はたと足を止めた。

「……足袋。めりやす足袋」

三船に身ひとつで逃げろと言われた。しかし、めりやす足袋だけは忘れることは出来ない。

めりやす足袋は何枚か持つている。しかしあの一枚を燃やすわけにはいかなかつた。一番最初の、穴の開いためりやす足袋。他のめりやす足袋も大事だが、もっと大事なめりやす足袋。

苛めによつて廁にめりやす足袋を捨てられたことがあつたが、押入れの奥に仕舞いこんでいたそれは難を逃れたのだ。あれを忘れるわけにはいかない、あれは、絆そのものだから。

三階まであがつて、つか佐の座敷まで戻り、ひばりは簾筈を引いた。着物や小物の奥に、ぼろぼろのめりやす足袋を認め、そつと手に取る。

「あつ、あつた」

安堵すると、

「……仁平の服」

お富士がもし逃げるときこと渡してくれた風呂敷包みが田にとまつた。茶色いくすんだ色合いで暫く見詰めていると、胸がどくりどくじと高鳴った。

会いたい。

思いが湧き水のように噴き出す。

会つて、言いたい。

そうだ、自分はまだ何もしていない。やるべれりじが、ここに残つているじゃないか。

今ならば、この混乱に乗じて逃げたとして、お富士が罪に問われるのではないだらう。自分がだけの罪となる。それならば、

会える。

心の籠が外れて、ひばりはむんずと風呂敷包みを掻むと、結び目を解いた。

屏風の裏に回つて自分を包む邪魔ものを脱ぎ、仁平の服に袖を通して。仁平は男としては背の低いほうだが、着物は僅かにひばりの体型には合わず、大きい。

それでも、このような着崩し方をする江戸浪人はいるだらう、頬かむりをしてしまえば傍目からは分かるまい。それでこそ、この騒動だ。

舟代には足りる分の小銭を懷にしまってこんで、ひばりは胸に手を

置いた。

さつと、会える。

「何やつてるんだい」

冷たい声。漂う、麝香の香り。

「つか佐……姉さん」

頬かむりを握り締めてしばし立ち去りしてから、ひばりは振り向いた。

そこには裸に寄りかかり、氷の微笑を浮かべるつか佐がいた。白衣着に、髪を結わない長髪は乱れて、絡まる。床に臥せたせいで寝れきり、普段の流麗さは微塵もない。

しかしながら美貌によつて妖しく、別種の凄艶を漂わせていた。皮膚が怖氣立つ、美しさ。

「なんだい。まさか、ここから逃げるつもりか」

ひばりは既視感を覚えた。嫌な過去が頭をもたげる。「逃さない」

小島……！

「そうだ、あんたはここで燃えてしまえば良い。ここでわづかと、燃えてしまえ」

美佐の指を切り落としたときの小島にどこか似た風貌で、つか佐は揺らめき、一步を踏んだ。思わずひばりは後退する。

「つか佐姉さん、御戯れを」

「御戯れ？ 御戯れであるもんかい！」

由に平服から由に足が突き出で、ひばりの胸を捉えた。強靭な力で押され、簞笥に背中を打ちつけた。肺が急に縮められ、かはつと口から唾が飛び、咳き込む。

「ずつとずつと氣に食わなかつたよ、あなたのその由、その顔、その髪、全てが気に食わなかつた！」

ひばりの胸に鷹の爪よろしく食い込む、つか佐の足。それはどんどん噛んで、ひばりは激しい痛みに悶えながら首を振つた。

「つか佐、姉さん……」

「姉さんと呼ぶなー！」

罵詈が弾ける。

「あんたなんか妹分でもなんでも無いわー！ 憧へて憧憬へて、たまらない」

由粉でも塗つたように青ざめたつか佐の、阿修羅も逃げ出す眼。

「めりやす足袋なんか握つて……」

それがひばりの片手を掴む。

「ああ、もつと廻に落としてやれば良かつた」

「え……？」

ひばりは由を見開き、歯をわななさせた。その所作に、つか佐がけらけりと由尻をあげる。

「ああ、気付いてなかつたのかい。あははは、やまあ見る」  
もしゃと思い、ひばりの中でかちかちと事が新たに嵌つていく。

お富士が追求したとき、小島の禿たちはただただ怯えていた。それは偶然、廊下での悪態を聞いていたからに過ぎず、彼らが廁に捨てたという確証はなく、ひばりが有耶無耶にした。  
考えてみれば、彼らはどうしてもやりやす足袋や匂い袋がある簾笥にあると知っていたのだろう。そしてどうしてそれが、ひばりのものと分かつたのだろう。

麝香の芳香はつか佐の芳香。それは見世では当たり前の、誰でも知っていること。

寧ろ普通なうらば、それでこそお富士ほど親しくなければ、ひばりのものではなくつか佐のものとして、触れることを避けたはずだ。

「何でそんなことを」

今更に真相を叩きつけられ、ひばりは喘いだ。

つか佐は眉を片方ぴくんとあげると、  
「何で？ ジャア、なんであんたは、そんなにとりこちから貰えるんだ？」  
逆に問い合わせる。

「足袋も、芸も、あしらいまでもとらこちから恵んでもらって、これ以上何を望むんだい？ 私は何もなかつたよ。とらこちとはなんにも」

つか佐が大きく口を開け、絶叫する。

「……ああ、あの女が死んでせいせいた！」

大声をぶちまけて、つか佐の肩がぜいぜいと上下する。ふふふ、ふふふと笑みをこぼすと、ふいに、口がぐにゅりと下がった。

「なのに、ちくしょう、ちくしょう……」

両手で顔を覆つて髪の毛を振り乱し、つか佐はすすり泣いた。

「なんでお前なんだ。なんてわっちじやなくて、お前なんだ。そしてあの女なんだ。なんでだよお、なんでだよお、なんでだよお、」

姉女郎の胸中にずっと秘められていた感情。その暗く湿った劣情と嫉妬が、口々から滴る。

ひばりは心から、同情した。同じ男を思つ者として、胸がつかえる。

「つか佐ね……」

「呼ぶなって言つてんだろ、ひー。」

再び強く筆箇へ押し付けられ、ひばりは呻きを漏らした。

つか佐に宿る恋慕の炎が燃え盛る。錯乱の色を帶びて、つか佐はまた肩を揺らして顔を捻じ曲げた。

「燃えるんだ。丁度良い、こんなに丁度良いなんて、まるでどうじが火をつけたみたいだと思わないかい？」

血脈が走り、潤んだ目はうつとうと、耽溺に染まる。

「ここあなたと、燃えるんだ。そう、とらこちが望んでいのと思わないかい？」

残酷に問い合わせられた刹那、ひばりの中に霞がかっていた憐憫が

さつと、搔き消えた。

つか佐とはまた異なる、熱い決心がひばりの肋骨を猛烈しく押し上げる。思いのたけ、吹き荒れる。

「……わっちはこで燃えられたら、どれほど楽か」  
煌々と輝き、昇華する。

「でも、出来んせん。わっちはここで燃えるわけにはいかない。会わなければ、とらいたに会わなければ。わっちはまだ、といいちに何も言つていなし。何も言つてないんじやー!」

ひばりはつか佐の足首を掴んだ。そして瘦躯のどこからかと思つほどの力で、退けようと押しやる。

幼い双眸から滲む氣迫。それは阿修羅より妖しく、神々しかつた。か佐を貫いた。

「ここでは燃えんせん! わっちはこで燃えんせん……っ!」

慟哭に酷似した訴願。ひばりは尚も力を込める。

「どうぐだわい、姉さん」

その威圧は、一筋に天へと伸びる、烈火の如く激しかつた。

## 第五十二話「鳥籠から飛び立つ」

憑き物が落ちたかのようだ。

「何で……」

つか佐はぼとつと足を下ろし、そのまま崩れた。両の手をだらりと垂れ下げ、まったく虚脱しきつて、

「何でそんなに、あなたは……」

呟く。

「ひばりちゃん!」

廊下から、高い声が響き、つか佐の部屋へと転がり込んだ。息を切らしてやつてきたのは、お富士だった。

「ひばりちゃん……」

座り込むつか佐、そして一平の着物に身を包んだひばりを見やり、一言。

「似合つているよ」

「……お富士ちゃん」

一平な喧騒に紛れて立ち去りつとじてゐる自分の見やつて、微笑む朋輩に、田頭が熱くなる。ひばりは眉間にぐつと皺を寄せた。

そんなひばりにお富士は近寄ると、頬かむりをさつと取つて、くるんとひばりの頭に巻きつけた。深々と顔が隠れるように整えてから、わざと詰ぶ。

「仁平はわざに任せて、行きなれ」

「うる」

「ひばりちゃんの」と、わざ、忘れなによ  
「……うん」

ああ、お富士ちゃんにはいつも敵わない。とても愛らしくて、とても気が強くて、少し意地悪で、果てがないほど優しくて。だから応えよう、思えるのだ。

「行つてきまよ」

ひばりはぐつと頷くと、つか佐の部屋を後にした。早々と足を進めながら格子窓の外を見やると、火の手は京町一丁目から角町へと燃え移るとしていた。本当に火の手が早い。逃げ遅れた者もいるだろう。

寡黙にそれを認め、ひばりは先を急いだ。階段を降り切り、人の流れを見やつて、どう行つたら良いか思案し、裏手へ回ることを決める。

踵を返して強く一步を踏み込んだ、……その時。

遠くで奉公人たちに指示を出す三船と、目が合った。  
反射的に俯く。身体が血の氣を失い、凍りついた。

ばれたらうか……、ばれたらうか。

鼓動が耳奥まで響くほどに高まる。冷や汗が背中と脇を流れる。

「仁平、ちょっと」

三船が仁平を呼んだ。ああ、ああ、捕まってしまう。

「そこに最後のお客さんが残っているから、大門の方へ急いで案内してやつてくれ」

気付かれなかつた。

どつと安堵が降下して、ひばりは氣を引き締めた。大門まで連れられるらしい。今度こそ、ばれではならない。

肝に銘じていろと、仁平の足音が近づいてきた。

「お客さん、早く、こっちだ」

すつと通り過ぎ、混みやつた見世先ではなく、裏手へと回る。さつさと進む仁平の背中を追いつつ、隙をついて手足を汚した。こうすることで、大門では浪人として誤魔化す。

仁平は目が悪く、眼鏡と言うものをつけてはいるが、それでも人の手足などほんやりとしか見えない。無論、手足を汚したくらいでは、気付かないだろう。

見世を出て、仲の町から待合の辻、そして大門へと向かう。逃げ惑う人々の間を縫うように歩きながら、仁平はひばりに話を振つた。つの橋が架かつていやす。

ですがね、大門から行くと良い。避難用だからと橋は混雜して、火の手が近い大門の方が少ないんだ。もみくちゃにされないで、済みますから

大門まで、あと僅か。そこで仁平が立ち止まつた。  
「案内はここまででやんす。じゃあ、お行きなさい」

ひばりは仁平を追い越し、前へと進んだ。

「ええですか、大門です。今なら四郎兵のやつら殆ど、橋の方へ行つていい。俺が引き付けるから、行け」  
その言葉に、ひばりは足を一寸とどめた。  
どういづ。

「行くんだ！」

仁平の強い叱咤が背中を押す。ひばりはゆっくりと、大地を踏みしめた。一步、また一步と。

感慨無量が心を突き動かす。

お富士、三船、仁平の思いがひばりに力強い一步を与える。一步、また一步。

大金を残していったから？　いや、けして違う。

後ろ髪をひかれる。愚かな自分、我儘な自分。その自分を理解し、救いの手を差し伸べてくれる。そんな人々を、己の轍に置き去りにする。

振り向いてしまいたい、だけれども。

会いたい。

会いたい会いたい会いたい。

貴方に。

会いたい会いたい会いたい。

貴方といつ棘に、満たされているから。

## 第五十四話「ひばり心中」

そして、彼女は大川にいた。

大川に浮かぶ小舟の数々、それらは一点を囲むように漂っている。  
「へい、どいたどいたあ」

川の流れに乗つて、船頭らしく櫂<sup>かい</sup>で舟を操る、舟渡し。若いながらその見事な腕前は水を切り、他の舟をゆるりゆるりとかわして、舟の中央へと進む。

船には老若男女、身分も様々の者たちが乗つて、皆一様に同じ方向へ顔を向けていた。

油っぽい目は、好奇と怪奇、そしてなにより畏怖を宿<sup>しゆく</sup>らせている。感嘆し、ひそひそと囁きながら。

川の中央、水が淀む場所を人々は食い入るように見詰めていた。視線の先には竹の棒がいくつか差し込まれ、魚を探るための罠を張つてある。

そこにそれはいた。

網に藻と共に引っかかった、ぷかりと浮かぶ、それ。

彼女は 、ひばりは、ぼんやりと皆に倣つた。

点は大きくなり、人間の形へと像を結ぶ。あれは頭だ、あれは背中だ、あれは手だと心をとらつ。

「どうだい、あれがあんたの見たがつたものだよ……」

「もつと、近づいて」

「え、いいでええじゃないか」

水死体とあつて匂いも強いのだろう、見物は幾分か遠巻きで、しかし皆それで満足しているようだ。

こんなふうに求められるのは初めてなのだろう、薄氣味悪そうに舟渡しが眉を顰めた。

しかしひばりの横顔は真剣そのものだった。鬼気迫るものがあり、舟渡しはしぶしぶ、櫂を動かす。

周りの舟の群れから外れ、すっと進む一隻。皆の目が一旦それから外れて、ひばりの乗る舟を追った。ゆっくりと、ゆっくりと近づいて。

水の腐った匂いに、すえた異臭がひばりの鼻腔をついた。鼻が捻じ曲がりそうなほどの中臭。

「お密れん……」「

舟渡しが、蚊のなくよくな声を出した。構わず、ひばりは「近づいて」と強請る。命令でやけくそになつたのか、舟渡しは乱暴に水を搔き始めた。

ぐんと進む。

ひばりは一切目をそらすことなく、その姿を受け止めた。

ああ、いいいた。

それを掬い上げることも出来そつなく近づいた舟の上で、ひばりは打ち震えた。

服の色合にから分かる、若い男女の心中死体。体中をぐるぐると

縄で縛つて、ぴたりと身体を寄せている。一人は小さく、一人は対照的に大きかつたが、その様は驚くほど酷似していた。

水面に揺れる二人の長髪は海草に広がっている。身体は水を吸つて、着物や縄を引きちぎらんとするほど膨れていた。

瘴気を放つ皮膚は真緑で、藻が生えてしまつたのかと思わせる。目は白く濁りきって、剥き出しだ。

両方の顔は玉のように丸くなつていて、片方に大きな傷がある。もう片方にも傷があつて、喉がぱっくり割れている。

ふたつの水死体は身体を離れまいとするかのように身体を絡ませあい、縄でしつかと縫い付けて、川に身を委ねていた。

「とら……いち」

変貌しきつたその姿を目の前に、ひばりは呟いた。舟の淵に手をおいて、身を乗り出す。

「とらいち……」

凍りついた表情で名を呼び、ひばりは彼と対面した。彼は何も答えず、ただひたすら、ひばりではない女を抱きしめていた。

昔のことを思い出す。

彼は自分の母親を女ではないと言つた、そして自分を、女にしてやると言つた。

彼の言つたとおり、吉原はそれまで培つていた女という概念を覆す女たちが群れをなしていた。

だから彼女たちのように、女になろうと願つた。

「とらいち」

しかし女であることと、彼が愛を傾けるといふことは全くの別物で、本当に望んだものは得ることが出来なかつた。

吉原の女に近づけば近づくほど、離れていくもの。そうだと知つていたら、自分は女を願つたろうか。教えを希つただろうか。

否。

今だから分かる。きっと運命を拒んだに違いない。  
それはひとえに、愛していたからだ。きっかけなどなく、ただ魂が求めてしまつた。振り向かせるためだけに呼吸を繰り返した。

あの閑散とした貧しい故郷で殺されずに済み、売りに出されたとき、既に自分は死んでいた。河童となつていた。

ただ川の変わりに道を流れ、時を流れ、吉原に辿り着いた、河童。そして物。

河童に恋など、どちらちがするはずもない。  
物を通して見ていたものは、この世に唯一与えられた愛だつた。  
自分に僅かでも向けられるはずがなかつたのだ。

生きるも死ぬも、同じだ。

こんなにも、似ていた。

ひばりには何も残らなかつた、全てはこんなにも無駄だつた。

とらいち。

ひばりはそつと、手を伸ばした。

ぐぢやりという、腐つた肉を掴む感触がひばりの五指を伝う。瘴気が強い刺激を伴つて、目と鼻とを攻撃する。肉が崩れて、ひばりがとらいちに沈んでいく。

「ひいっ……」

舟渡しが息を飲む音が遠くから聞こえる。ひばりはそれを意識の外へと締め出して、上体を水面へと近づけた。

形のいい唇を軽く開き、そっと、とらいちの朽ちかけた唇に……、重ねる。

口内に広がる、生臭く、苦く辛い味。

藻の匂い、肉の腐った匂いがひばりの舌に躊躇つくる。

おぞましい筈の感覚。身体が拒絶するはずの味覚、嗅覚、触覚を、ひばりはひばりの全てで受け止めた。

痺れる。

唇が、下が、頬が、髪が、  
うなじが、腕が、乳房が、腹が、  
背中が、腰が、腿が。

痺れ痺れて、砕けそうになる。

本当はずつと、こんな風に口付けを交わしたかった。舌を絡ませ  
あい、互いを奪つようつに食りたかった。

それなのに。

そつと顔をあげて、ひばりはとらいちの向こうにお鈴を見た。

「あなたが」

ひばりはぐつと、一人を繋ぐ縄を握る。

「あなたがいたから、どちらにちは苦しんだんだ  
縄をぐいと引っ張つては、押した。何度も何度も。

「もうこれ以上苦しめないで」

水が跳ねる。それとともに肉片や悪臭も跳ね、飛び散った。どちらとお鈴が、どんどん崩れていいく。崩れるほどに骨が露わになり、骨までも一人、絡み合つていると気付く。

まるでひとつの固まつのように、二人の手はしつかと繋がつていた。

身体を貫く絶望が、ひばりの身体に残った最後の力まで奪う。ひばりは悶える手をそのままに、とらいちを再び俯瞰した。

「ね、とらいち  
ゅつくつと、舟の淵に足をかけて。

「わっしむ、そつちに行つていいでじょ」

ひばりはそう語りかかると、寂しくて残酷な世界の理に、身を投げ込んだ。

## 第五十五話「生と死、性と私」

輝く水面を中から見上げ、思つ。河童が川に帰るのだ、と。煌々とした光と、暗澹たる闇を同時に纏い踊る水。とらいちの形骸にしがみつきながら、その美しさに胸が安らいだ。

……求めてやまなかつたことがある。

ずっと前だらう、真昼に夢を見た。その夢では、つか佐ととらいちが身体を重ね、まぐわっていた。そういう風に、思い込んでいた。しかし本当は違くて、つか佐は成長した自分という願望だつた。あの時とらいちに抱かれたのはつか佐ではなく、自分だつた。

ずっと、ずっと求めていた。ひばりはずつと、とらいちに抱かれたかった。未熟な肉体を呈上し、貪つて欲しかつた。

覆いかぶさつて、蒸れる瘦躯を抱きしめて、愛して。

乱暴でも良い。射るような鋭い目と、逞しい腕を捧げて、この身體をほどだし。ひとつも余すことなく甘い舌を這わせて。

膨らんだ男らしい喉仏を、脈の浮き出た指に夢中になつて、うつむいて、舐めて、噛んで、ねぶつて、じらして……。

思つだけで、身体は熱くなつて痺れて、感じてしまう。大人になりかけたあの場所が、濡れてしまう。

背徳などひとつもない、互いに魂から許しあうのだから。乳房は膨らみかけて、割れ目はまだ隠れることを知らない。そんな

な身体でも、奪われてしまふことを望んだ。いつぞ、犯されていると怯えるほどに激しく、指で弄つて。

身体の中央であり先端、どちらかを受け止めるための場所に指を添えて。赤く膨らむあの場所を攻めて。

きつともつととせがむから、今度は隠し持つていた大きくて太くて、硬くて、ちょっと痛い肉の杭を晒して。口に含んでなぶるから、隅まで高まつたら、ぐつと奥まで貫いて。

愚か。

慚愧も羞恥も超えてしまつて、全てが愚かしい。浅はかで醜い夢、汚らしい幻想だ。自分に与えられたのは、この光と闇とに揺れる朧で儚い冷たさ。苦しや。

ぼけりと、大きな気泡がひばりの唇を割つて出た。それは上へとのぼり、水面に真珠のような円を描く。波紋は広がり、呼吸の出来ない苦しみが頭蓋骨を搖さぶつた。目の前が白み、意識が遠のしていく。

好きなように生きる。

とらいちが言つて残していった言葉。

でもとらいち、生きているんも死んでいるんも、同じなんだあ。

なら、好きなように死のう。

じじが今日から飼われる鳥籠だ。

大門をくぐった時、とらいちはそう背中を見せた。あの時のとらいちは何故か小さく見えて、目を擦つてから仰いだら、また大きいとらいちだった。

とらいちが、振り返る。

くちべらとして売られて、江戸に行く道中。とらいちは素早い足取りでいつも先に行ってしまった。

ひばりはいつも置いていかれでは、離れてしまつた距離の縮まるのを待たれ、距離をつめたら、また引き離される。

とらいちは振り返つては歩き、振り返つては歩き。  
ひばりはそれについていつと必死に歩いた。足にまめが出来るほど、何日も何日も。

本当に終わる日が来るのだろうかと思つほど歩き続けた。あんなにも遠く江戸を離れて、自分という物を買いに来た。

それもすべて、一人の女性のために。お鈴のためだけに。

最後に、お前の日。

とらいちがにたりと笑い、指をさす。

病氣ではないのに、右片方だけ薄い緑色をしている。お前のような目を持つ人間を探して、俺はこんな北まで來たんだ。

全ては、お鈴のため、思い人のためだけに。

ひばりにとつて、生きるも死ぬも同じじよ。それはどちらにひとつてひばりが、生きるも死ぬも同じだから。自分は、河童だから。

本当に、そうか？

陽炎のよつた世界で、ふいに見知らぬ声が聞こえた。誰だひつと思つて、ぼんやりと手繰つて、ある人物を思い出す。

木下ハ尋。

本当に、そうだったか？

強く問い合わせる言葉。朦朧とするひばりに迫り、揺り動かす。溶解する意識はそれの意図を定めない。

はて……。

ひばりのかわりに、誰かが頭を捻つた。

白子は探しれば江戸におりますが。

あの時は傷つきすぎて聞き流した蘭医の言葉が、さつと横切る。

といいちがまた、振り向く。

歩いては振り向き、歩いては振り向く。

ひばりは歩き続ける。まめを潰し、足を引きずつて、痛みに耐えながら歩き続ける。

一人ぼっちの道中、とてもとても長い道のりを。

びひして、といいち？

ひばりは耐えかねて、棒のような足を止めた。もう歩くのは辛く

て、立ち止まってしまったひばりを、とらこちが見下す。

歩くのは辛くて、どうしてこんなに歩くのか分からなくて。

江戸にもまだほこるのと、元のとびつて奥州まで来たの？

ひばりは目に涙を浮かべて、とらこちに訊ねた。  
いつもの仮面、笑顔なんか知らないとこ顔で、とらこちは目  
を細めた。

好きなよう、『生れひ』。

唐突に穏やかな言葉が絶句のよひに聞こえた。天啓のよひに響き、  
轟き、全身を包む。

ひばりは戸惑いながらも、その言葉の奔流に魂を広げた。

急に、ひばりの身体が、水面から一気に浮上する。  
誰かが押し上げるような強い感覚が背中にある。温もりを持った、  
圧迫感。

次第にひばりのまじらでいた意識がはつきりと、鮮明に、開け  
た。

お鈴は奥州の生まれだと、とらこちは過去を話したときにもつん  
と付け加えたことがある。そして彼女は、奉公人であったと。  
ひばりの故郷で奉公となると、ふたつの意味を持つ。

ただ奉公に出されたか、口べらしか。

思い出す。誤魔化すように流暢だった部分。お鈴は口べらしだっ  
たんだと。だから、田舎に帰るのを拒んだ、と。

好きなように、生きる。

生きる、生きる。

あの遠い道のりを、どちらにどちらにして選んだのか。

ひばりが白子だったから？

北に白子がここと聞いたから？

違う、そうじゃない。

歩きながら、とらいたは何度も振り返った。  
けして距離が縮まることはなかつた、けれど、彼はずつと待つてくれた。

ずつとずつと、置いていくことのないようこの、待つていてくれた。

ひばりは、心を傾けていた。

自分は歩いたのではない、歩かされたのでもない。  
ずつとずつと、距離は縮まることはなかつたけど。

生かされていたのだ。

とらいたは白子だから、美しいからひばりを選んだのではない。  
あの日売りに出された子ども、一番幼く、売れ残つてしまいそうな  
子どもを、彼は選んだのだ。

全では、生かされるために。

とらいたを失つたひばりの心は血を流し、深い闇に墜ちていた。

闇が払はれるまで気づかなかつた。

自分はこんなにも心を傾けられていたのだ。自分は河童ではない、人だ。生かされている、人間だ。

どこへいこうと、どこまでも流れようと、生きるも死ぬも分からなくなつても、自分は生かされそこには心があつた。

湧き上がる感情、突き抜ける喜怒哀楽。

心を失うことなど、出来はしない。思いのたけをもつて人は人であり、心は人の中にある。

心はあり続けたのだ、あの日にも、あの場所にも。

生かされている、ずっと生かされていた。互いの心に触れ合い、見えない温もりを分かち合つて、こんなにも思われ、こんなにも救われ、こんなにも生かされていた。

河童じやない。河童なんかじや、ない。

とらいちだけではない、きっととらいちが愛した人の心もひばりを生かしたに違いない。そして……。

吉原の者たちの顔が浮かんだ。

お富士、三船、仁平、つか佐、禿たち、奉公人たち……、彼らによつても。

目の前で、“生きろ”と、涙する人によつても。

仄かな視界が輪郭をとり戻し、ひばりの中に五感が蘇る。

全身を倦怠感と、突き刺すような靈感が襲う。鼻腔や喉が燃える

ようになに熱く、ずきずきとした痛みがあつたが、ひばりは懸命に声を震わせた。

「どして、いつも……ふつと、現れる、の……木下の、」  
ひばりが目覚めたと気付いて、八尋はほつと安堵した。横たわるひばりを思いがけないほど大きな力と温もりを持つて抱き寄せると、「無事で良かつた」と田に涙を滲ませる。

八尋の身体は湿っていた。まるで川に飛び込んだように濡れそぼり、髪も乱れて、唇が紫色に染まっている。  
「吉原に火が出たと聞いて駆けつけた。その途中で見かけて……、なんであることを

背中に砂利の感触がある。左右に視線を投げやると、ひばりは自分が河原にいると知った。土手を降りた場所、丁度舟渡したちと話をしたあたり。

人垣が出来ていて、その中心にいる。

「あの、一人は？」  
「一人？……心中のことかい？まだ浮かんでいるよ  
「ひとつになつて？」  
「ああ」

八尋が相槌をするのを認め、ひばりは鉛のように重たい腕をわななかせながら上げて、八尋の胸元を掴んだ。

「お願ひ

ひばりの切なる懇願。

「葬つて、あの一人を。もう一度と、悲しい思いをしないで、ずっと、一人で、いられるように……」

八尋はひばりの手を男らしく角張った手で包むと、頬を緩めた。  
「君を頼むように、あの人から言われたからね。安心してくれ」

柔和で包み込むような語り口。そして少し叱咤を含めた声色で、「生きることも死ぬことも同じではないよ。同じなわけないだろう」

言い切ると、溜まつた涙の零が、くるりと光を放つて揺れた。いつの間にか深い夕日色が差し込み、八尋の顔は造形とは別種の、えもいわれぬ美しさをたたえていた。

零がちぎれて、ひばりの頬に舞い墜ちる。  
ひばりは軽く目を瞬いてから、

「ねえ、旦那」

親に甘える子どものように八尋を掴む手を引いた。  
「わっち、河童じやなかつた。ひばりだつたよ……」

悟るまで時間がかかつた、大切なこと。ひばりの身体の全て、髪の毛ひとつにだって染み込んでいること。  
「だから、吉原に戻ろう」

ひばりはそうして、口元を微動させた。

あしいことはまた異なった素朴な笑み、素のひばりから生まれる、たおやかな笑みがそこにはあつた。

生きるための力に満ちた、芯のある微笑み。

「あれはわっちの、鳥籠だから……」

## 最終話「汗ばむ鳥籠」

果てしない蒼に、白粉をはたいたような天空。春の近づいた風ことを知らせる突風が時折吹き付ける。

江戸は相変わらずぎつちりと瓦が羅列し、その隙間を多くの人々が生きている。

そんな魂の息吹に満ち溢れた街の、ある場所に四角く白い区画があつた。

……吉原だ。

吉原は、どこもかしこも白い木材が骨組みとして組まれ、朝から晩まで大工が右往左往していた。中でも大きく組まれたものが吉原は中央、仲の町にあつた。

大黒柱がいくつも立つ。梁は高く、どうしりと構え、威風堂々としている。あと幾ばくかの時が流れれば、豪華絢爛の言葉にふさわしい大見世が出来ることだろう。

大海屋という看板をたてて。

見世の骨組みを内から、ひばりは仰いでいた。

蒼弓に浮かぶ白い梁を目で楽しみ、切り倒したばかりの真新しい樹の芳香を肺で楽しみ、ひばりは口から息をついた。それを目にして、

「ひばりちゃん、あんまり深呼吸ばかりしていると木屑が喉に刺さるよ」

お富士が腰に手をあて、呆れたように注意した。

「だつて、良い匂いざんしょ」

「それもそうだけれど」

談義する一人。その後ろからぬつと影が現れ、後ろから割り込む。

「良い匂い、ねえ。禿は気楽で良いもので」

眼鏡の小男こと仁平は、木材片手に皮肉を呴いた。

「あらあら、仁平知らない？ 大海屋が新しく建つたら、わっちらもお富士ちゃんも新造にあがりんす」

「そつそつ、わっちら禿じやあありんせん」

ひばりとお富士、肩を組み合いにやりと歯を見せる。

「お前等が新造？ 世も末だねえ。」

仁平は負けじと毒づいた。

と、そこへ、

「あんたたちつ！ そこでなに油を売つているんだよ！」

肝が冷やがる叱責の声。大海屋楼主、三船その人である。三船は恰幅の良い身体に合つた、きりりとした表情で二人の禿を睨めつける。

「ほうら、戻るよ。それとも二人してここで大工どもと夜を明かすかい？」

三船の一言にひばりとお富士は顔をあわせると、大慌てで三船に駆け寄つた。

「まつたく、これから舞だ小唄だと稽古があるんだろうに。見世が焼け落ちた今だからこそ、腹に気合いを入れな。病みあがりのつか佐に迷惑かけんじやないよ」

二人は『あい』と口を揃えて三船の後を追つた。

刹那、一陣の疾風が舞う。

反射的に、ひばりは手をかざしたものの、細かな塵が目に入り、ちくんと痛んだ。

仕方なく、腕から下がっていた巾着袋を紐解き手拭いを取り出す。その拍子に違うものが落ちそうになつて、ひばりはふためき、それを掬い上げた。

ほつと胸を撫で下ろす。

その手が握るのは、所々に穴があき、汚くくすんだ、めりやす

足袋だった。

とらいちのことを、不意に思い出す。

もしかしたらあの世で、落ち着けと不遜な言葉を投げやつたかもしれない。思い人を隣に置き、手を繋ぎながら。

空のどこかに消え入った影を探す。

蒼は震えるほど蒼く、白は沁みるほど白い。風は流れて、川のよう

うに流れ、日々を押しやっていく。

どこにもいない、彼はどこにもいない……、けれど。

忘れぬ心は今もここにある。彼が教えてくれたことひとつひとつが血となり肉となり、ひばりという人間になつていて。新造にあがれば名は変わるだろう、しかし、心までは変わらない。与えられた命までは変わらない。

生き続ける限り。

たとえ、この命が死きてしまつても。

生かされていたことは刻む。そしてこれからも生かされ続けてゆく。

叶わぬ恋をした。

思い出すだけで今でも汗ばんてしまつほど熱い恋を。

でもね、無駄では、なかつたよ。とらこちも、そりであります  
しう?

生かされること、恋をするといつこと。人が人である限り、それは深く、尊い。

だから生き続けられる。

「ようし……」

めりやす足袋を巾着に仕舞い込むと、ひばりは空に向かつて大きく声を出した。

「利取る利取ると鳴きましょか!」

その澄んだ声は鈴の音のよつに凜と響いて、遠く遠く、どこまでも、果てのない彼方へと翼を広げていった。

## 最終話「汗ばむ鳥籠」（後書き）

最後まで「汗ばむ鳥籠」を読んでいただき、有難うございました。  
そして春工ロス2008を楽しんでいただき、有難うございました。  
た。

心からの感謝を、あなたに。

**外伝「残響」（前書き）**

どちらの外伝というか、一次創作的なものです。

障子を開けると、最愛の女性が喉を搔つ切つていた。“彼”はしばし呆然と立ち尽くし、みるみるうちに彼女の血を吸つていく布団と、彼女の茫然とした表情とを凝視した。

「あ、うああ……」

彼女の傍には、彼女の介護を手伝うために医師が呼んだ青年が、蒼白の唇を歪めている。青年の愚鈍な呻きに、彼はようやく身体を動かした。

一步、また一步と進むことに、彼女が自身の喉に押し当てているものが剃刀で、剃刀は彼女の喉から血を滴らせていて、剃刀の周囲は赤い柘榴のように開いていることを知る。無残で美しい傷口から留め止めなく血が流れ、はひゅうはひゅうと呼気が漏れるのを、彼は見下ろし、首を捻つた。捻りながら、彼はだがそれを疑問だと感じていなかつた。来るべき時が来たのだと、彼女の病が発覚したときから決まつていた定めがやつて来ただけなのだと悟り、無意識に観念していた。

ああ、そうだ。そう思つたとき、自然と彼の身体は動いていた。彼女の前に跪き、彼女の喉を食らう剃刀を、剃刀を抱く華奢な彼女の指先を包み、押し倒した。

「ひい……！」

傍らで青年が息を飲んだが、彼には聞こえなかつた。ただ一心に、泣きもせず力を込め、静かに彼女の血を浴びる。彼女の血に染まる。全てはそう、決まつていたこと。温い鉄の匂いの中で、彼は小さく微笑した。もし自分が狂つたら、殺して欲しい。そう彼女が望んでいたから。

けれど、けして一人には、しない。

彼は乱れた布団を整えながら、その身体を抱えあげた。うたかたのようく軽い彼女に、少しだけ驚く。昔は、出会った頃は、自分と変わらない重さのある少女だったのに。彼が大きくなつたのか、彼女が小さくなつたのか、その両方なのか。それとも……。

「人殺し……、人殺し……」

青年が蠅に似た動作をしながら、震える。その咳きを背に、彼は彼女と散歩に出かけた。彼にはやるべきことがいくつか残されている。彼女を失えば何もなくなるだろうと想っていたはずなのに、たくさんのことやり残すような生き方をしてしまつた。

「悪いが俺の我侭に、少し付き合つてくれ」

心臓を止めた彼女に囁く。彼女は苦悶の表情を浮かべていて、彼にはそれが嫉妬のように思えて愛おしくて、心が晴れやかになる。これほどまで澄んだ感覚は、何年ぶりだろう。

部屋に戻り、謝りながら大きな日曜の布袋に彼女を入れ、血を軽く拭つてから着替える。そしてやるべきことのひとつを終えてから、街を出た。

愛しい人を抱ぎながら、彼は人の多い街を歩き始める。季節は冬で凍えるほど寒いというのに、何処を行つても人が行き交い、人生の色と匂いに満ちている。冷たい街はこんなにも瑞々しく、温かいものだつたのか。

「なあ、綺麗だな……」

郷愁のような感覚が胸を締め付けて、耐え切れず彼は溜息をついた。吐息は白んで、空気に溶け込む。惚けたように歩いていると、彼は目的の場所に辿り着いた。

瓦屋根に白塗りの壁の、店だった。老舗の風格を呈し、大きな暖

簾と看板が架かっている。それらをくぐつて中に入ると、多くの人が「ごつ」た返していた。店番の一人、男が彼に目を合わせると、跳ねるよじに立ち上がった。

「あなたは」と男は目を丸めると「こちりにどうぞ」  
思つたよりも機敏な様に、彼は軽い安堵を覚える。門前払いになるかもしれないことも考えていたからだ。

彼は中庸ではない。大柄で、髪も髭も不精に伸びて、眉間に猛禽のよくな皺が寄つている。無頼そのものの様相である。少なくとも男の店を尋ねられる格好をしていない。体よく追い払われても仕方がない。そんな彼を案内したということはつまり、彼にとつて目的を達成するに相応しい男ということだ。

彼の予想を裏切らず、誰も居ない座敷の障子を閉めて開口一番、男は「どうなさつたんですか」と訊ねた。

「頼みがあつて、来た」

「頼み?」

「あの子に惚れているのなら、生きる意味を伝えて欲しい。あの子にとつて、生きるも死ぬも同じことだ。止めてやつてくれ」

彼の言葉に男は眉根を顰めた。素早い反応だ。何のことか、理解したのだろう。

「俺は上手く教えてやれそうにない、そういう生き方を選べなかつた」

「あなたは、何者なのですか。彼女の何なのですか」

男は唇をわななかせた。嫉妬、あるいは憤りを含む口調は、針のように冷たく鋭い。当然だ、彼は男にとつて、実に重大な発言をしている。穏やかそうな男の、気高い矜持をさかなるような言葉を。

「俺は、あの子を」

つばを飲み込み、続けた。

「娘だと思っている」「

驚愕に男が蒼白になる。

「娘……？」

「落ち着け。血は繋がっていない。それにこれは、俺の勝手な言いがかりだ。あの子は知らない。知らせないよ」、「育てた

男が膝をつく。彼もまた、男の前に座り、視線を合わせた。ゆっくりと、染み込ませるように言葉を紡ぐ。

「あの子は、口減らしだ。それを俺が買って、育てた」

「それは……。それじゃあ、ただの人買いでしょ」

厳しく、的確な返し方。彼は独白の前に冷静でいられる男の度胸に、胸が躍るのを感じた。良い男を見つけたものだと、誰のために夢想する。

「だから言ひがかりといった。これは賭けだ。無謀で……もう無意味だ」

「どうひじ」とです」

「鳥籠は何のためにあると思つ? 鳥を飼うための場所だと思つか?

「何を……」

「己を誇るためか、躰けるためか、愛てるためか……、なんのためか

「何を!」

囁み付のように声を荒げる男に、彼は落ち着き払つて答えた。

「吉原は鳥籠だ。鍵はもうすぐ開く」

更に続けようとして、彼は唇を噤んだ。障子の向こうから聞こえる店先の音が変わり、耳をすます。どうやら店が終わる頃合いらし

い。致し方なく、彼はようめくように腰をあげた。男は彼に懇願に似た視線を絡めているが、彼は気にせず障子に手を掛けた。

「あなたはこれから、何をするつもりですか！」

たまらず、男が身を乗り出す。しかし彼の袖を掴むには緩すぎた。男が知るべきことは既に語られていた。だから彼は振り向くことなく、一言だけ置いた。

「誓いを尽くす」

障子は開けられ、高い音を響かせて閉じた。

彼が街に再び出ると、ちりちりと雪が踊っていた。可憐なそれは暗雲から生まれる。黒くつねるそこから、どうしてこんなにも純白で儂いものが舞い降りるのだろう。男は幼い疑問を抱き、赤ん坊を背負いなおすように布袋を上げた。

「雪国は貧しくて、食べるものがないと言つていたな。みんなひもじい思いをしてくると。本当に、そうだったよ。こんな寂しい、暗闇のようで」

虚空を仰ぐ。

「だけど、お前たちを。……めんこいものを、生むんだよな

野獸のような彼の背中は、酷く困ったようこそ、どこか嬉しそうこそ、窮屈だ。荒くれ者にそぐわない少年っぽい仕草で、彼は首を竦めると、歩みを進めた。最後に行く場所は何年も前から決めていた。迷うことなど、あるはずもなかつた。

月もない。灯もない。漆黒の中に水の流れる音がする。田が闇に慣れてしまつと、ためざめとした墨汁色の川が田の前に広がつていて。そのたもと、土手の下まで降りると、腰を下ろす。夏なればよくこる、螢もない。

彼は漸う、彼女を下ろした。彼女の身体は硬く固まり始めていて、布袋から出すのに苦労する。

「すまなかつたな」

抱きしめてみると、すっぽりと胸におさまってしまう。極限まで痩せた身体は加えて、醜く臭い。普通の人間なら田を背けてしまう彼女をあやすようにして、彼は川を眺めた。

形骸を失つていくよに、彼は自分自身が脱力していくを感じる。そうして、心のどこかが途方にくれているのを知る。

ああ、少しは戸惑つていたのだと。ずっと、迷つていたのだと。もう、終わりで良いんだと。

彼女の体温が、強く沁みて、  
「相変わらず、手が冷たいなあ」

気付けば彼は泣いていた。

子どものように号泣していた。

「愛してる、こんなにも愛しているんだ。ずっと、ずっと愛してい  
たのに」

切なる思いに、慟哭に、しかし彼女は返事をしてくれない。何故  
だろう、何故こうなつてしまつたのだろう。何がいけなかつたのだ  
ろう。一体、どうしてだろう。

「悪かつた、俺が悪かつた。だから、お願ひだ、死なないで。お願  
いだから」「

絶望に喰われる。魂まで強姦される。あの日の記憶が、千切つた  
猶予が、彼をさいなむ。

「お願ひだから……あなたを、愛しているから……」

傲慢な渴望。彼女を撫で、縋りつく。

だから、彼女は、

「おらも、とらさまとしたいことがあります

笑つた。

「……ん?」

振り向き、潤んだ瞳で微笑む彼女に、彼はきょとんとした。彼女は、赤い頬を更に赤くさせる。

「熱が下がつたら、雪を見ましよう。春になつたら、桜を見ましよう。その後に、もし、おらの身体が瘡毒でなかつたら……、弟や妹を、迎えに行きてえ」

「弟や、妹?」

「北に残してしまつたから。もし、もし生きとつたら、おらが引き取りたいんです。お江戸なら、このお江戸なら、きっとなんとかなるでしょ」

彼女ははにかむと、

「一番下だと年だいぶ離れてつから、もしかしたらまた生まれてることもしんねえから、おらが、おつかあの代わりで。そしたら、みんな喜びます、はい」

それから不安げに顔を伏せたまま彼を見上げた。

「(二)迷惑はかけませんから……」

唐突な彼女の願い事に、彼は眉を下げる。その反応に彼女ははつとして、俯いた。その動作がまるで叱られた子猫のようで、慌てて、「違う、違う!」

彼女の両頬を手で覆い、仰がせた。

「おつかあつてことは、俺がおつかうだなあつて、思つて、嬉しくて、『じめん

みるみるうちに、彼女の表情が緩んでゆく。まるで花のよつて咲き誇る、笑顔。そんな彼女が可愛くていじらしくて、

「そうだな。熱が下がつたら雪に、桜に、北へ行こう。お前としたいこと、お前と合わせたらもっともっと増えるな。百年じゃあ足りない、これじゃあまるで……」

彼の頭の中に、ある言葉が浮かぶ。今の思いを形容するには、この言葉以外ないように思え、彼は運命的な驚きに痺れ、口にした。

「千年の恋だ……」

人は死ぬ。百年も経たずに滅びる。だが肉に、魂に、こんなにも熱い思いを抱くことが出来るのか。灼熱より熱く、雷撃より眩しく、どれだけ抱いても果てそうにない思いが。そして思いを共有することができるとが出来る。

彼は感動に打たれ、強く強く彼女を抱きしめた。彼の愛情に彼女が呼応し、寄り添う。死ですら一人を分かつことは出来ないと証明するかのように。二人は抱き合い、そつと口付けを交わした。

唇と唇が繋がり、もつれ合い

……冷たい。

硬く、冷たく、全ては狂おしいほどに苦しい。

彼の眼前にはただ、暗澹たる現実がある。自分で命を絶とうとした愛しい女性、彼女の命を奪つた元凶である自分、錆付いた空想すら無碍にする悲壮、土塊のように冷えた、笑顔。

それらが逆らえぬ濁流のような人生そのものとなつて茫然と圧し掛かり、矮小な一人の男を噛み碎こうとする。

しかし。

一筋の光がある。何も出来なかつた彼が、必死に抗い残した希望がある。自分ですら行動の理由を定かに出来ず、がむしゃらに隠し守り続けた、誰も気付かない密やかな愛が残されている。

生きてそれに会つことはもう叶わない。守るために強固な場所に

自らが閉じ込めたのだから。自分を偽りながら選んだあの場所に。  
あの鳥籠に。

悔いることはない。

そうだ。……ただひとつを除いて。

「もつと、おぶつてやりたかったなあ」  
彼女を抱きかかえ腰を上げると、闇へと悠々、歩き出す。先ほど  
まで丸まつて小さかつた背中は大きく。  
彼らしく大きく、どこか、笑っているようだった。

外伝「残響」（後書き）

本当に一次創作のような話ですね……。『J要望』が多かったので、外伝としてとらいたの、「汗ばむ鳥籠」では時間の都合によつて省いてしまった設定を書いてみたのですが、別人のようになつてしまつて、すみません。少しでも楽しんでいただけたらいいのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9184d/>

---

汗ばむ鳥籠

2010年10月9日05時30分発行